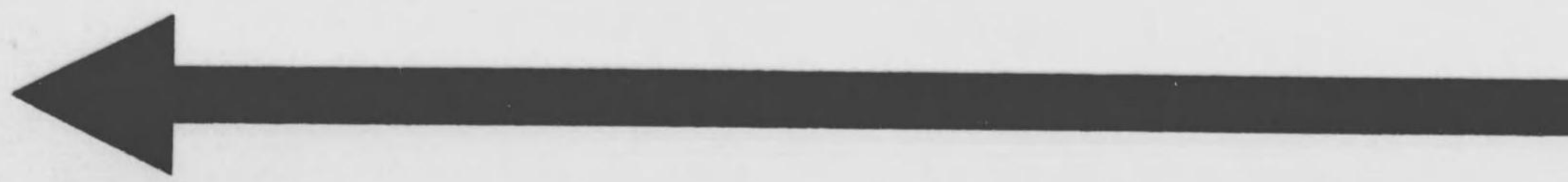




始





353  
283





353-283



國譯密教

論  
釋

10. 5. 31  
內交



國譯密教論釋第三

目次

一、國譯大毘盧遮那成佛經疏

二十卷の内

自卷第一至卷第十……………小吉  
田祥  
慈真  
舟雄  
國譯……………

國譯密教論釋第三目次終







(二) 實相三昧阿字不生の理を指す

(三) 衆生數 有情を指す、即ち十界の正報を云ふ。  
(四) 非衆生數 非情物を指す、即ち十界の依報なり。  
(五) 有常 常住無爲の法、眞如實相の理を云ふ、眞諦なり。  
(六) 無常 俗諦有爲の法を指す、生住異滅の四相に従ひ遷るが故に無常と云ふ。  
(七) 自在神力加持 三昧 自在神力加持の定にして、法身如來は此の三昧に住して當經を説き玉へるなり。

(二) 所意見 好み見る所。

(三) 五情の所對、眼耳鼻舌身の五識を五情と云ふ。

(三) 千目 帝釋天を指す。此の天に千眼を現する故に千目と云ふ。  
(四) 已下品號を釋す。

(五) 釋論 小品般若の釋論たる大智度論を指す、今の文は第三十八卷にあり。

せらると雖も、而も減ずる所なく、諸法の(二)實相三昧を究竟して、圓明無際なれども、而も増す所なし。是の如く等の種々の因縁を以て、世間の日は喩とす可からず。たゞその少分相似せるを取るが故に、加ふるに大の名を以てして、摩訶毘盧遮那と曰ふなり。

成佛とは、具足せる梵音には成三菩提と云ふべし。是れ正覺正知の義なり。謂はく如實智を以て、過去未來現在の(三)衆生數(四)非衆生數(五)有常(六)無常等の一切の諸法を知るに、皆了了に覺知するが故に、名けて覺と爲す。而も佛といふは、即ち是れ覺者なり。故に省ける文に就きて、たゞ成佛と云ふなり。

神變加持とは、舊譯には、或は神力所持と云ひ、或は佛所護念と云ふ。然もこの自證の三菩提は、一切の心地を出過して、現に諸法の本初不生を覺る。是の處は言語盡竟して、心行もまた寂なり。若し如來威神の力を離んぬれば、即ち十地の菩薩なりと雖も、尙ほ其の境界に非ず。況や、餘の生死の中の人をや。余時に世尊往昔大悲願の故に、而も此の念を作したまふ。若し我れたゞ是の如くの境界に住しなば、即ち諸の有情は是れを以て益を蒙ること能はじ。是の故に、(七)自在神力加持三昧に住して、

普く一切衆生の爲めに、種々の諸趣(二)所意見の身を示して、種々の性欲所宜聞の法を説き、種々の心行に隨うて觀照門を開く。然も此の應化は毗盧遮那の身或は語或は意より生ずるに非ず。一切の時處に於て起滅邊際俱に不可得なり。譬へば、幻師が咒術力を以て藥草を加持して、能く種々未曾有の事を現じ、(三)五情の所對に衆心を悅可せしむれども、若し加持を捨つるときは、然も後に隱没するが如し。如來金剛の幻も亦復是の如し。緣謝すれば則ち滅し、機興すれば則ち生ず。事に即して而も眞なり、終盡あることなし。故に神力加持經と曰ふ。

若し梵本に據らば、具に題して、大廣博經因陀羅王と云ふべし。因陀羅王とは帝釋なり。言はく、此の經は是れ一切如來の秘要の藏にして、大乘衆教に於て威德特尊なること、猶ほ(三)千目の釋天の主たるが如し。今、經題太だ廣きが故に、具に存せず。  
〔(四)入眞言門住心品〕とは、梵本に具に二題あり。初には修真言行品と云ひ、次には入眞言門住心品と云ふ。竊に入住の義を思へば、修行を兼ぬるを以ての故に、煩文を離れて、たゞ其の一を著すなり。

眞言とは、梵には漫怛囉と云ふ。即ちこれ眞語・如語・不妄・不異の音なり。龍樹の







(二) 劫燒火三災  
劫末の火を云ふ。

(三) 智度論第二卷  
の文なり。

餘氣なほ在るが如し。又草木の薪火の、力薄きを以ての故に灰炭盡きざるが如し。如來は(一)劫燒火の一切都盡して、烟もなく炭もなきが如し、故に婆伽婆と名く。復次に帝釋の聲論には、女人を謂うて薄伽とす、これ欲求の因縁あれば、能く煩惱を息むる義なり。又これ所從生の義なり。金剛頂宗には即ちこの義を翻じて女人と云ふは、即ちこれ般若佛母なり。無礙知見の人、皆悉くこれより生ず。それ志求の因縁ありて、ともに相應することを得れば、煩惱戲論皆悉く永く息む。世間の欲熱のしばらく止息すと雖も、而も實には更に増すが如きには非ず。密教は直に宣ふべからざるを以ての故に、多く是の如くの陰語あり。學者當に類に觸れて、これを思ふべし。又薄伽梵とは、即ち有の聲を帶す。人の多く資財を有するをば、持資財者と名け、金を有するを以て、持金者と名くるが如く、如來は殊勝の徳を具するを以ての故に、持衆徳者と名く。(三)釋論にまた云はく、婆伽をば徳と云ひ、婆をば有と云ふ、是れを有徳と名く。婆伽をば名聲と名け、婆をば有と言ふ、是れを有名聲と名く。一切世間に有徳名聲の佛の如くなる者なし、則ち其の義なり。經の中に多く譯して世尊とするは、これ歎徳の惣稱なり。西方の語法にては言尊者に及ぶをば、敢て直に其の名をさすして、必ず先づ

(一) 當經能説の教  
主の分齊につきて  
古來多異に於て  
地身古義に於て  
義法に於ては持  
説の相違に於て  
當段の文の訓み  
大に異なる。今  
よつて義相傳の  
し新義の説によ  
ば一處に於ては  
毘盧遮那本地法  
云ふは佛の如來  
の其の佛の如來  
り佛の受用身な  
し。古義に於て  
薄伽梵は教主の  
見住如來の如  
句新住處に於て  
來持新住處に於  
と見るなり。教主  
を明す。已下住  
處成就

其功徳を嘆ず、大智舍利弗、神通目捷連、頭陀大迦葉、持律優波離等と云ふが如し。故に此の經の中に、例して薄伽梵毘盧遮那と云ふ。今此の方に文勢に順じて、或は世尊を以て下に居くなり。

(二) 經に「薄伽梵如來加持に住す」と云ふは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如來と云ふは、是れ佛の加持身、其れ所住の處なり、佛の受用身と名く。即ちこの身を以て佛の加持住處とす。如來心王諸佛住にして、而も其の中に住したまふ。既に遍一切處の加持力より生ず、即ち無相法身と無二無別なり。而も自在神力を以て、一切衆生をして、身密の色を見、語密の聲を聞き、意密の法を悟らしむ。その根性に隨うて種々に不同なり。即ちこの所住を加持處と名く。

(三) 次に又、加持住處を釋嘆するが故に、「廣大金剛法界宮」と云ふ。大は謂はく無邊際の際に、廣は謂はく不可數量の故に、金剛とは實相智に喩ふ。一切語言心行の道を過ぎたり、適に所依なし。諸法を示さず、初中後なし。不盡不壞にして、諸の過罪を離れたり。變易す可らず、破毀す可らず、故に金剛と名く。世間の金剛寶に三事の最勝あるが如し。一には不可壞の故に、二には寶中の上なるが故に、三には戦具の中に勝



(二) 釋論 智度論 第四十七卷に出でたり。

(三) 此宮 廣大金剛法界宮を指す。古佛過去久遠劫來の佛を指す。又は本覺佛なりと云ふべし。

(四) 摩醯首羅天宮 色界頂第四禪天の自在天王宮を指す。

(五) 釋論 智度論 第九卷 五種 無煩、無熱、善見、善現、色究竟の五天を指す。已下衆成衆の惣表の文を釋す。

(一) 自然覺 本有本覺を云ふ。その自然覺を成するは始覺なり。

(二) 菩提義 法を指す。佛陀義 人を指す。

(四) 大空 空有の二邊見を斷じて不生を覺るを大空と云ふ。無相 その體自性なるを云ふ。或本には無明に作れり。義釋も亦同じ。已下住處成衆の別説の文を釋す。信解 十地を指す。

れたるが故に、これ(一)釋論の三種の金剛三昧の中の喩と、意大に同じ。法界とは、廣大金剛の智體なり。此の智體とは謂はゆる如來の實相智身なり。加持を以ての故に、即ち是れ眞實の功德に莊嚴せらるゝ處の妙住の境、心王の所都なるが故に宮と曰ふ。(二)此の宮は、これ(三)古佛成菩提の處、謂はゆる(四)摩醯首羅天宮となり。(五)釋論に云はく、第四禪の(六)五種は那含の住處なり、淨居天と名く。是れを過ぎて以往に十住の菩薩の住處あり、また淨居と名く。號して自在天王と曰ふ、是れなり。今此の宗の明す義は、自在加持神心の所宅なるを以ての故に、名けて自在天王宮と曰ふ、謂はく、如來有應の處に隨うて、此の宮に非ざるは無し、獨三界の表に在るにあらず。

「(七)一切持金剛者皆悉く集會す」とは、次に妙眷屬を明す、如來この宮の中に在すとき、獨處すとやせん、眷屬ありや。故に此の中に乃ち無邊の眷屬ありて、常に集會する所なりと云ふ。謂はゆる執金剛等なり、梵に伐折羅陀羅と云ふ。此の伐折羅は即ちこれ金剛杵なり。陀羅は是れ執持の義なり。故に舊譯には執金剛と云ひ、今は持金剛と云ふ。兼ねて深淺の二釋を得たり。義に於いて勝れたりとす。故に文便に隨うて、互に其の辭を爲す。若し(八)世諦常途の(九)所表ならば、則ち生身の佛に常に五百の執金剛神

ありて、翊從侍衛すと云ふ。然も此の宗の密意は、伐折羅は是れ如來の金剛智印なり、是の如くの智印、その數無量なり。能く此れを持する者亦復無邊なり。然る所以は心王所住の處には必らず塵沙の心數ありて以て眷屬たり。今心王の毘盧遮那、(一)自然覺を成す、その時に一切の心數即ち金剛界の中に入りて、如來内證の功德差別智印と成らずと云ふことなし。是の如く智印は、だゞ佛と佛とのみ乃し能く之を持ち玉へり。

(二)菩提義に約すれば、即ち無量無邊の金剛印あり。(三)佛陀義に約すれば、即ち無量無邊の持金剛者あり。此の衆德は、悉く皆一相一味にして、實際に到るに由るが故に集會と名く。若し少分も未だ等からず、一法も未だ満たざるをば、即ち一切集會とは名けず。然も自在神力に加持せらるゝを以ての故に、即ち心王の毘盧遮那より加持尊特の身を現す。その時に無量の法門眷屬一々に皆執金剛の身を現じて、如來威猛の大勢を顯發す。譬へば帝釋の心に金剛を執つて修羅の軍を破するが如く、今この諸執金剛も亦復かくの如し。各一門より(四)大空の戦具を持つて、能く衆生(五)無相の煩惱を壞す。故に以て相況ふなり。

「(六)如來の(七)信解遊戯神變より生ずる大樓閣寶王は、高くして中邊なし、諸の大妙寶







(一) 當段は衆成就の別説段たる十九執金剛の文を釋す。乃至虚空遊歩執已下第十七金剛を略して乃至云ふ。(二) 前後實には前後のみに局らす。前後左右四方を云ふ。(三) 制斷刑賞事を檢して疑なきだめ罪を對し功を賞するを云ふ。(四) 理に喩ふるなり。菩薩を指す。四大内眷屬を略せるも、兼れて見ざるべし。内眷屬は智門を司り。大眷屬は悲門を司る。徳なり。如來自證の徳なり。

皆師子座と名づく。今此の宗の明す義は、師子と言ふは、即ちこれ勇健の菩提心なり。初發意より以來、精進の大勢を得て怯弱あることなきこと、猶ほ師子の執縛する所に隨うて、必ず獲て遺ふこと無きが如し。即ち是れ自在度人無空過の義なり。若し淺略の釋ならば、言はく諸の菩薩深心に法を敬うて、乃至身を以て佛を荷載するは師子座なり。故に菩薩の身を師子座とす。と曰ふ也。

(一) 其の金剛を名けて、虚空無垢執金剛乃至金剛手秘密主と曰ふ。是の如きを上首として、十佛刹微塵數等の持金剛衆と俱なり。及び普賢菩薩・慈氏菩薩・妙吉祥菩薩・除一切蓋障菩薩等の諸大菩薩に前(二)後に圍繞せられて、法を演説したまふ、とは、次に同聞衆を明す。問うて曰はく、佛所説の經に何が故にか先づ住處眷屬を明かすや。答へて曰はく、譬へば國王の若し政令あるときは、必ず先づ外朝に出居して、(三)制斷刑賞す、時の史著記して、某の時の王某の處に在して某甲の大臣等と集議して、是の如く等の教命ありと云ふことは、境内をして信伏し之を行ふに疑はざらしめんと欲するが故なるが如し、法王も亦爾り。將に大法を説かんとするに、必ず(四)大眷屬の菩薩衆の中に於いて證明をなさしむ。是の因縁を以て、聞く者信を生ず。信心に由るが故に能く

(一) 虚空無垢九執金剛の中第一金剛は明す。此の心徳を司る。菩提(二)執證戲論一切の煩惱を指す。

(三) 復次釋は五轉縁記の相を喩を以て示す。第一金剛は中央發心の徳なり。(四) 第二虚空遊歩執金剛を釋す。修生の菩提心を行きを司る金剛なり。(五) 發行東方の修行の徳なり。發心の意にはあらず。(六) 此の金剛は南方證菩提の徳を示す。四大(七)地水火風を云ふ。(八) 此の金剛は四方入涅槃の徳を司る。

是の如くの法の中に入つて、修行し得證して、倍また信を生ず。故に先づ衆を列ぬるなり。

(一) 虚空無垢執金剛とは、即ち是れ菩提心の體なり。一切の(二)執證戲論を離れて、淨虚空の障翳あることなく、無垢無染にして、亦分別なきが如し。此の如くの心は即ち是れ金剛智印なり。能く此の印を持するを虚空無垢執金剛と名く。

復次に虚空遊歩執金剛とは、遊歩はこれ不住の義・勝進の義・神變の義なり。淨菩提心は一切の法に於いて、都て所住なきを以て、而も常に進んで萬行を修し大神通を起す、故に虚空遊歩と曰ふ。(三)復次に虚空無垢執金剛といふは、即ち阿字門平等の種子なり。(四)無住の行を修するは、譬へば種殖の方便をもて、根芽漸く生ずるが如し。故に次に(五)發行の金剛印を明す。

(六) 第三に虚空生執金剛とは、萌芽已に生じて(七)四大と時節とを縁とし虚空礙へずして念念に滋長するが如く、菩提心も亦復是の如し。無所得を以て方便とし、萬行を縁として眞實生を得。眞實生とは謂はゆる大空生なり、故に虚空生と名づく。

(八) 第四に被雜色衣執金剛とは、萌芽増長して莖葉花實漸次に滋繁するが如く、菩提







(一) 此の金剛は速疾神通の徳を司

(二) 大空 本不生の理を指す。

(三) 此の金剛は修生の菩提心の徳を示す前の第一虚空無垢執金剛は本有の菩提心の内證にして、此の金剛は修生の徳なり。  
(四) 此の金剛は猛利斷惑の徳を以て内證す。  
(五) 此の金剛は化他の大悲の徳を以て内證す。  
(六) 此の金剛は三種縁起の徳を司るなり。  
(七) 大空 生の一字は焉字なるべし無用なり。大空は阿字本不生の理證にて種子諸佛自證の功徳は三摩耶尊形なり。

第十一に(一)勝迅執金剛とは、勝は謂はく大空なり。(二)大空は即ちこれ遍一切處なり。故に能く速疾神通を起す。此の乘に住する者は、初發心の時に即ち正覺を成す。生死を動せずして涅槃に至る故に勝迅と名くるなり。

第十二に(三)無無垢執金剛とは、即ち是れ一切の障を離れたる菩提心なり。譬へば眞金の體性純淨にして、若し種種に練冶し、衆寶を以て摩瑩すれば倍また光明あるが如し。則ち知んぬ、初質は尙ほ微垢と共に住す、能く此の畢竟淨の金剛印を持すれば、因つて以て名とす。

十三に(四)及迅執金剛とは、此の及の字梵天には是れ忿中の忿、利中の利なり、義を以て翻すれば猶ほ刀及の如し。此の金剛利智を持って一切難斷の處悉く斷じ難滅の處悉く滅す。故に以て名とす。

十四に(五)如來甲執金剛とは。如來甲は謂はゆる大慈なり。此に由りて身を嚴るが故に、衆生を攝護し佛事を施作す。一切の煩惱の爲めに傷られず、能く降伏し沮壞する者なし、故に以て名とす。

十五に(六)如來句生執金剛とは、句をば住處に名く、即ち(七)大空生なり。諸佛自證の

功徳は如來の性より生ず、此の加持身は如來自證の功徳より生ず。阿字門を離れざるを以ての故に如來句生と名く。

十六に(八)住無戲論執金剛とは、謂はゆる大空に住する慧なり。謂はく縁起の實相は無生無滅不斷不常なり、亦去來一異に非ず。是の處は諸の戲論息みて法涅槃の如しと觀す。是の如くの智印を持するが故に以て名とすることを得。

十七に(九)如來十力生執金剛とは、謂はく佛の方便智なり。是の如くの妙權は何れの處よりか生ずる、謂はく如來の(十)十智力より生ず。是の如くの印を持するが故に、以て名とすることを得。

十八に(十一)無垢眼執金剛とは、即ち如來の五(十二)眼なり。菩提心畢竟淨なるを以ての故に、一切種を以て一切の法を觀するに了々に見聞覺知して罣礙する所なし。能く是の如くの金剛印を持す、故に以て名とす。

十九に(十三)金剛手秘密主とは、梵に播尼と云ふ、即ちこれ手掌なり。掌に金剛を持つと、手に執ると義同じ、故に經の中に二名互に出すなり。西方には(十四)夜叉を謂つて秘密とす。其の身口意速疾隱秘にして了知す可きこと難きを以ての故に、舊翻には或は

(一) 此の金剛は如來の徳を司る。大眷屬中の文殊菩薩と同時なれども、其の時大悲化他の徳を表さじ、今は大智自證の徳を表せり。故に體同異と云ふべし。  
(二) 此の金剛は如來の後得方便智を司る。  
(三) 十智力 智度論第廿四卷に廣く説けり、處非處智力、等の十力なり。  
(四) 此の金剛は如來の五眼の徳を司る。  
(五) 五眼 肉、天、眞、法、佛の五眼なり。  
(六) 此の金剛は上來の諸金剛の總徳なり。  
(七) 夜叉 能戰、傷者、又は提疾鬼等と譯す。







(二) 願行 五大願  
さ、その願より起  
る五相三密行さ  
なり。

(三) 此の菩薩は慈  
悲喜捨の四無量心  
を司る。

(三) 此の菩薩の梵  
號は文殊室利と云  
ふ。今は化他說法  
の徳を司る。  
(四) 衆徳 三密莊  
嚴の衆の功徳。

(五) 此の菩薩は斷  
惑の徳を司り、又  
大定の徳を司る。  
余 如來淨眼 衆  
生本有の如來の淨  
眼佛智を云ふ。

所起の(二)願行及び身口意悉く皆平等にして、一切處に遍せり。純一妙善にして、備に衆徳を具す、故に以て名とす。

(三) 慈氏菩薩とは、謂はく佛の四無量心なり。今慈を以て稱首とす。此の慈は如來種姓の中より生じて、能く一切世間をして佛家を斷せざらしむ、故に慈氏と曰ふ。上に普賢と云ふはこれ自證の徳なり、本願已に滿じ衆生を化して此の道を得しめんと欲ふが故に、次に之を明す。

(三) 妙吉祥菩薩とは、妙は謂はく佛の無上の慧なり、猶ほ醍醐純淨第一なるが如し。室利をば翻じて吉祥とす、即ち是れ(四)衆徳を具する義なり。或は妙徳と云ひ、亦是妙音と云ふ。言はく大慈悲力を以ての故に、妙法音を演べて一切をして聞かしむるが故に彌勒に次いで之を明す。

(五) 除一切蓋障菩薩とは、謂はく障をば衆生の種種の心垢とす。能く(六)如來の淨眼を翳して開明すること能はず。若し無分別の法を以て諸の戲論を滅するは、雲霧消除して日輪顯照するが如し。故に除蓋障と云ふ。如來の諸有る所作悉く皆此の一事の因縁の爲めなり。故に妙音に次いで之を明す。復次に行人般若波羅蜜を學ぶと雖も、若し禪

定なければ猶ほ盲者の日光に遇うと雖も能く爲す所無きが如し。故に文殊の妙慧に次て除蓋障三昧を明す。

此の四菩薩は即ち是れ佛身の四徳なり。偏闕する所あれば則ち無上菩提を成ずること能はず。是の故に上首たるを列ねて以て塵沙の衆徳を統ぶるなり。

(二) 大智度論第四卷。

諸大菩薩とは、具に梵文を出さば應に摩訶菩提薩埵と云ふべし。(二)釋論に云はく、

菩提をば諸佛の道と名け、薩埵をば衆生と名け、或は勇心と名く、是の人盡く諸佛の功徳を得んと欲うて其の心斷す可からず破す可らず金剛山の如し、是れを薩埵と名く。

復次に此の人心能く大事の爲めに退せず轉せず、大勇心あるが故に多くの衆生の中に大慈悲を起し、大乘を成立し能く(三)大道を行じて(四)最大の處を得るが故に、必ず能く說法して一切衆生の(五)大邪見、(六)大愛、(七)大我の心等の諸の煩惱を破す、故に名けて摩訶薩埵とす。(七)阿闍梨の云はく、具に正義に據らば當さに菩提索多と云ふ可し。

此の索多とは是れ忍樂修行堅持不捨の義なり。然も聲明に是の如くの法あり。若し文字を論すればその義正しと雖も、音韻或は流便ならざれば便を取つて之を安ずることを得。故に世の論師謂うて薩埵とす。傳習の者其の辭に順隨せり。

(三) 大道 三密行  
兼れては六度行。  
(四) 最大處 佛果  
なり。  
(五) 大邪見 煩惱  
の名なり、正知見  
に反するを云ふ。  
(六) 大愛 貪煩惱  
なり。  
(七) 大我 我慢、  
瞋恚等なり。  
(八) 阿闍梨 善無  
畏三藏を指す。



(一) 瑜伽宗、金剛頂宗を指す、今は五秘密經の意による。

(二) 化城、法華經の化城喩品の三百餘の化城の譬に由り、涅槃を指すな

(三) 此等十九軌、金剛、四大菩薩並に其眷屬を指す、右四方八方を指す、今左右等を略せしなり、(四) 已下、歡欣の句を釋す、通序にも非ず、別序にも非ず、(五) 閻浮提、須彌山の南方に當り、大州にして、即ち我等所住の國土なり。

(一) 代謝相推、次第に移りかへるを云ふ、(二) 已下、如來圓明日を明す、過現未三際なり、(三) 已下、如來加持日を釋す、(四) 食頃、頃とは小時間なり、(五) 食頃、頃とは小時間なり、(六) 第一實際妙極境、阿字、不生、摩訶衍を指す。

(七) 道跡、先佛の道跡たる三密行なり。

(一) 瑜伽宗に就いて云は、薩埵に略して三種あり。一には愚童薩埵、謂はく六道の凡夫なり。實諦の因果を知らず心に邪道を行じ苦因を修習し三界に戀着し堅執して捨てず、故に以て名とす。二には有識薩埵即ち二乘なり。纔に生死の過患を覺知して、自ら出離を求め涅槃に至ることを得。三には化城に着保して滅度の想を興し、如來の功德に於て未だ願樂の心を生ぜず、故に以て名とす。三には菩提薩埵、無上菩提は一切の臆度戲論種種の過を出過せり。是れは一向純善白淨微妙にして、譬類す可らざるの義なり。即ちこれ衆生の本性不思議の心なり。能く是の如くの成道の事を忍びて、願樂し修行し堅固にして動せず、故に菩提索多と名く。是の如くの人の中に於て、功業最大にして一切衆生に轉授するに堪能なり、故に名けて摩訶薩埵とす。

(二) 此れ等の大衆、前後に大日世尊を圍遶して、無量の身口意を以て供養恭敬す、聽法の爲めの故なり。

次に群機嘉會の時に同く聞く所の法を明して、即ち經に、「謂はゆる三時を越へたる如來の日、加持の故に身語意平等句の法門なり」と云ふ。然も此の經、閻浮提に流布するに略して十萬の偈あり、若し十佛刹微塵の大衆、各各に廣く身口意の差別の法

門を演ぶれば則ち限量なし。此の説法の時分復當さに云何。故に結集者、爾の時に佛日に住して而も法を演説すと云ふ。世間の時分の如きは則ち過去未來現在長短の劫量種種の不同あり。且く日四天を行くに約せば、一周の晝夜に各初中後分あり。乃至三十時等刹那不住にして、代謝相推す、淨眼を以て之を觀するに、三際の際了に不可得なり、無終無始にして亦去來なし。即ちこの寶相の日は圓明常住にして湛たること虚空のごとし、時分修短の異なることなし。然も佛の神力を以ての故に、瑜伽行者をして無量劫に於て、食頃の如く謂はしめ、或は食頃を演べて以て無量劫とす、延促自在にして、咸衆機に適へり、定相として得べきこと無し。故に如來日と云ふ。

此の如くの時の中に佛何れの法をか説きたまふ。即ちこれ身語意三平等句の法門なり。言はく如來種種の三業は皆第一實際妙極の境に至れり、身は語に等しく語は心に等し。猶ほ大海の一切處に遍じて同一鹹味なるが如し。故に平等と云ふ。句とは梵には鉢曇と云ふ、正翻には足とす。聲論には是れ進行の義、住處の義なり。人の進歩するに足を舉げ足を下す、其の迹の所住の處を之を鉢曇と謂ふが如く、言辭句逗の義も亦是の如し。故に同一の名なるのみ。今此の宗に就かば、謂はく此の如くの道跡







河の如く恒河沙の無量に恒  
て敷ふべからざる  
が如く無量無数な  
ることな示す

往いて觀察す。十方各(二)如恒河沙の世界を過ぎて、皆如來を見たてまつるに、坐を起  
たずして法を演説したまふ。乃至周(三)十方を極め其の神通勢力を盡せども亦復是の如  
し。然して後に還歸(四)つて方に除疑天女を見るに佛を去ること遠からず、見(五)に三昧に入  
る。便ち是の念を作す、我れ聞く、此の天女は無量の三昧門に通達せりと、我れ當  
に之を觀すべし、今何れの定にか住すると。又心力を盡して之を觀するに、其の心の  
所行の處を測らず。無量の天鼓を聚集すること一一に皆須彌山王の如くして、神力を  
以て同時に聲を起して出定せしめんと欲すれども、而も得ること欲はず。乃至佛の言  
さく、我れ未だ菩提心を發(六)さざりし時、是の天女已に能く此の三昧に住せりと。即ち  
これ無邊際(七)の義なり。是の如く毗盧遮那普く十方一切の世界に於いて、一一に皆佛の  
加持身を現じたまふ。是の一一の身に各十佛刹微塵數等の菩薩金剛の大衆あり、この  
諸大衆の諸根相好亦復無邊なり、(八)胡麻油の如く法界に遍滿し、中に於いて空際(九)の處  
なし。又國王に大庫藏あり、若し須(十)ひて人に示すときは則ち自在に開發して之を陳布  
するが如し、故に莊嚴藏と云ふ。復次にこの諸大衆は但し佛の威神力を以ての故に、  
是の如くの不思議の境界を見ることを得。如來若し加持を捨つるときは即ち現前せず、

胡麻油の如く法界に遍滿し、  
中に於いて空際の處なし。  
又國王に大庫藏あり、若し須  
ひて人に示すときは則ち自在  
に開發して之を陳布するが如  
し、故に莊嚴藏と云ふ。

般舟三昧を修し、  
神護持を蒙るときは、  
能く父母生身を以て十方の佛  
を見ること晴夜の雲なきに仰  
いで衆星を見るが如し、法音  
を聽聞することも了了無礙な  
り、然も此の境界は行者の心  
淨に由るが故に生ずるか、佛  
の加被に由るが故に生ずるか。  
若し内心に由ると云はば即ち  
これ自性より生ず、悉く皆外  
道の論議に異らず。自他無なる  
を以ての故に和合も亦無なり。  
又復因縁なくして成就すること  
を得るに非ず。何を以ての故  
内因外縁随つて闕ぐる所あれば  
即ち現前せざるが故に。當(十一)  
さに知るべし、是の如くの莊嚴  
の相は顯はるゝ時も所從來なく、  
隱るゝ時も亦所去なし、畢竟  
平等にして如を出でざるが故に。

その自心の現量の能く及ぶ所に非ず。若し行者内(十二)に般舟三昧を修し、神護持を蒙  
るときは、能く父母生身を以て十方の佛を見ること晴夜の雲なきに仰いで衆星を見る  
が如し、法音を聽聞することも了了無礙なり、然も此の境界は行者の心淨に由るが故に  
生ずるか、佛の加被に由るが故に生ずるか。若し内心に由ると云はば即ちこれ自性よ  
り生ず、若し佛力に由ると云はば即ちこれ他性より生ず、悉く皆外道の論議に異らず。  
自他無なるを以ての故に和合も亦無なり。又復因縁なくして成就することを得るに非  
ず。何を以ての故内因外縁随つて闕ぐる所あれば即ち現前せざるが故に。當(十三)  
さに知るべし、是の如くの莊嚴の相は顯はるゝ時も所從來なく、隱るゝ時も亦所去なし、畢竟  
平等にして如を出でざるが故に。  
經に「毗盧遮那佛の身或は語或は意より生ずるに非ず、一切處に起滅邊際不可得な  
り。而も毗盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切處一切時に有情界に  
於いて眞言道句の法を宣説したまふ」と云ふは、此れは佛の莊嚴藏を轉釋するなり。  
無盡無邊際なる所以は。如來の遍一切處常住不滅の身に異らざるを以てなり。常に起  
滅なしと雖も而も能く一切の三業を以て、普く十方三世の一切時處に於いて、最實の







(一) 異方便門の義に於いて、等流身所説の法門を指す。  
 (二) 六趣、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天を云ふ。  
 (三) 蘊、阿頼耶、蘊は色受想行識の五蘊なり。此の五蘊の所依となる所の第八阿頼耶識を指して蘊の阿頼耶と云ふ。  
 (四) 四不生、自、他、俱、無因の四不生なり。

爾の時に無所住を以て進心息まず、第四地を滿せんが爲の故に、復眞言法要に依つて方便修行して五地に入ることを得。是の如く次第に乃至十地を満足するまで、唯一行一道を以て而も正覺を成ず。若し(一) 異の方便門に於いて密意を開顯するも、亦皆是の如き寶乘を離れず。緣と業とより生ずとは、謂はく有情癡愛の因縁に爲つて身口意の種種の虛妄不清淨の業を造つて、是の如くの業に乗じて、(二) 六趣の身を生じ輪廻を増長して備に諸苦を受く。今平等の三業清淨の慧門を修すれば、一切の(三) 蘊の阿頼耶の業壽の種子皆悉く焚滅して虚空無垢の大菩提心に至ることを得。一切如來平等の種子悲藏の中より法性の芽を生じ、乃至莖葉花果諸の法界に遍滿して萬徳開敷の菩提樹王を成ず。然も(四) 四不生の義を以て之を觀するに、都て所起もなく亦起處もなし。當に知るべし、此の生は即ちこれ大空生なり。故に有情類の業壽の種を除いて復芽種生起することありと云ふ。復次に如來所現の十佛刹微塵數等の諸の善知識及び法界門假令次第に觀聽せば、則ち無量無邊阿僧祇劫にも周遍す可らず、佛日の加持を以ての故に會坐の頃に於いて皆悉く現前せり。即ち是れ將に此の經を説かんとして不可思議神通の瑞相を示す。文殊師利白毫所照の萬八千土の諸の菩薩の種種の因縁は皆是れ菩薩の

(一) 開權顯實、權方便の門を開いて眞實相を顯示するを云ふ。

(二) 已下正宗分の釋なり。  
 (三) 彼衆會、内大ニ眷屬などを云ふ

(四) 乃至經文二百九十四字を省略して乃至と云ふ。  
 (五) 人、瑞相段の機根を指す。  
 (六) 前、瑞相段を指す。

道を行すと觀見して、即ち諸佛將に(一) 開權顯實して法華經を説かんと欲すと知るが如く、當に知るべし、金剛手等も亦復是の如し。普く加持世界にして唯し平等の法門を説くを見て、即ち如來將に遍一切乘自心成佛の教を演べんとすと知る。故に下の文に問ふ所これに乗じて生ずるなり。

「爾の時執金剛秘密主(二) 彼の衆會の中に於いて、坐して佛に白して言さく、世尊云何が如來應供正遍知一切智智を得たまふ。(三) 乃至是の如くの智慧は、何を以てか因とし、云何が根とし、云何が究竟する。」とは、如來自證の智は設ひ神力加持を以ても亦(四) 人に示す可らず、(五) 前に奮迅示現無盡莊嚴藏と云ふは皆外用の迹のみ、智者その條末を見て則ち其の宗本を喻ること、象迹の衆群に超絶して其の踴躍する所倍復深廣なるを觀て、其の形を觀すと雖も當に此の象は身力必ず大なりと知る可きが如く、又迅雷の雨を澍いて能く鳥獸をして震死せしめ、百川奔湧して山を懷ね陵に襄るとき、其の本を測らずと雖も當に此の龍は威勢必ず大なりと知るべし。今諸の大衆も亦復是の如し、如來無盡の身口意能く一時に普く法界の衆生に應じて、妙に根宜に合ひ曲に佛事を成すと觀るを以て、即ち知りぬ、如來の智力は必ず一念に於いて普く群機の本末



(二) 照俗の權  
諸差別を照す所の  
權方便差別の化他  
の智を云ふ。

(一) 安樂 常樂我  
淨の四徳の一を出  
す、しかも實には  
此の四徳を該ぬる  
意なり。  
(二) 釋論 智度論  
第二卷  
(三) 阿闍梨 善無  
長三藏  
(四) 釋論 智度論  
第二卷

(一) 後世田 生死  
輪廻の田地を田と  
云ひしにて未來の  
生死の後有を云  
ふ。

(二) 釋論 智度論  
第二十一卷

(一) 釋論 大智度  
論第二十七卷の文  
を注意して引證す。  
(二) 薩婆若多  
薩婆那と同じ、那薩  
多相通なり。

の因縁を鑿み究竟じて無礙なり。(一) 照俗の權すら尙は爾り、其の契實の境界は當に復云何。若し法然らずんば微迹の尋ぬ可き有らんや。我已に盡く觀る、然るを是の法は何に従りて之を得と云ふことを知らず。故に執金剛手衆會の疑心に因つて佛に問うて言さく、云何が如來應供正遍知此の一切智智を得たまへると。梵本に但他揭多と云ふは、但他是れ如の義なり、揭多は是れ來の義、知解の義、説の義、去の義なり。諸佛の如實の道に乗じ來りて正覺を成じたまふが如く、今の佛も亦是の如く來りたまふが故に如來と名く。一切の諸の佛法の實相の如く知解し、知り己りて、亦諸法の實相の如く衆生の爲めに説きたまふ。今の佛も亦是の如し、故に如實智者と名け、如實説者と名く。一切の諸佛是の如くの(二) 安樂の性を得て、直に涅槃の中に至れり。今の佛も亦是の如く去りたまふ故に如去と名く。(三) 釋論には具さに四義を含めり。然るを古譯には多く如來と云ひ、有部の戒本には如去と云ふ。(四) 阿闍梨の意は如去、如説を存せり。今且く古きに順じて題するなり。

梵本に阿羅訶と云ふは、阿羅はこれ煩惱なり、訶はこれ害の義、除の義なり、(五) 釋論には之を殺賊と云ふ。佛は忍進鎧甲を以て持戒の馬に乗り、定の弓慧の箭を以て、外

には魔王の軍を破し内には煩惱の賊を滅す、故に以て名とす。又阿をば名けて不とし羅訶をば生と名く。謂はく佛心の種子(一) 後世田の中に生せず、無明の殼皮脱る、が故に。復次に阿羅訶とは是れ應受供養の義なり。是の如くの功德あるを以ての故に以て名とす。

梵本に三藐三佛陀と云ふは、三藐をば正と名け、三をば遍と名け、佛陀をば知と名く、故に正遍知と曰ふ。(二) 釋論に云はく、若し人ありて、何を以ての故に但佛のみ如實説、如來、如去の故に最上の供養を受くべしやと云はく、佛は正遍智慧を得るを以ての故なり。正をば諸法の不動不壞の相に名け、遍をば一法二法とするに非ざるに名く。故に悉く一切の法を知つて餘なきを以て、是れを三藐三佛陀と名く。然も此の宗の中には佛陀を覺と名く、是れ開敷の義なり。謂はく自然の智慧によつて遍く一切の法を覺ること。盛りに開敷せる蓮華の點汗あること無きが如し。亦能く一切衆生を開敷す、故に佛と名く。

梵に薩婆若那と云ふは、即ちこれ一切智智なり。(三) 釋論に云はく、(四) 薩婆若多とは即ち一切智なり。一切は謂はく名色等の無量の法門に各一切の法を攝す。是の如く無



(一) 一相異相 同  
(二) 漏相無漏相  
(三) 有漏無漏相  
(四) 有爲無爲相

(五) 菴摩勒果 印  
(六) 度に産する一種の  
(七) 果實にして梨に能  
(八) く似たる形をなし  
(九) その味甘酸なりと  
(十) 云ふ  
(十一) 論第四卷に於て  
(十二) 釋尊過去世に於て  
(十三) 修行せし時、然燈  
(十四) 佛(即ち定光佛)よ  
(十五) り當來世に佛とな  
(十六) りて釋迦牟尼さま  
(十七) らくべき旨を記前せ  
(十八) られたるなり。今それ  
(十九) を指すなり。六道  
(二十) の凡夫を云ふ。六道  
(二十一) の性欲。性質樂  
(二十二) 欲なり。

(一) 生の醍醐味を指す  
(二) 沙彌の七地を指す  
(三) 生落迦(地獄)を指す  
(四) 生落迦(地獄)を指す  
(五) 生落迦(地獄)を指す  
(六) 生落迦(地獄)を指す  
(七) 生落迦(地獄)を指す  
(八) 生落迦(地獄)を指す  
(九) 生落迦(地獄)を指す  
(十) 生落迦(地獄)を指す  
(十一) 生落迦(地獄)を指す  
(十二) 生落迦(地獄)を指す  
(十三) 生落迦(地獄)を指す  
(十四) 生落迦(地獄)を指す  
(十五) 生落迦(地獄)を指す  
(十六) 生落迦(地獄)を指す  
(十七) 生落迦(地獄)を指す  
(十八) 生落迦(地獄)を指す  
(十九) 生落迦(地獄)を指す  
(二十) 生落迦(地獄)を指す  
(二十一) 生落迦(地獄)を指す  
(二十二) 生落迦(地獄)を指す  
(二十三) 生落迦(地獄)を指す  
(二十四) 生落迦(地獄)を指す  
(二十五) 生落迦(地獄)を指す  
(二十六) 生落迦(地獄)を指す  
(二十七) 生落迦(地獄)を指す  
(二十八) 生落迦(地獄)を指す  
(二十九) 生落迦(地獄)を指す  
(三十) 生落迦(地獄)を指す  
(三十一) 生落迦(地獄)を指す  
(三十二) 生落迦(地獄)を指す  
(三十三) 生落迦(地獄)を指す  
(三十四) 生落迦(地獄)を指す  
(三十五) 生落迦(地獄)を指す  
(三十六) 生落迦(地獄)を指す  
(三十七) 生落迦(地獄)を指す  
(三十八) 生落迦(地獄)を指す  
(三十九) 生落迦(地獄)を指す  
(四十) 生落迦(地獄)を指す  
(四十一) 生落迦(地獄)を指す  
(四十二) 生落迦(地獄)を指す  
(四十三) 生落迦(地獄)を指す  
(四十四) 生落迦(地獄)を指す  
(四十五) 生落迦(地獄)を指す  
(四十六) 生落迦(地獄)を指す  
(四十七) 生落迦(地獄)を指す  
(四十八) 生落迦(地獄)を指す  
(四十九) 生落迦(地獄)を指す  
(五十) 生落迦(地獄)を指す  
(五十一) 生落迦(地獄)を指す  
(五十二) 生落迦(地獄)を指す  
(五十三) 生落迦(地獄)を指す  
(五十四) 生落迦(地獄)を指す  
(五十五) 生落迦(地獄)を指す  
(五十六) 生落迦(地獄)を指す  
(五十七) 生落迦(地獄)を指す  
(五十八) 生落迦(地獄)を指す  
(五十九) 生落迦(地獄)を指す  
(六十) 生落迦(地獄)を指す  
(六十一) 生落迦(地獄)を指す  
(六十二) 生落迦(地獄)を指す  
(六十三) 生落迦(地獄)を指す  
(六十四) 生落迦(地獄)を指す  
(六十五) 生落迦(地獄)を指す  
(六十六) 生落迦(地獄)を指す  
(六十七) 生落迦(地獄)を指す  
(六十八) 生落迦(地獄)を指す  
(六十九) 生落迦(地獄)を指す  
(七十) 生落迦(地獄)を指す  
(七十一) 生落迦(地獄)を指す  
(七十二) 生落迦(地獄)を指す  
(七十三) 生落迦(地獄)を指す  
(七十四) 生落迦(地獄)を指す  
(七十五) 生落迦(地獄)を指す  
(七十六) 生落迦(地獄)を指す  
(七十七) 生落迦(地獄)を指す  
(七十八) 生落迦(地獄)を指す  
(七十九) 生落迦(地獄)を指す  
(八十) 生落迦(地獄)を指す  
(八十一) 生落迦(地獄)を指す  
(八十二) 生落迦(地獄)を指す  
(八十三) 生落迦(地獄)を指す  
(八十四) 生落迦(地獄)を指す  
(八十五) 生落迦(地獄)を指す  
(八十六) 生落迦(地獄)を指す  
(八十七) 生落迦(地獄)を指す  
(八十八) 生落迦(地獄)を指す  
(八十九) 生落迦(地獄)を指す  
(九十) 生落迦(地獄)を指す  
(九十一) 生落迦(地獄)を指す  
(九十二) 生落迦(地獄)を指す  
(九十三) 生落迦(地獄)を指す  
(九十四) 生落迦(地獄)を指す  
(九十五) 生落迦(地獄)を指す  
(九十六) 生落迦(地獄)を指す  
(九十七) 生落迦(地獄)を指す  
(九十八) 生落迦(地獄)を指す  
(九十九) 生落迦(地獄)を指す  
(百) 生落迦(地獄)を指す

量の三四五六等乃至阿僧祇の法門に一切の法を攝す。此の一切の法の中の(一)一相、異相、(二)漏相、非漏相、(三)作相、非作相等と一切法の各各の相、各各の力、各各の因縁、各各の果報、各各の性、各各の得、各各の失とを一切智慧力の故に一切世の一切種を盡く遍く知解す、是れを薩般若と名く。今一切智智と云ふは即ちこれ智中の智なり。但し一切種を以て遍く一切の法を知るのみに非ず。亦是の法の究竟實際常不壞の相は不增不減にして猶ほ金剛の如しと。是の如くの自證の境は説者も無言なり、觀者も無見なり。手中の(四)菴摩勒果の他人に轉授す可きには同じからず。若し言語を以て人に授く可くんば、(五)釋迦菩薩定光の授決を蒙りし時即ち成佛すべし、何が故ぞ具に方便を修し、(六)要無師自覺を待ちて方に佛と名けんや。又目に世人の刀杖の爲めに傷られたるを觀るに、復其の受苦を信じて疑惑す可きこと無しと雖も、然も種種に説かしむるに終に證知せず、若し自身に觸受するるとき乃ち明了なることを得るが如し。問の意の言はく、云何が我等をして是の如くの自覺の慧を逮得せしめん。云何が此の慧を得已りて、能く無量の衆生の爲めに廣演分布して、(七)種種の趣、種種の(八)性欲に隨うて、種種の方便道をもて一切智智を宣説せしむ。謂はゆる無量乘を安立し、無量の身を示現し、各

各に彼の言音に同じ、彼の威儀に住せん。而も此の一切智道は猶ほ同一味なり、謂はゆる如來の(九)解脫味なり。此の妙方便は復云何が得んとなり。此の中の種種の趣とは梵には娜衍と云ふ、亦是名けて行とし、亦是名けて道とす、下に大乘道等と云ふ、義同じ。(一〇)毗婆沙には五道ありと説き、(一一)摩訶衍の人は多く六道と説く。是の如く廣く衍れば乃至此の世界の中に已に卅六俱胝の衆生數あり。何に況んや十方の一切世界をや。性欲とは、欲をば信喜好樂に名く。孫陀羅難陀は五欲を好み、提婆達多是名聞を好み等の如く、乃至諸の得道の人に亦各好む所あり。大迦葉は(一二)頭陀を好み、舍利弗は智慧を好み、離波多是座禪を好み、優婆塞は(一三)毘尼を知らんと好み、阿難は多聞を好む等のごとく、當に廣く之を説くべし。性をば積習に名く。相は性より生ず、欲は性に從うて行を作す。或る時には欲より性をなし、欲を習て性を成す。性をば染心に名く、染心事をなすに欲の名あり、縁に從うて起る。是の事は(一四)釋論の中に具に明せり。種種の方便道とは、(一五)龍樹の云はく般若も方便と本體是れ一なり、而も所用に異あり、譬へば金師の巧方便を以ての故に、金を以て種種の異物を作るに、皆是れ金なりと雖も而も各異名あるが如く、今毘盧遮那も亦復是の如し。能く遍一切處の眞金の智體







(一) 顯形色 青黃  
赤白等の顯色と長  
短方圓等の形色と  
を云ふ。

し。又虚空は種種の(一)顯形色の相を離れて、造作する所なれども、而も能く萬像を容す、一切の草木之れに因つて生長し、有情の事業之れに依つて成ずることを得るが如く、佛智の虚空も亦復是の如し、一切の相を離れて常に分別起作なしと雖も、而も無量の度門、種種の妙業皆成辨することを得、故に以て喩とす。

(二) 八風 利、衰、  
毀、譽、稱、譏、苦、  
樂を云ふ。

第二の句に「譬へば大地は一切衆生の依たるが如く、是の如く一切一切智智も天人阿修羅の依たり」とは、世間の百穀・衆藥・奔木・叢林、その性分に從うて無量に差別なれども、皆大地に從つて而も根芽を生じ、乃至莖葉花果次第に成就し、一切衆生の爲めに依止處となつて之を養育すれども亦是の念を作さず、我今一切世間を荷負すと、恩徳を念はず勞倦あることなく、之を増すれども喜ばず、之を減すれども憂へず、深廣にして測り難く、傾動す可らざるが如く、一切智智も亦復是の如し。大悲漫荼羅の一切の種子の出生する所なり。即ち此れ諸乘の無量の事業の所依止の處なり。生死涅槃に於いて、其の心平等なり、世間の(三)八風も動搖すること能はず。是の如く等の少分相似を以ての故に、以て喩とす。

第三の句に「譬へば火界は一切の薪を焼くに厭足あること無きが如く、是の如く一

(一) 異生 凡夫を  
云ふ。

切智智も一切無智の薪を焼くに厭足なし」と云ふは、譬へば火種の假使薪を積みて世界に充滿すること皆須彌山王の如くして、次第に之を焚けども怯弱あることなく、是の念をなさず、我れ當に余所の薪を焼き、余所の薪を焼かざるべしと、熾然として息まず勝進して厭くこと無し、要す焚く所盡き已ぬれば、然して後に隨うて滅するが如く、如來の智火も亦復是の如し。一切の戲論煩惱の薪を焼き盡し、乃至緣待皆盡きぬれば、即ち此の慧光も亦所依なし。復次に世間の火は貴賤同じく用ふる所なり、能く闇夜に於いて照明をなして、迷惑顛墜の者に成く正路を得しめ、又悉く能く一切の諸物を成就するが如く。是の如く一切智火も聖者(二)異生に平等に之れあり、無始の大火の中に於いて、諸の行人をして如實の道を見しめ、次第に一切の佛法を成就す。故に以て喩とす。

(二) 三辰 日月星  
の三を云ふ。  
(三) 蔚蒸 さかん  
なる義なり。

第四の句に「譬へば風界は一切の塵を除くが如く、是の一切智智も一切の諸の煩惱の塵を除去す」と云ふは、大風の起る時烟雲塵霧一切消除して、大虚澄廓にして(三)三辰炳現し、(三)蔚蒸熱惱の衆生皆清凉なることを得、能く奔木叢林をして開榮し增長せしめ、亦能く一切の物類を摧壞するが如く、又風性の遍く所依なくして自在旋轉し、能く



(一) 罽毘 障礙なり。  
(二) 遊塵 空中に散動せる塵埃にして、動轉煩悩を指す。

(三) 滓穢 にごりけられなり、煩悩に喩ふ。  
(四) 濁除 是らひ除く義なり。  
(五) 眞法界 六大清淨法界を云ふ。  
(六) 等持 定を云ふ。  
(七) 助道法 三十七道品、六度、十波羅蜜等を云ふ。  
(八) 大果實 菩提涅槃の二轉の妙果。  
(九) 塵勞 煩惱を云ふ。  
(一〇) 平等性 阿字本不生を云ふ。

四〇  
(一) 罽毘 障礙すること無きが如く、如來の慧風も亦復是如し。一切の障蓋煩悩の(二)遊塵を滌除して、涅槃清涼の法性を證せしめ、又復能く一切世出世間の善法をして増長せしめ、無明の大樹を摧壞して其の根本を抜く、而も此の無障礙力は都て所依なし、故に以て喩とす。

第五の句に「譬へば水界は一切衆生之によつて歡樂するが如く、是の如く一切智智も諸天世人の利樂をなす」と云ふは、水大の高きより下きに赴きて饒益する所多く、能く草木を潤して華果を生じ、又復本性清潔にして垢もなく濁るなく、悉く能く飢渴の衆生を満足して、諸の(三)滓穢を洗ひ熱惱を(四)濁除し、澄深難入にして測量す可らず、坑埒の處に於いて性皆平等なるが如く、如來の智水も亦復是の如し。(五)眞法界より世間に流布し、諸の(六)等持を潤し、(七)助道の法を生じて(八)大果實を成じ群生を利益す。體煩惱なきが故に清潔なり、能く諸惑を離るゝが故に無垢なり、一相にして異に非ず故に無濁なり。諸(九)これを得ることあれば、思願盡く息み、清涼の定を獲て(一〇)塵勞を洗除し、湛寂にして難思なり、(一一)平等の性を證す。故に以て喩とす。

復次に金剛手此の五喩を説くことは、即ちこれ下文の五字の義を發起するなり。阿

(一) 已下因、根、究竟の三句の文を解釋す。  
(二) 惟付 思惟し付度する義なり。  
(三) 大會生解 大會の衆人に五字門の義を了解せしめむが爲めにはづみ不起すなり。  
(四) 法華經を引例す。  
(五) 憤憤排排 想が心内に満ち塞がり、發せんとして未だ發し得ざるを云ふ。  
(六) 孳殼 孳は葦の中の白皮なり、故に今の義に合せ、恐らく稗の寫誤なるべし、稗は米の糠皮なり。

阿字を地とし、(一)嚙字門を水とし、(二)羅字門を火とし、(三)訶字門を風とし、(四)佉字門を空とす。又世間の種子の地水火風を縁とし、虚空礙へずして、然して後に生ずることを得、従うて一縁も闕げぬれば終に増長せざるが如く、一切智性の如來の種子も亦復是の如し。即ち一切智門の五義を用ひて自ら衆縁とし、能く菩提常住の妙果に至る。(五)所謂不可思議不生不滅の因縁なり。金剛手如來の獨一法界加持の相を觀知して、心に(六)惟付する所必ず將に是の如くの法門を説かんとすと知るが故に、先づ其の功德を喩して(七)大會生解の機を發起し、然して後に佛に問ひたてまつる。是の如き智慧は何を以てか因とし、云何が根とし、云何が究竟するやと。此れより已後は如來智印をもて、即ち其の心を定め、廣く分別して説き玉ふ。(八)例へば彌勒菩薩の佛の神通の瑞を觀て、即時に(九)憤憤排排として、心に疑ふ所あり、是の道場所得の法を説くとやする、菩提の記を授けんとやする。文殊名體を發揮して、指して妙法蓮華と云ふ、然して後に如來印するに實相を以てし、機に乗じて、演説して動執の徒をして疑網を離るゝことを得しむるが如く。譬へば春陽の始に萌種甲折け、雷風鼓動し、時雨潤灑すれば、(一〇)孳殼を離るゝことを得、苗能く出生するが如し。若し無機の人ば則ち際會に遇ふと



雖も深益を發起すること能はず。

(二) 已下は三句答説の文段なり。  
(三) 乃至 經文中略す。

(三) 聖心 如來の御心を云ふ。

(四) 釋論 大智度論第一卷なり。  
(五) 端身 身を端直になすを云ふ。

「(一) 毗盧遮那佛即ち持金剛秘密主に告げて言はく、善い哉善い哉執金剛、善い哉金剛手汝吾に是の如き義を問ふ、汝當に諦に聽き極善作意す可し、吾今之を説かん。(二) 乃至諸法は無相なり、謂はく虚空の相なり。」とは、執金剛手秘密主豫め如來加持の深意を測り、又能く時の衆を發起して生解の因縁を作すを以て、仰いで(三) 聖心を測り、機會を失はざるが故に、重ねて善い哉善い哉と言ふ。我れ一切の天人、沙門、婆羅門乃至淺行の諸菩薩を見るに、能く世尊の前に於いて是の如くの間を發す者なし。所以かんとなれば、此の三句の義の中に悉く一切の佛法秘密神力甚深の事を攝するを以ての故に、復歎じて善い哉金剛手汝能く吾に是の如き義を問ふと言ふ。如來の善哉の言音に加持せらるゝを以ての故に、爾の時に金剛手無量の功德倍増す。復所受の法に於いて終に漏失なきことを明して、次に即ち誠めて汝當さに諦に聽き極善作意すべし、吾今之を説かんと云ふ。亦未來の弟子の爲めに此の囑を明す。深心をもて法を受くるの儀式なり。故に(四) 釋論に云はく、若し人心善く直信ならば是の人は法を聽く可し、若し是の相なくば即ち解すること能はず、偈を説いて云ふが如し。聽者(五) 端身にして

(一) 渴飲 法を求むる心の熱心なるに喩ふ。  
(二) 無盡意經 四卷本七卷本あり。前者は後漢の朝に支婁迦讖三藏未善薩經と呼び護の譯する所なり。但し此の二本には何れも二十功徳を説ける文なし。無長三藏所覽の梵本にありしもの第四十八卷には具に廿功徳を示せり。

(三) 中智 中道正觀の智、即ち阿字不生の智なり。  
(四) 心の實相 淨菩提心の實相を云ふ。  
(五) 內證所行 佛果の身口意三密を云ふ。  
(六) 薩般若 一切智々と譯す。  
(七) 業受生 業力によつて受ける所の有漏の生たるを云ふ。  
(八) 此の譬喩は北

(一) 渴飲の如くし、一心に語義の中に入り、踴躍して法を聞き、心に悲喜せん。是の如くの人には應に爲めに説くべし。及び(二) 無盡意經には用心聽法に二十の功徳あり、當に廣く之を説くべし。

經に「佛金剛手に告げ玉はく、菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」と云ふは、猶ほ世間の種子の四大衆縁に籍るが故に、根を生ずることを得、是の如く次第に乃至果實成熟するを名けて究竟とするが如きは、然も(三) 中智を以て之を觀するに畢竟して不生不滅なり、是の故に因果の義成す。若し法然らずんば生滅斷常の相ありて、則ち戲論に墮し皆悉く破す可し、因果の義成せず。今行者(四) 心の實相を觀すること、亦復是の如し一切の戲論を出過して淨虚空の如し、(五) 內證の所行に於いて深信の力を得、(六) 薩般若の心堅固にして動せず、(七) 業受の生を離れて眞性の生を成就し、萬行の功徳此れより増長す、故に菩提心を因とすと云ふ。此の菩提心は後の二句の因たり。若し生死の中の所殖の善根に望むれば、則ち名けて果とす。佛法の前相を見るを以ての故に、(八) 譬へば人有りて善知識の言を聞くに、汝が今の宅中に自ら無盡の寶藏あり、應に自ら方便を勒修して而も之を開發すれば、一國に周給すとも常に(九) 匱乏



本の涅槃經第七卷の食女羅藏の喩を引用せしなり。ほしく空しき義なり。

(一) 釋論 大智度論第一卷。

(二) 甘露味門 般若經の甘露味を云ふ。

(三) 無量無數 言心を絶離せることを云ふ。

(四) 芸除 くさきり除く義なり。

なかるべしと云ふ。彼の人聞き已りて、即ち諦信タイシンを生じ説の如く而も行じ、乃至功を施すこと已ますして漸く前相を見る。爾の時に寶藏の功德に於いて疑惑の心を離れて、殊勝の加行を發起するに堪能なるが如し。故に菩提心は即ち是れ白淨信心ビヤクジヤウの義なり。(一) 釋論に亦云はく、佛法の大海には信を能入とす、梵天王の轉法輪を請ひし時佛偈を説いて言ふが如し。我今カシロ甘露味門カシロイモンを開かん、若し信を生ずる者あらば歡喜を得んと。此の偈中には、施・戒・多聞・忍・進・禪・慧の人能く歡喜を得とは言はず。獨り信人をのみ説けり。佛意是の如し。我が第一甚深の法は微妙にして、(二) 無量無數不可思議なり、不動、不倚、不着にして無所得の法なり、一切智人に非ずんば則ち解すること能はじ。故に信力を以て初めとし、慧等に由つて而も初めて佛法に入るには非ずと。是の如くの淨信心をして堅牢增長ならしめんが爲め、經の中に次に大悲を根とすと説く。根はこれ能執持の義なり。猶ほ樹根の莖葉花菓を執持して傾拔せざらしむるが如し。梵音には悲を謂うて迦盧拏キヤロダとす、迦は是れ苦の義なり、盧拏は是れ剪除センヂョの義なり。慈は廣く嘉苗を植うるが如く、悲は草穢ウラヂョを芸除するが如し。故に此の中に悲と云ふは即ち兼ねて大慈を明す。且く行者供養を修する時の如きは、若しは一花或は塗香等を奉る

(一) 自善根 自己の功徳力にして三密修行の善根力なり。(二) 法界力 法界は性の義なり。平等の力を云ふ。大智の心に住するに涅槃に住せず。大智の故に住せず。故に無住に云ふ。(三) 任運 自然に思のまゝに。(四) 應物の權 衆生に應同する權方便なり。此の巧巧方便によりて如來能く爲す所の種々の事業を究め盡す。(五) 鏡徹 鏡の光の透徹なるが如く眞金の体なる透徹無垢を云ふ。(六) 規製權 中規製とは規矩造したるものが約造よき權に中るを云ふ。(七) 摩訶般若 摩訶般若第一卷並に

に則ち遍一切處の淨菩提心を以て供養雲を興し普く佛事を作す。悲願を發起し群生に廻向して、一切の苦を抜き無量の樂を施す。(一) 自の善根と、及び如來の加持と、(二) 法界力とに由るが故に、所爲の妙業皆成就することを得。即ち是れ普く一切智地と乃至無餘の有情界とに於いて、皆悉く根を生ずるなり。行者(三) 無住の心を以て修する所の萬行に隨うて、即ち大悲の地界に執持せらるゝに由るが故に、大悲の火界に温育せらるゝが故に、大悲の水界に滋潤せらるゝが故に、大悲の風界に開發せられて生ずるが故に、大悲の虚空障礙せざるが故に。爾の時に無量の度門(四) 任運に開發すること由し芽莖枝葉の次第に莊嚴するが如し。即ち是れ一切の心法に於いて因縁を具足するの義なり。方便を究竟とすとは、謂はく萬行圓極とて復増す可きことなく、(五) 應物の權能事を究盡す、即ち醍醐の妙果三密の源なり。

又淨菩提心とは猶ほ眞金の本性明潔にして諸の過患を離れたるが如し。大悲は工巧を習學して、諸の藥物を以て種種に鍊冶し、乃至(六) 鏡徹柔輓キョウヂョウニヤウにして屈伸自在なるが如し。方便は巧藝成就して造作する所あれば、意に隨うて皆成就す、(七) 規製權キセイケンに中りて衆伎に出過せり。故に其の得意の妙は以て人に授くべきこと難きが如し。(八) 摩訶般若







（二）釋論 智度論 第二十一卷の文を指す。

れ心自ら心を證し、心自ら心を感じる。是の中には智解の法もなく、知解の者も無し、始めて開曉すべきに非ず、亦開曉の者もなし、若し少分の能所を分別して猶ほ微塵の如くも、即ち法と非法との相を取らば、我人衆生壽命を離れず。豈名けて金剛の慧と爲ることを得んや。復次に經の中に自ら轉釋して、「何を以ての故に菩提は無相なるが故に」と云ふ。（三）釋論に云ふが如し、佛の智慧は清淨なるが故に諸觀の上に出でて、諸法の常相、無常相、有邊相、無邊相、有去相、無去相、有相、無相、有漏相、無漏相、有爲相、無爲相、生滅相、不生滅相、空相、不空相を觀せず。常に清淨にして無量なること虚空の如し。是の故に佛智は無礙なり。若し生滅を觀する者は不生滅を觀することを得ず、不生滅を觀する者は生滅を觀することを得ず。若し生滅實ならば不生滅は不實なり、若し不生滅實ならば生滅は不實なり。此の如く等の諸觀皆爾りと。是の如くの淨菩提心は諸觀を出過して、衆相を離れたるを以ての故に、一切の法に於いて聖礙なきことを得たり。譬へば虚空の相は亦無相なるが故に萬像皆悉く空に依れども空は所依なきが如く、是の如くの萬法皆淨心に依れども淨心は適に所依なし、即ち此の諸法亦復菩提の相の如し。謂はゆる、淨虚空の相なり。故に經に復、「秘密主、諸法は無

相なり虚空相なり」と云ふ。

「爾時に金剛手復佛に白して言く、世尊誰か一切智を尋求する、誰か菩提の爲めに正覺を成する、誰か彼の一切智を發起する。佛の言はく、秘密主自心に菩提及び一切智を尋求す。何を以ての故に本性清淨なるが故に、乃至無量の功德皆悉く成就す」とは、時に執金剛佛所説の義の薩般若の慧は唯是れ自心なり、乃至小法として此の心を出でたる者あることなしと聞いて、未來の衆生に疑惑を斷せしめんが爲めの故に、而も佛に問うて言く、菩提心をば名けて（二）一向志求一切智とす。若し一切智即ち是れ菩提心ならば、此の中に誰をか能求とし、誰をか所求とし、誰をか可覺とし、誰をか覺者とせん、又復心を離れて外に都て一法なくば誰か能く此の心を發起して妙果に至らしむる者ぞ、若し法田縁有ることなくして成ずることを得と云はば、一切衆生亦方便を假らずして自然に成佛すべし。故に佛答へて、秘密主自心に菩提及び一切智を尋求す、何を以ての故に、本性清淨なるが故にと言ふ。衆生の自心の實相は即ち是れ菩提なり。有佛無佛常に自ら嚴淨なりと雖も然も實の如く自ら知らざるが故に即ちこれ無明なり。無明顛倒して相を取るが故に愛等の諸煩惱を生ず。煩惱に因るが故に種種の

（二）一向志求一切智を以てす。此の心は勝義菩提心に當る。



(二) 纏裹 まさひ  
磨經の說によつて  
一水四見の喩を引  
用せるなり。即ち  
鬼は火(或は膿)に  
河も魚は住宅と思  
ひ天は寶莊の池と  
さ觀じ人は清涼の  
なる水と見るが如  
く、各その所見異  
る。  
(三) 三法 煩悩、  
業、苦の三道を云  
ふ、又、根、境、識  
の三科と見る説  
もあり。  
(四) 摩訶般若 大  
般若經一百八十二  
卷より二百八十四  
卷に至る初分難信  
解品の中に五蘊等  
の八十一科の法門  
を説けり。  
(五) 内外十二處  
今は八十一科の法  
門の中の宗要たる  
六境を六根と外  
なる境を六塵とす  
なり。  
(六) 即離相 義釋  
には即離相をさ  
り、即蘊、離蘊、

業を起して種種の道に入り、種種の身を得、種種の苦樂を受くること蠶の絲を出すに所  
因なけれども自ら己より出して自ら纏裹して燒煮の苦を受くるが如し、譬へば人  
間の淨水を天鬼の心に隨うて或は以て寶とし、或は以て火とし、自心自ら苦樂を見るが  
如し、之れに由つて當に知るべし、心を離れて外に一法有ることなし。若し瑜伽行人  
正しく三法の實相を觀するるとき即ち是れ心の實相を見るなり。心の實相とは即ち是  
れ無相の菩提なり。亦一切智智と名く。復諸の因縁を離れたりと雖も亦因なくして而も  
成就を得るに非ず。復次に世尊衆生をして實の如く自心を知らしめんと欲し玉ふが故  
に更に方便を以て分別し演説し玉ふ。然る所以は若し但し自心は不生不滅なりと言は  
ば所因なきを以ての故に義則ち解し難し、故に先づ其の着處を示すなり。經に「心内に  
在らず、外に在らず、及び兩中間にも心不可得なり」と言ふは、摩訶般若の如きは無量  
の門を以て諸法の實相に入る。今其の宗要を擧げんと欲して但し内外の十二處を觀  
するに即ち一切の法を攝す。行者の心無始よりこのかた、多く内法に於いて心相に取着  
するが故に先づ内の六處に於いて即離相の方便を以て一一に諦觀するに心不可得  
なり。無生無相にして處所あることなし。而も是の念を作す、此の心或は外に在り

相在を云ふ、これ  
等は皆外道の執計  
なり。

(一) 涅槃經第二卷  
の池珠影現の喩  
文に依る時中  
船を浮べし時  
隨珠を人争う  
池水に飛び込  
水濁りて珠を  
こき能はず然  
暫くして珠力  
りて水澄み自  
珠の所在を知  
たり。

や、復外の六處に於いて實の如く之を觀するに心亦生相なうして、處所有ることなし。猶ほ錯誤せんことを恐れ更に合して之を觀するに兩中間に於いても亦不可得なり。即ち此の心の實性は本より無生無滅にして畢竟清淨なりと悟んぬれば戲論の雲披る。  
譬へば珠力の故に水清し、水清きが故に珠現す、定んで餘處より來らざるが如し。  
經に「秘密主如來應正等覺は青に非ず、黃に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず」と云ふは前には一切法に約して心の實相を明し已んぬ、今復眞我に約して心の實相を明す。此の宗に辯する義は即ち心を以て如來應正等覺とす、所謂る内心の大我なり。有る一類の外道の如きは自心を了せざるが故に、而も是の言を作す。我れ眞我を觀るに其の色正しく青し、餘人は見ること能はざる所なりと。或が言はく正しく黃なり、正しく赤なり、或が言はく鮮白なり、或が言はく臙脂色の如し、今義を以て紅紫と云ふ。或が言はく我れ眞我を見るに其の相極めて長く、極めて短し、乃至男子の相等の如し。唯し此れのみ是れ實なり、餘は皆妄語なりと。然れども此れ等の衆相は悉く縁より生じて自性あることなし、云何が眞實我と名



△黒月 闇夜を  
云ふ 印度の曆法  
にては月の盈より  
満に至る間を白月  
とす 虧より晦に  
至るを黒月とす  
この黒白二分合し  
て一ヶ月となる。

五二  
くることを得んや。是の如くの種種の執に對するが故に、佛、如來應正等覺は青色等に  
非すと説き玉ふ。所以何かんとならば是の生相は畢竟じて不生なるが故に、則ち非青  
とす。青の實相は不壞なるが故に而も亦非青に非ず。當に知るべし、如來應正等覺は一  
定の相として説く可きことなし。亦是の如くの諸相をも離れず。有る外道阿闍梨の如  
きは、黒月の夜に於いて諸弟子を引いて大象の前に至つて、之れに告げて言はく、我  
れ今に於いて汝に真我を示さんと、時に彼の衆人或は目を以て觀、或は身を以て觸る。  
其れ形を視る者は則ち言はん、我れ今已に真我を識んぬ其の色甚だ白し杭然として高  
大なりと。其れ牙に觸れたる者は則ち言はん、真我は戈の如しと。耳に觸れたる者は則  
ち言はん、箕の如しと。足に觸れたる者は則ち言ふ、柱の如しと。尾に觸れたる者は  
則ち言ふ、索の如しと。各遇ふ所に從うて情計不同なり。復更相に是非すと雖も終に其  
の眞體を識ること能はず。瑜伽行者心明道を開發する時、心王の如來を照見するこ  
と、大明の中に目に衆色を觀るが如くして則ち是の如くの立論を生ぜず。  
次に「秘密主心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず、天龍  
夜叉乃至人非人趣と同性に非ず。」とは、亦是れ諸の妄執に對して自心の變易なきこと

△非想處 無色  
界の最頂なる非想  
界を云ふ  
△三界 欲界、  
色界、無色界を云  
ふ。

△八功德水 甘、  
冷、爽、輕、清、淨、  
不臭、飲已不傷腹、  
喉、飲已不傷腹、  
の八功德を具した  
る水。

△顯形男女 顯  
り。形色、男女な  
り。六趣、地獄、  
餓鬼、畜生、修羅、  
人、天の六道を云  
ふ。

を顯示するなり。故に説いて此の心は三界と同性に非ずと言ふ。有る外道の計すらく、  
我性は即ち欲界に同じ、或は色無色界に同じ、乃至非想處は即ち是れ涅槃なりと謂  
ひ、或は梵王毘紐天等一切の法を生ずと言ふ、然も此の三界は皆悉く衆縁より生  
ず。其の自性を求むるに都て不可得なり。況んや心性をして彼の性に同せしめんをや。  
次に廣く無量の諸の衆生趣を分別して一一に之を言ふに皆彼れと同性に非ず。譬へ  
ば虚空の中より八功德水を雨らすに一味淳淨なれども、所受の器に隨うて種種に差  
別なるが故に、或は辛く或は酸く或は温かに或は濁れり。然れども八功德の性は彼と同  
じからず、温解けて濁息む時には清凉なること故の如くにして未だ曾て變異せざるが  
如し。又眞陀摩尼の自ら定相なうして物に遇へば即ち其の色を同すれども、然も其の寶  
性は彼と同せず、若し彼と同性ならば是の色縁に隨うて生滅する時、寶性も亦生滅すべ  
きが如し。復次に世尊將に大悲胎藏生漫荼羅を開示せんと思ふが故に、先づ正しく心  
の實相門を開示す。何を以ての故に、行者の本尊三昧の中に顯形男女等の相及び普門  
示現の六趣の身ありと説くが如きは、恐らく諸の行人心の因縁生を了せざるが故に  
寶生の眞性に於いて戲論を生ぜん、故に佛説いて如來は青に非ず黄に非ず乃至此の心







(二)修多羅 譯して經と云ふ。

悲を根本として方便波羅蜜満足することを得、即ち是れ究竟不思議の中道の義なり、經に「秘密主我れ諸法を説くこと是の如し、彼の諸の菩薩衆をして菩提心清淨にして其の心を知識せしむ」と云ふは、佛既に淨菩提心を開示し玉ふに、略して三句の大宗を明し竟んぬ。即ち一部の始終を統論するに、無量の方便皆諸菩薩をして菩提心清淨にして其の心を知識せしむ。此の經を云ふが如きは當に知るべし、一切の(三)修多羅の意皆同じく此にあり。釋迦如來所説の法の如きは當に知るべし、十方三世一切如來の種種の因縁を以て宜しきに隨うて演説し玉ふ法も、此の三句の法門の爲めに非ざること無し、究竟同歸して本より異轍無し、故に我れ諸法を説くこと是の如し、乃至其の心を知識すと云ふなり。

經に「秘密主云何が自ら心を知る、謂はく若しは分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若しは色、若しは受想行識、若しは我、若しは我所、若しは能執、若しは所執若しは清淨、若しは界、若しは處、乃至一切分段の中に求むるに不可得なり」とは、世尊前に既に廣く淨菩提心の如實の相を説き玉ふに、衆生未だ意を得て懸に悟ること能はざるを以て、復方便を作して此の頓覺成佛入心實相門を説き玉ふ、亦十方三世の一切の

(二)時義 時節と根宜なり。

(三)六情 眼耳鼻舌身意の六識を云ふ。六塵 色聲香味觸法の六境。

佛法を決了せんが爲めの故なり。一切經の中に或は諸蘊和合の中に我不可得と説き、或は諸法は縁より生じて都て自性なしと説くが如きは、皆是れ漸次に實相門を開く、彼に諸法の實相と云ふは即ち是れ此の經の心の實相なり。心の實相とは即ち是れ菩提なり。更に別の理なし。但し薄福の衆生自ら作佛を信すること能はざるが故に、自ら作佛を信すること能はざるが故に、自ら作佛を信する者は甚だ得難しとす。故に世尊且く諸の故障を淨めしめ、其の心を將護して要す(二)時義をして契合せしめ、然して後に爲めに即心の印を説く。今經は則ち是の如くには非ず。直に諸法に約して其の心を知らしむ、所以に秘要の藏とす。初の句に、謂はく若しは分段と云ふは、是れ總じて從縁生の法を擧ぐるなり。法の因縁を待ちて成するは必ず差別の相あるを以ての故に、行者當に知りて是の如く觀察すべし、今この分段の中には何者か是れ心なるや、乃至分析し推求するに都て不可得なり、即ち知んぬ此の心は衆相を出過して諸の因縁を離れたり、心性は常に是の如しと知るを以ての故に、爾時に一切諸法自然に心に異らず。顯色は謂はく青黃等なり。形色は謂はく方圓等なり。境界は謂はく(三)六情の所對即ち(三)六塵なり。人をして解し易からしめんが爲めの故に復法に歴て觀察す、今こ



(一) 長爪梵志  
 度利佛の門にして  
 舍利佛の名を得た  
 故に彼の釋尊と對  
 談して我は一切の  
 法を受けずと云  
 ふは其の時釋尊  
 汝は一切の法を受  
 けずと云ふ然る  
 に此の受けずと云  
 ふは其の受けずと  
 云ふ見のみを長爪  
 は何ぞやと云ふに  
 難はれしと云ふ

の顯色衆色の中には何物かこれ心なる。色は本より非情なり覺知の相なし、況んや是  
 の中に於いて心として得べきことあらんや。顯形を云ふが如きは當に知るべし、一切  
 の色塵も亦是の如し、行者外塵の中に於いて心不可得なり。復内身の五蘊を觀するに  
 亦聚沫、泡、炎、芭蕉、幻化の如し、自ら性實を求むるに尙ほ所有なし、況んや其の  
 中に於いて而も心あることを得んや。是の如く庵より細に至り、廣を去け略に就く  
 に、乃至現在一念の識も亦住時なし。又復衆縁より生ずるが故に即空、即假、即中な  
 り、一切の戲論を遠離して、本不生際に至る。本不生際とは即ち是れ自性清淨心なり、  
 即ち是れ阿字門なり。心阿字門に入るを以ての故に當に知るべし一切の法悉く阿字門  
 に入る。已に諸法の實相を觀ることを説いつ、次に我相を觀することを明す。故に若  
 しは我、若しは我所、若しは能執、若しは所執、若しは清淨と云ふ。如上には諸陰の  
 中に於いて種種の方便を以て心を觀するに而も不可得なり。何に況んや我人壽者等の  
 法をや、本より以來但し假名のみあつて而も其の中に於いて心として得べきことあら  
 んや。清淨とは即ち外道の所計なり、最極清淨の處を涅槃と以爲へり。(一) 長爪梵志の  
 一切の法を受けずして是の見をのみ受けしが如く、今も亦是の如し觀空の智慧に取着

(一) 阿毘曇 毘婆  
 沙論等を指す  
 (二) 三法 蘊處界  
 の三科の法なり  
 (三) 摩訶般若 大  
 般若經、小品般若  
 經等を指す

(四) 八直道 八正  
 道を云ふ、正精進、  
 正念、正定、正見、  
 正思惟、正語、正  
 業、正命、これなり。

して是の清淨の想を生ず、即ち是の如くの想の中に於いて正しく自心を觀するに、生  
 處あること無きをもつて眞淨の菩提心に入ることを得。以上は廣く五陰に對す。次に  
 復十八界十二處乃至一切分段の中に求むるに不可得なりと説き給ふ。陰・界・入の義は  
 (一) 阿毘曇の中に廣く明せり。此の(二)三法に已に一切の法を攝すれども、復乃至一切の分  
 段の中に求むるに不可得なりと云ふは、即ちこれ(三)摩訶般若等の中に法に歷て廣く明  
 す者は是れなり。陰・界・入に於て分析して心を求むるに心不可得なるが如く、當に知る  
 べし、六度萬行乃至一切の惣持三昧門の中に種種に心を求むるに亦不可得なり。故に是  
 の心の常樂我淨・非常樂我淨等の相も亦復是の如く不可得なり。復次に聲聞の人初めて  
 陰界入を觀する時、陰に即して我を求め陰に離れて我を求むるに皆不可得なり、相在も  
 亦不可得なり。爾の時に(四)八直道の中に於いて遠塵離垢して正法眼生ずるが如く、眞  
 言の菩薩も亦是の如し。初めて陰・界・入を觀する時に、陰に即して心を求め、陰に離れ  
 て心を求むるに皆不可得なり、相在も亦不可得なり。故に即時に懸かに自心の本不生  
 際を悟る、如來智見の大菩提道の中に於いて遠塵離垢して法眼淨を得。若し是の如く  
 の方便を作し先づ着處より之を觀せずして、而も但し是の心は一切處に逼じて畢竟無



相なり言は、即ち一切衆生悟入するに由なし。當に知るべし此の觀を最も秘要の法門とす。餘の遠離の方便の諸菩薩の如きは漸次に戒・定・智慧を修習して無量劫に於いて種種の門を以て人法二空を觀すれども猶未だ心の影像を遠離すること能はず。今眞言行者は初發心の時に於いて直に自心の實相を觀じて本不生を了知するが故に即時に人法戲論淨なること虚空の如し、自然覺を成じて他に由つて悟らず。當に知るべし此の觀を復頓悟の法門と名く。

經に「秘密主、此の菩薩の淨菩提心門を初法明道と名く、菩薩此れに住して修學すれば久しく勤苦せずして便ち除一切蓋障三昧を得」と云ふは、佛の智慧に入るに無量の方便門あり。今此の宗は直に淨菩提心を以て門とす、若し此の門に入るものは初めて一切如來の境界に入る。(一)譬へば彌勒の樓閣門を開いて善財童子を内れ、是の中に具さに無量の不思議の事を見せしめしが如し。言を以て宣へ難し、但し入る者のみ自ら知るのみ。法明とは心の本不生際を覺るを以て其の心淨住にして大慧の光明を生じ普く無量の法性を照して諸佛所行の道を見る故に法明道と云ふ。菩薩此の道に住する時、妄想の因縁に従うて有らゆる煩惱業苦皆悉く清淨に除滅す。譬ば人ありて暗中に利寶の

(一)華嚴經入法界品に出す。

爲めに傷られて謂うて蛇毒とす、毒想を作すを以ての故に其の心執着して便ち毒氣を成じ肢體に逼入す。命終せんと欲する時に垂んで良醫あつて之を診てその本末を曉め、即時に引いて傷處に至り明燈を以て之を照して猶ほ所傷の實を見るに血塗の相あり。其の人毒に非すと了知して毒氣亦除き、玩好の具なりと分別して而も喜樂を生ずるが如く、行人も亦復是の如し。淨菩提心をもて諸法を照明するに因るが故に、少しき功力を用ひて便ち除蓋障三昧を得て、八萬四千の煩惱の實相を見るに八萬四千の寶聚門と成る。故に經に次に「菩薩此れに住して修學すれば久しく勤苦せずして便ち除一切蓋障三昧を得。若し此れを得れば則ち諸佛菩薩と同等に住す」と云ふ。是の中の障に五種あり。一には煩惱障。謂はく根本の煩惱乃至八萬四千の上中下品の障淨心を蓋ひ、及び宿世の偏習に由るが故に道機を妨礙して佛法に入らず。二には業障。謂く過去及び現在世に諸の重罪を造り乃至方等經を誘るなり、此の人は得道の因縁ありと雖も先の業障未だ除かざる故に種種の留難ありて佛法に入らず。三には生障。謂はく是の人若し勝上無難の生處を得ば必ず當に道を悟るべし。然れども前業に乗じて更に無暇の身を受く。即ち報生を障とするを以て佛法に入らず。四には法障。謂はく此の人

(二)除蓋障三昧の人の光を覆ふ所の法二軌の惑を斷じて一切の蓋障を除く故に除蓋障三昧と名く。初地に入心の前半に初法明道にして、後半に除蓋障三昧を得るなり。(三)宿世偏習過去世に偏習せる煩惱なり。(四)道機佛道の機なり。(五)方等諸大乘教。無暇地獄、嶺鬼、畜生、北俱盧州、長壽天、俱盧伽藍、八難處を云ふ。



(二) 大品 大品般  
若經第二十卷。  
(三) 究竟大覺大牟  
尼 化他の正覺を  
指す。初地の一地位  
に自證圓極すと雖  
も、成佛の外述は  
所化の機が純熟な  
待つべきが故に未  
だ衆生の前には他  
の正覺を成ぜざる  
なり。  
(四) 已下は經文の  
「當に五神通を發  
し、無量の語言音  
陀羅尼を獲、衆生  
の心行を知り、諸  
佛に護持せらる、  
生死に處すと雖も  
而も染著なく、法  
界の衆生の爲め  
勞倦を辭せず住  
爲戒を成就す。此  
一段を釋す。此經  
文は茲に際々此の  
示す。故に今こゝに

(二) 諸度 六度、  
十波羅蜜等を云  
ふ。

(三) 已下に嚙多、  
囉尾多、涅槃彩、  
の三語を示して釋  
し玉ふこと今釋  
文との關係なく無  
用に似たり、或説  
量は一切世界の無  
量の言音の中に大  
小等の差別あるこ  
さを示す爲めなり  
と云ふ。

(三) 釋論 大智度  
論第八十六卷。  
(四) 視聽觸 眼  
耳鼻舌身根の感知  
を示す。  
(五) 根縁 機根と  
宿縁。

已に無障の生處を得、又悟道の機あれども先世に曾て障法等の縁あるを以ての故に善友に遇はず、正法を聽聞することを得ず。五には所知障、謂はく此の人乃至善識に遇うて正法を聞くことを得。然れども種種の因縁ありて兩不和合にして般若波羅蜜を修することを妨ぐ。(二) 大品の魔事品の中に廣く明すが如し。亦是れ先世に或は曾て他の道機を差へしが故に熈んで此の障を生ず。行者已に淨除業障三昧を得れば、その時に自心の中に於いて常に十方一切の諸佛の妙相湛然なるを見ること明鏡を觀るが如し。乃至諸の威儀去來睡寢に於いて是の如くの佛會の因縁を離れず。時に諸の聖者常に勝妙の方便を以て其の心を啓悟し、梵音を以て慰諭して爲めに疑網を支したまふ。行者聞くに隨うて隨喜し悟り已つて網障隨つて除き、久しからずして一切の佛法を成就す。故に若し此の三昧を得れば即ち諸佛菩薩と同等に住すと云ふ。當に知るべし、行人は則ち是れ位大覺に同じ。其れ自ら心覺るを以の故に便ち佛の名を得。然れども(三) 究竟大覺大牟尼の位に非ず、猶ほ淨月の體に増減なしと雖も、しかも亦明漸々に増し乃至第十五日に方に能く大海の潮を動すが如し。(四) 又行者如來と共に同等に住することとに猶つて、即ち能く方便力を以て五神通を起し、本心を動せずして諸佛の刹に遊び、

種種の身語意を現じて種種の供養雲を興し、無盡の大願を以て廣く(二) 諸度を修す。復意根淨きに由るが故に、次に無量の語言音を解する諸の陀羅尼を得。且く一世間の中の卅六俱胝趣の如きは、彼の上中下の性の種類、若干の方俗の言辭各々の差別に隨うて皆其の旨趣を曉り、應するに隨類の音を以てす。一世界を云ふが如きは一切の世界も亦是の如し。(三) 梵本に嚙多と云ふは是れ大聲なり。囉尾多とは是れ小聲なり。涅槃彩と云ふは是れ長聲なり、又多の聲を兼ねたり。具足して之を言ふ所以は惣持の境界は了せざる所なきことを顯はさんと欲するなり。此の方の文字に對しては以て具に翻じ難し。陀羅尼を得るを以ての故に能く一切衆生の心行を知る。謂く是の如き衆生は瞋行は偏多にして貪性は薄し。或は是の如き衆生は貪行は偏多にして瞋性は薄し。乃至通塞の相無量の差別あり。(三) 釋論の道種智の中に廣く明すが如し。是の菩薩は但し意根のみ能く知ることを得るに非ず。乃至(四) 視聽觸も亦皆互用無礙なり。又能く彼の(五) 根縁を觀て蓋障を除かんが爲めに種種の方便を以て衆生を成就し、佛刹を莊嚴し、如來の事を行す。當に知るべし、眞言門の行者は乃至一生に成辨することを得べし。復次に如上に説く所の諸の功德は一切衆生に皆悉く其の本性の如く等しく共にこれあり。但し無明の



(二)五神通 天眼、  
天耳、他心、宿命、  
神境通を云ふ。

(三)淤泥 泥。ろ。  
(四)攝 布施。  
愛語、利行、同事、  
これなり。

(一)白四羯磨 授  
戒等の重法を行ふ  
際には僧衆に向つ  
て先づ其の事を告  
白す。これを一度  
と云ふ。これを三  
度その可否を問う  
事を決するを三羯  
磨と云ふ。この一  
白三羯磨を合せて  
白四羯磨と云ふ。  
(二)八顧 常樂、  
我、淨、非、常、樂、  
非、淨、非、常、樂、  
樂、非、我、非、淨、  
非、顧、非、倒、正、  
本、眞、の、事、理、を、正  
しく見る能はざる  
妄見なり。断見と  
常見とを云ふ。

障蓋ありて自ら了知せざるを以て、未だ是の如くの秘密神通の力を發起すること能はず。今此の眞言門修行の諸の菩薩は法明道を見るを以ての故に、即生に除一切蓋障三昧を獲、此の三昧を得るが故に即ち能く諸佛菩薩と同く住して(二)五神通を發すなり。五神通を以ての故に一切衆生の語言陀羅尼を獲。此の陀羅尼を獲るが故に能く一切衆生の心行を知つて而も佛事を作す。能く廣く佛事を作して如來の種を斷せざるを以ての故に、則ち一切時一切處に於て常に十方諸佛の爲めに護持せらるゝこと、猶ほ嬰童の始めて生するに父母の愛心偏重にして常に捨離せざるが如し。當に知るべし、是の如くの諸句は皆悉く次第相釋するなり。復次に行者内には以上の功德を具し、外には諸佛の爲めに護持せらるゝを以て、是の故に生死に處すれども染着なきこと、猶ほ蓮華の水を出で、(三)淤泥の爲めに染汚せられざるが如し。常に(四)攝の方便を以て苦の衆生を抜き、乃至無量無邊阿僧祇劫に常に無間獄の中に在れども、身心精進熾然にして息まず、退没あることなく勞倦を辭せず。何を以ての故に淨菩提心は其の性法爾として金剛の如くなるが故に。是の如くの極めて堅固なる性は即ち是れ師に従うて得ず、無爲戒に住す、無垢無濁にして破傷す可らず。戒とは梵には尸羅と云ふ、これ清冷の

義なり。譬へば水性の如し、常に冷にして薪火の因縁に遇うて則ち能く諸物を灼爛すと雖も然も其自性は終に遷る可らず、薪を除き火を息むるときは自然に清冷なること本の如くなるがごとし。眞言行者も亦是の如し。除蓋障三昧を獲る時は心の本性即ち是れ尸羅なり、造作の法に非ず、他に由りて得ず、故に住無爲戒と云ふ。聲聞の淨戒の如きは要す(一)白四羯磨衆縁具足に由りて方に始めて生ずることを得ず。又方便を須ひて守護すること利刺を防ぐが如し。一期の善盡きぬれば戒も亦隨うて亡ぶ。此の戒は則ち是の如くに非ず、世世の生處に恒に俱に生じて受持を假らず。常に失犯なし。又是の戒に住するに由るが故に實智増明して、不思議の中道甚深の緣起を逮見し、(二)八顧を制止し(三)二邊を遠離す。故に經の次に「邪見を遠離し正見に通達す」と云ふ。迦葉も亦云はく、此より以前は我等を皆邪見の人と名くと。是の中の慧は不正の故に説いて邪見と名く。凡夫二乗は決擇して正しく自心の實相を知ること能はず、諦實の理に於いて乃至空を不空と謂ひ、不空を空と謂うて古佛所行の大菩提の路を見ず。今此の菩薩は明道を照見するを以ての故に即時に無礙智生ず。一切の法に於いて皆悉く現前に通達して錯謬あることなく、猶ほ明目の者の日光の中に於いて種種の諸色を觀見す



(二)龍樹大智度  
三十二卷取意の文  
なり。

るが如し。無量の天魔皆悉く佛身を化作し、各相似の波羅蜜を説くと雖も終に其の少  
分疑網の心を動すること能はず。故に經の次に「復次に秘密主此の除一切蓋障に住す  
る菩薩は信解力の故に久しく勤修せずして一切の佛法を満足す」と云ふ。是の如くの  
正見は猶ほ金剛の若くなるを以てなり、即ちこれ最上の堅信解力なり。此に依りて如  
實の巧度を進修するが故に諸佛の力無所畏解脫三昧を得、及び餘の無量の佛法皆悉く  
成就するなり。(一)龍樹の以爲へらく、冶人の如きは種種の方便を以て鑛石を消融して  
然して後に金と成す、若し神通の者は能く土木の類をして即ち金體と成さしむと。故  
に久しく勤修せずして便ち満足を得」と云ふ。是の菩薩は初發心の時即ち佛と名くる  
を以ての故に、眞實の功德度量す可らず、假使如來無量無邊阿僧祇劫に於いて分別し  
演説し玉ふとも、猶ほ盡すこと能はず。故に佛の言はく、要を取つて之を言はば、是の  
善男子善女人は無量の功德皆悉く成就するなりと。

「爾の時に執金剛秘密主復偈を以て佛に問ひたてまつる。(三)乃至、諸空を知らざれ  
ば彼よく涅槃を知るに非ず。是の故に空を了知して願常を離るべし」とは如上に佛經  
の主旨を説き玉ふに、心の實相門略して既に周備せり。時に金剛手未來の衆生をして方

(三)乃至漢字に  
て七百四十一字を  
省略す。

(一)已下三句を開  
いて更に九句の問  
を起す。九句とは  
一に菩提心相、二  
に菩提心相、三に  
心續生、四に心相  
五に時、六に功徳  
衆、七に修行、八  
に異然心、九に殊  
異なり。

(二)般若智度論  
第七十三卷に阿毗  
拔致の相貌を説  
く。阿毗拔致とは  
不退轉と譯す。

便を具足し、復餘の疑無からしめんが爲めの故に偈を以に佛て問ひ、世尊廣く其の  
義を演べ玉へと請ふ。(二)是の中に略して九句あり。「云何んが世尊此心に菩提生ずる  
ことを説き玉ふ」とは、即ちこれ菩提心の生なり。華嚴諸經の如きは廣く發菩提心の  
功徳を嘆す。今此の中には直に心の密印を問ふ。云何が此の心に菩提の種子發生する  
ことを了知する。若し已に發心する其の性云何となり。第二の句に「復云何なる相を  
以てか菩提心を發することを知る」とは、相は謂はく、性内に成すれば必ず相外に彰  
はるゝことあり(三)般若の中に廣く阿毗拔致の相貌を明すが如し。今此の中に亦菩提心  
生ずる時何の相貌かあると問ふなり。經に「願くは識心と心と勝れたる自然智生せる  
を説き玉へ」と云ふは、是れは實の如く佛の功徳を嘆じて前の二句の義を敷演し玉へ  
と請ふなり。初に識心と云ふはこれ心自覺の智なり。次に又心と言ふは、即ちこれ心の  
實相なり。意は境智俱に妙にして無二無別なることを明す。故に重ねて之を云ふ。自  
然智とは是れ即ち如來の常智なり。唯是れ心自ら心を證す、他に隨うて悟らず。言  
は佛は既に識心の人の中に於いて最も第一たり、必ず能く此の菩提の發生と及び其の  
微相とを知り玉ふべし。唯願くは之を説き玉へとなり。第二句に「大勤勇幾何の次第



ありてか心續生するや」と云ふは、大勤勇は即ち是れ佛の異名なり。徳を嘆じて而も復幾の心の次第ありてか而も此の心を得ると問を發す。第四第五の句に「心の諸相と時と願くは佛廣く開演し玉へ」と云ふは、この諸の心の差別の相と、及び相續して勝進するに凡そ幾時を経てか而も究竟の淨菩提心を得ると問ふなり。第六句に「功德聚も亦然り」と云ふは、言はく是の心の微妙の功德亦願くは世尊廣く之を開演し玉へと云ふなり。故に亦無なりと云ふ。第七句に「及び彼の行を修行する」と云ふは、次に當に何れの行を以て云何が修行して而も能く無上の悉地を獲得すべきと問ふなり。亦分ちて二句と爲べし。第八第九の句に「心と心に殊異あると唯大牟尼説き玉へ」と云ふは、謂く衆生の(一)異熟の識心と瑜伽行者の(二)殊異の心と、亦願くは世尊分別して説き玉へとなり。牟尼とは是れ寂默の義なり。言はく佛の身語心は皆究竟寂滅にして語言の地を過ぎたり。二乗の小寂に對して譬とす可らざるを以ての故に大牟尼と云ふ。

阿闍梨の言はく、是の如くの九句或は分ちて十句とすべし、此より以後經の終りに至るまで皆これ如來九問の意を酬へて廣く分別して説き玉ふ。然も佛當時の衆會を觀じて務で意を得、宗を求めしめんとして、或は後問を先に答へて文に定准なし。或は

(一) 異熟 善惡等の因によつて無記の果を得、これを異熟と云ふ。故に第八識をば異熟識と云ふ。

(二) 殊異 殊異とは功德品類差別の義なり。淨菩提心の功德種々なるを云ふ。

(三) 阿闍梨 善無畏三藏なり。

(一) 具緣品第二を指す、彼品には行者進修の方便三密の供養行門を明すの故に修行の句の答説なり。

(二) 百字果相應品 第二十を指す。

(三) 此の外尙に説百字生品、百字位成百字眞言持誦品、百字眞言法品をば等の字に攝し意得ふべし。

(四) 應度衆生 濟度せらるべき未來の衆生を云ふ。

(五) 三平等句 身語意の三平等句を云ふ。

(六) 恒沙 無數の義なり。

轉疑問を生じて以て支流を盡す。下文の(一)大悲曼荼羅に入る等の如きは、即ち是れ修行の句を答へ、(二)百字果等は即ち是れ殊異の心及び功德の句を答へ玉ふ。其の餘は相應の處あるに隨うて皆類を以て之を觀じて義知んぬべし。

次に如來金剛手に答へ玉ふ偈の中に「善哉佛の眞子廣大の心を以て利益す」とは如來の種性より生じ佛の身語心より生ずるを以ての故に眞子と曰ふ。前に大日世尊の廣大加持の境界を現じ玉ふが如く、今秘密主も亦普く是の如くの無量の(一)應度の衆生の爲めに、速に大行を成じ大疑網を裂き、同じく(二)三平等句の無盡莊嚴を獲しめんと欲ふが故に、佛嘆じて善哉佛子汝今能く廣大の心を以て、無量の衆生を利益せんが爲めの故に是の如くの問を發と言ひ玉ふ。次に勝上の大乘の句心續生の相は諸佛の大秘密にして外道は識ること能はず」とは略して七義あり、故に大乘と名く。一には法大なるを以ての故に、謂はく諸佛の廣大甚深秘密の藏は毗盧遮那遍一切處の大人の所乘なり。二には發心大なるを以ての故に、謂はく一向に平等の大慧を志求し、無盡の悲願を起して、當に普く法界の衆生に授けんと誓ふなり。三には信解大なるが故に、謂はく初めて心明道を見る時、無量の功德を具足し能く遍く(五)恒沙の佛刹に至り、大事の



(二) 三時 過去、現在、未來の三時を云ふ。

(一) 函蓋相稱 函蓋を合ふを云ふ。  
(三) 醍醐 乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五味の中、この醍醐最も淳味なり。  
(四) 已下心續生の答釋なり。

(五) 風颺 颺はツムシ風なり。  
(六) これ無の二邊を遠離する義を示す。

因縁を以て衆生を成就す。四には性大なるを以ての故に、謂はく自性清淨心の金剛寶藏は缺減あることなく、一切衆生に等しく共に之あり。五には依止大なるが故に、謂はく是の如くの妙乗は即ち法界衆生の大依止處なり。猶ほ百川の海に趣き卉木の地に依つて生ずるが如し。六には時大なるを以ての故に、謂はく壽量長遠にして三時を出過し、師子奮迅秘密神通の用未だ曾つて休息せず。七には智大なるを以ての故に、謂はく諸法無邊の故に、等虚空の心、自然の妙慧も亦復無邊なり。實相の原底を窮むること譬へば(一)函蓋相稱せるが如し。是の如くの七因縁を以ての故に諸大乘の法門に於いて、猶ほ(二)醍醐の淳味第一なるが如し。故に最勝の大乘と云ふ。乗をば進趣に名け、句をば止息の處に名く、故に大乘句と云ふ。

(四) 心續生の相とは此の心は畢竟常に淨かにして、猶ほ虚空の一切の相を離れたるが如し。而も亦因縁より起りて心相生することあり、猶ほ大海の波浪の是れ常有にも非ず常無にも非ざるが如くなり。若し常有ならば(三)風颺止息するとき則ち澄然として靜なるべからず。若し常無ならば風颺纒かに起るとき鼓怒相續すべからず。當に知るべし、是の心は縁より起るが故に即ちこれ(五)不生にして生、生にして不生なり。無相の

相は相常に無相なり、甚深微妙にして了知す可きこと難し。諸佛秘密の印なり。妄りに宣示せず。是の故に凡夫二乘兩種の外道は但し無生滅の心を識らざるのみならず、亦復生滅の心をも識らず、故に諸佛の秘密なり、外道識ること能はず、我れ今悉く開示せん、一心に應に諦聽すべしと云ふなり。

(二) 次の偈に「百六十心を越へて廣大なる功德を生ず、其の性常に堅固なり、彼れ菩提生なりと知るべし」と云ふは、略して初の問の「云何が即ち菩提心の生ずるを知る」と云ふに答ふるなり。今佛告げて言はく、百六十の相續の心を越ゆるは即ち是れ淨菩提心なりと。如し人あつて云何が此の乳の中より醍醐生ずることを知ると問はば、答へて言ふべし、乳と酪と生熟の蘇との魚濁變異の相悉く既に融妙にして復滓穢なきがごとし。當に知るべし、即ち是れ醍醐の生なり。行者最初に金剛寶藏を開發するとき、是の心性は淨虚空の如く諸の數量を超へたりと見る。爾の時に因業生を離れて佛樹の芽生ず此芽生ずる時に已に法界に遍す。何に況んや枝葉花果をや、故に廣大の功德を生ずと云ふ。心行戲論を過ぎたるを以ての故に破す可らず、轉ず可らず。猶ほ閻浮檀金の能く其の過惡を説くこと無きが如し。故に其の性常に堅固なりと云ふ。若し自心には

(二) 已下菩提心生答説の經文を釋す。



(二) 已下二菩提心相の句を答ふる經文の釋なり。

(三) 八方大風、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八風にして八迷の戲論に喩ふるなり。

(三) 已下は修行の句の答説の經文を釋す。

の如き印ありと知るは、當に知るべし、菩提生なり。

(二) 次に一偈半あり菩提心の相貌を答ふ。世間に更に法として以て淨菩提心の相を表す可き者あることなし。唯大虚空の喩の少分相似を除くを以ての故に。「無量なること虚空の如し」と云ふ。譬へば虚空の烟雲塵霧の爲めに染汚せられず、其の性常住にして諸の因縁を離れたり、假使ひ(二)八方の大風世界を吹き盡すとも、亦其をして動せしむること能はじ、本初より以來常に自ら寂滅無相にして今(三)適めたるに非ざるが如く、心相も亦爾り、無始より以來本より不生なり。本不生なるを以ての故に、一法として能く染汚し動搖せしむること有ることなし。常住不變にして永寂無相なり。故に「染汚せずして常住なり、諸法動すること能はず、本より寂にして無相なり」と云ふ。

爾の時行人此の寂光のために照されて無量の智見自然に開發すること蓮華の敷けたるが如し。故に「無量の智を成就す」と云ふ。此の智成就するは即ち是れ毗盧遮那の心佛現前するなり。故に「正等覺顯現す」と云ふ。梵本には三藐三佛陀現すと云ふなり。

(三) 佛已に略して是の如くの心の實相印を説き玉ふ。若し行者これと相應するときは、當に知るべし、已に堅固の信力を具せりと。然も此の信力は本真言門の供養儀軌行法

(二) 下文經第五卷、疏第十五卷等を指す。  
(三) 四種不生、自、他、共、無因の四不生を云ふ。

(三) 三種身語意の三密を云ふ。

(四) 龍樹の著なる中觀論には四不生、中道等の義を明すを云ふ。  
(五) 龜毛兔角に角なく龜に毛なきが如き本來無一物の説を示す。  
(六) 失處墮在、斷見に墮するを云ふ。

に従つて、説の如く修行して淨菩提心に至ることを得。故に「供養行を修行して是より初めて發心すと云ふ。此の中の供養に二種あり、一には外の供養、二には内の供養なり。(二)下の文に當に廣く説くべし。或が説いて曰はく。但し心性は無相無爲なりと觀じて、種種に紛動して菩薩の道を行すべからずと。此の説は非なり。(三)四種の不生を以て鑛中の金性を觀するに、復因にあるにも果にあるにも常に自ら減なく増なしと雖も、若し方便を以て滓穢を消融せざれば則ち此の不生の金得べきに由なきが如く、行人も亦復是の如し。若し(三)三種の秘密方便の供養行門を以て、百六十心の鑛石の垢を消融せずんば何を以てか此の淨菩提心を得ん。(四)龍樹阿闍梨の中道正觀は正しく從緣起を以ての故に無生の義を成す。而も汝(五)龜毛兔角を謂うて無生とす。是の故に(六)失處に墮在す。又世人は眞金の百鍊すれども移らざるを見て妙性窮極すとおもへり。若し五通の仙人は諸の藥物を以て種種に鍊冶し、能く土石の類を化して盡く金寶とす。其れ之を服食するもの有れば住壽長遠にして神變無方なり。當に知るべし眞金の性の中に自らは是の如くの力用あり、但し世人は秘密の方便なきが故に得ること能はざるが如く、淨菩提心も亦復是の如し。若し大悲萬行を以て種種に鍊冶すれば、神變加持



(一) 已下心續生の  
答説の經文を釋  
す。  
(二) 淨心を已下達  
理の迷心を示さん  
が爲め三十種の  
道を明す。此の順  
に反して起る故に  
順理の心は起るに  
由るとして、異生  
の闇心をして今羊  
に淨心は第二住心  
と云ふ。初の生起  
の種子心は建立  
高祖十住心を立  
し玉ふ。第一住心  
を明し玉ふ。今文  
を依て玉へり。  
第三十一卷を指  
す。

不思議の業成することを得。故に未得を得と謂ひ。初心を保つて極果を爲すべからず。  
經に「秘密主無始生死の愚童凡夫は我名と我有に執着して無量の我分を分別す。  
秘密主若し彼れ我の自性を觀せざれば、則ち我と我所とを生ず」と云ふは、以下は心  
相續の義を答ふ。(三) 淨心最初の生起の由を明さんと欲ふが故に、先づ愚童凡夫の遠理  
の心を説く。無始生死とは智度に云はく、世間の若しは衆生若しは法皆始あることな  
し。經の中に佛言ひ玉はく無明に覆はれ愛に繋がれて生死に往來して始め不可得な  
り、乃至菩薩は無始も亦空なりと觀じて、有始見の中に墮せず愚童の義は(四) 前に説く  
が如し。(五) 凡夫とは正譯には異生と云ふべし。謂はく無明に由るが故に業に隨うて報を  
受けて自在を得ず、種種の趣の中に墮して色心像類各各差別す、故に異生と云ふ。其の  
所計の我は但し誠言のみあつて而も實事なし。故に我名に執着すと云ふ。我有と言ふは  
即ち是れ我所なり。是の如くの我と我所との執(五) 十六知見等の事に從うて差別して無  
量に不同なるが如し。故に名けて分とす。次に虛妄分別の所由を釋す。故に秘密主若し彼  
れ我の自性を觀せざれば則ち我と我所とを生ずと云ふ。若し彼の諸蘊は皆悉く衆縁よ  
り生ずと觀察せば、是の中に何者か是れ我なんや、我れは何の所にか住する(六) 蘊に即し

養育、呪主、爲人、  
作者、使作者、起  
者、使起者、受者、  
使受者、智者、見  
者、これなり。何れ  
も我の別名なり。  
(六) 蘊五蘊なり

(一) 已下時外道の  
執計を明す。これ  
三十種外道の一な  
り。  
(二) 彼偈 大品般  
若經の中に明す所  
の偈なり。

(三) 地等變化  
水火風空五大に執  
計する外道を明す  
等の字に四大を攝  
するなり。此種外  
道の一なり。此種  
の外道は元來五大  
別に計するなれば  
實に五種の外道は  
一類の法にして大  
計の行相も同じき  
故に合して今これ

蘊に異し相在すとやせん。若し能く是の如く諦求せば當に正眼を得べし、然るを彼れ  
自ら觀察せず。但し展轉相承して久遠より以來此の見を祖とし習うて我は身中にあつ  
て能く所作及び長養あり諸根を成就す、唯し此のみこれ究竟の道なり、餘は皆妄語な  
りと謂へり。是れを以ての故に名けて愚童とす。

經に「復時ありと計す」と云ふは、謂はく一切の天地の好醜は皆時を以て因とす。彼  
の(三) 偈に言ふが如し。時來れば衆生熟す、時至れば則ち催促す、時能く人を覺悟せしむ  
是の故に時を因とす。更に有人の言はく、一切の人物は時の所作に非すと、然も時は是  
れ不變の因なり、是れ實有の法なり。細なるが故に見る可らず。花實等の果を以ての  
故に時ありと知るべし。何を以ての故に果を見て因ありと知るが故に、此の法は不壞  
なるが故に常なり。亦時の自性を觀せざるを以ての故に是の如くの妄計を生ずるなり。  
經に「地等の變化」と云ふは謂はく地水火風虛空なり、各各に執して眞實とする  
ものあり。或が言はく地は萬物の因なり、一切衆生萬物は地に依りて生ずることを得  
るを以ての故に。地の自性は但し衆縁和合に從うて有なりと觀せざるを以ての故に。  
而も是の見を生じて地を供養する者は當に解脱を得べしとおもへり。次に有が計す



(二) 瑜伽我相應  
外道の執計なり  
これ亦三十種外道  
の中なり。

らく、水は能く萬物を生ず火風も亦余り。或が計すらく、萬物は空より生ず、謂はく  
空は是れ眞の解脱の因なり、宜しく供養し承事すべしと。皆應に廣く説くべし。  
經に「(一) 瑜伽の我」と云ふは、謂はく定を學する者、此の内心相應の理を計して眞我  
とおもへり。常住不動にして眞性湛然なり、唯これのみ是れ究竟道なり、因果を離れ  
たり。心の自性を觀せざるが故に、是の如くの見を生じて眞我とおもへり。但し此の  
理に住するを即ち解脱と名く。

(三) 建立、不建立  
建立、不建立二種の  
外道は斷常二見の  
當る、相待的執計  
なり、この二外道  
共に三十種の中  
なり。

經に「(三) 建立淨と不建立無淨」と云ふは、是の中に二種の計あり、前句は謂はく一  
切の法を建立する者あり、此に依りて修行する之を謂うて淨とす。次の句は謂はく此  
の建立は究竟の法に非ず、若し建立なきは謂はゆる無爲なり。乃ち眞我と名く。亦前句  
の所修の淨を離る、故に無淨と云ふ。我の自性を觀せざるによりて、是の如くの見生ず  
ることあり。廣く説くこと上の如し。

(四) 已下に自在天  
流出及び時の三  
種の外道を擧ぐ、  
共に三十種の隨一  
なり、此の三者は  
自在天一類の計な  
れば一處に標釋す  
るなり。  
(五) 一類の外道  
大自在天外道。十二  
門論。

經に「(四) 若し自在天、若し流出、及び時」と云ふは、謂はく(四) 一類の外道の計すらく、  
自在天はこれ常なり、是の自在はよく萬物を生ずと、(五) 十二門の中に難じて云ふが如  
し。若し衆生是れ自在の子ならば、唯應に樂を以て苦を遮すべし苦を與ふべからず。

(二) 彼論 十二門  
論なり。

(三) 掘地 土をれ  
やす。

亦但し自在を供養せば、苦を滅し樂を得べし。而も實には爾らず、但し自ら苦樂の因縁  
を行じて而も自ら報を受く、自在天の作には非ず。又若し自在衆生を作すと云は、誰か  
復此の自在をなす、若し自在自ら作すと云は、則ち然らず、物の自作にあらざるが如し。  
若し更に作者ありと云は、則ち自在と名けじ。(二) 彼の論に廣く説くが如し。計流出と  
は建立と大同なり。建立は心より一切の法を出すが如し。此の中の流出は手の功に従  
つて一切の法を出すが如し。譬へば陶師子の(三) 埴埴無間にして種種の差別の形相を生  
ずるが如し。次に時と云ふは前の時外道の宗計と少しき異あり。皆自在天の種類なり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第一終



# 國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二

## 沙門一行阿闍梨記

入真言門住心品第一之餘

(二)尊貴 三十種外道の隨一なり。

經に「尊貴」と云ふは此れはこれ那羅延天なり。外道の計すらく、此の天は湛然常住にして不動なり、而も輔相あつて萬物を造成す譬へば人主の無爲にして而も治するに、有司命を受けて之を行するが如し。能造の主は更に尊貴する所の者あること無きを以ての故に尊貴と云ふ。又此の宗の計すらく、尊貴とは一切の地水火風空處に遍せり。昔論師ありき、彼の宗計を伏せんと欲ふが故に、天祠に往詣して彼の天像の身上に於いて坐して而も飲食す。(三)西方には飲食の殘を極不淨とするを以て皆共に忿怒す。論師の言はく、所宗の如くならば豈一切處の地水火風空界に遍する相に非ずや。答へて言はく、是の如し。論師の言はく、彼れ即ち地水火風ならば我も亦是の如し。之を以て相入するに何の不可なる所あつてか而も忿怒するや。彼の衆默然として報を加ふること能はず。亦我の自性を觀せざるに由るが故に、是の如くの妄計を生ず。

(三)西方 印度を指す。

(二)自然 三十種外道の隨一にして自然外道を明す。

經に「自然」と云ふは、謂はく一類の外道の計すらく一切の法は皆自然にして而も有なり。造作の者なし。蓮華の生じて而も色の鮮潔なるが如し、誰か染むる所ぞ。棘刺の利端誰か削り成せる所ぞ、故に知ぬ諸法は皆自爾なり。有師難じて曰はく、今日に世人を觀るに舟船室宅の類を造作するは皆衆縁によつて而も有なり、自然成には非ず、云何が自爾ならんや。若し有なりと雖も而も未だ明了ならざるが故に人功をもつて之を發すと謂はれこれ亦然らず。既に人功を以て之を發はす、即ち是れ縁による、自然有には非ず。

(三)内我 此れ亦三十種外道の一なり。

經に「内我」と云ふは、有が計すらく身中に心を離れて外に別に我性あり、能く此の身を運動して諸の事業を作す。難者の云はく、若し是の如くならば、我は即ち無常なり。何を以ての故に、若し法是れ因なると及び因より生ずるとは皆無常なるが故に、若し我無常なりと云はれ則ち罪福果報皆悉く斷滅すべし。是の如く等の種種の論義は校量の中に至つて廣く明す。經に「人量」と云ふは、謂はく神我の量は人身に等し、身小なれば亦小なり。身大なれば亦大なりと計す。(四)智度に云はく、有が計すらく神の大小は人身に隨ふ死壞する時に神亦前に出づと、即ち此れと同じ。然るを彼の

(三)人量 此れ亦三十種外道の一なり。(四)智度 智度論第十二卷の全文なり。



(二) 運殿 三十種  
外道の法は皆我  
の所生なりと計す  
る故に遍殿と云  
ふ。  
(三) 論 十二門論  
なり。

(三) 壽者 三十種  
外道の隨一なり。  
(四) 彼合昏木を  
例喻として示す。  
(五) 一支 鼻耳手  
足等の支分を云  
ふ。  
(六) 補特伽羅 此  
れ亦三十種外道  
の一なり。補特伽  
羅は補陀羅に執  
著す。補陀羅は  
新譯には數取趣  
者に執著す。舊  
譯には數取趣者  
に執著す。舊譯  
は翻す。數取趣  
者に執著す。舊  
譯は翻す。數取  
趣者に執著す。  
往來するの因を  
造り、その果を  
取るが故に爾か  
名く。

宗は我を以て常住自在の法とす、今既に身の大小に隨ふといふは即ちこれ無常なり。故に知る然らざるなり。經に(二)「遍殿」と云ふは、謂はく此の神我は能く諸法を造る、然も世間に尊勝遍殿なる事は是れ我の所爲なりと計す。自在天の計と小しき異あり。(三)論の中に自在を破して云ふが如し。自在天何が故にか盡く樂人を作し盡く苦人を作さずして而も苦者樂者ある。當に知るべし愛憎より生ず。故に自在にあらずと。今遍殿とは既に能く諸の福樂を造るといは、而も樂を以て苦を遮すること能はず。何ぞ遍常自在と名けんや。

經に「(三)若は壽者」と云は、謂はく有る外道の計すらく一切の法乃至四大草木等に皆壽命あり。草木の伐り已りて續生するが如きは當に知るべし命あり。又(四)彼れ夜は則ち卷合す、當に知るべし亦情識あり、睡眠するを以ての故に。難者の云はく若し斬伐せられて還つて生ずるを見て以て命ありとせば、則ち人の(五)一支を斷つに復増長せず、豈命なからんや。合昏木の眠あるが如くならば則ち水の流れて晝夜に息まざる、豈これ常に覺たらんや。皆我の自性を觀せざるに由るが故に種種の妄見を生ず。經に「(六)補特伽羅」と云ふは謂はく彼の宗計に數取趣者ありといふは、皆是れ一我なり。

(二) 三種法印 諸  
行無常、諸法無我、  
涅槃寂靜の三法印  
を云ふ。  
(三) 識 此れ亦三  
十種外道の一人に  
前の外道は人體に  
ついでて識を計し  
今我は直に心を取  
つは、横に三世を  
今は横に三世を  
相違なり。兩外道  
亦三十種外道の  
なり。阿頼耶を以  
て直に我と計す。

但し事に隨うて名を異にするのみ。若し今世より後世に趣くことあらば是れ則ち識神常なりとやせん。識神若し常ならば云何が死生あらん。死をば此處に滅すと名け、生をば彼處に出づと名く。故に神常なりと言ふことを得じ。若し無常ならば則ち我あることなし、佛法の中の犢子道人及び説一切有者の如きは、此の兩部は三世の法ありと計す。若し定めて過去未來現在あらば則ち數取趣者あるに同じて佛の(二)三種の法印を失す。西方の諸菩薩種種の量を作りて彼の宗計を破す。經に「(三)若は識」と云ふは、謂はく有る一類の執すらく、此の識は一切處に遍せり、乃至地水火風虛空界にも識皆その中に遍滿せりと。これ亦然らず若し識神遍常ならば獨り能く見聞覺知すべし、而も今要す根塵和合するに由つて方に識生ずることあり、即ち汝が識神は所用なしとす。又若し識神五道の中に遍せば云何が復死生あるや。故に知んぬ爾らざるなり。

經に「(三)阿頼耶」と云ふは是れ執持含藏の義なり。亦これ室の義なり。此の宗の説かく、阿頼耶あつて能く此の身を持せり、造作する所あつて萬像を含藏す。之を攝すれば所有なし、之を舒ぶれば世界に滿つ。佛法の中の第八識の義に同じからず。而も世尊密意をもて如來藏を説いて阿頼耶とし玉ふ。若し佛法の中の人自心の實相を觀せず



(一) 知者見者二種の執計を擧ぐ、共に三十種外道の中なり。  
(二) 智度。智度論第三十五卷。  
(三) 五識。眼耳鼻舌身の五識。

(四) 六根。眼耳鼻舌身意の六根。

(五) 能執所執。この二種の執計も亦三十外道の中なり。

して分別し執着すれば亦我見に同ず。

經に「(一) 知者見者」と云ふは謂はく有外道の計すらく身中に知者あり、能く苦樂等の事を知ると。復有が計すらく能見者即ちこれ真我なりと、(二) 智度に云はく目に色を見るを名けて見者とし、(三) 五識をもて知るを名けて知者とす。皆これ我計なり。事に隨うて名を異にす。難者の云はく、汝能見これ我なりと言はく而も彼の能聞、能觸知者も是れ我なりとやせん。否や。若し皆是ならば、(四) 六根の境界互に相知らず、一、六を作すべからず。六、一を作すべからず。若し我に非ざる者ありといはく、是れ亦疑に同ず。故に知んぬ、根塵和合して知見する所あり、別の我なし。

經に「(五) 能執所執」と云ふは、謂はく有外道の言はく、身中に識心を離れて別に能執者あり。即ちこれ真我なり、能く身・口・意・を運動して諸の事業を作すと。或は有が説いて言はく、能執者はこれ識心なり。其の所執の境界を乃ち真我と名く。此の我は一切處に遍せり。而も内外の身・受・心・法・の性は皆縁より生じて自性あることなし。此の中の所執能執すら尙は不可得なり、何に況んや我をや。亦我の自性を觀せざるに由るが故に是の説をなす。

(一) 内知外知。此の二種の内なり。  
(二) 社但梵。三十種外道の一なり。  
(三) 摩奴闍。三十種外道の一なり。  
(四) 智度。智度論第三十五卷。  
(五) 唐三藏。唐朝の玄奘三藏を云ふ。  
(六) 聲沙論。大般若經の聲沙論等。  
(七) 聲天義別。梵語は語基同じきも格の相違によりて轉聲して字形を變じ語義相違するを云ふ。  
(八) 摩納婆。經に「(九) 摩納婆」と云ふは、是れ毘紐天外道の部類なり。正翻には應に勝我と云ふべし、我は身心の中に於いて最も勝妙なりとす。彼れ常に心中に於いて我は一寸ばかりなるべしと觀す。(一〇) 智度に亦云はく、有が計すらく神は心中にあり微細なること芥子の如し。清淨なるを名けて淨色とす。或は豆麥の如し乃至一寸なり。初に身を受くるとき最も前にあつて受く、譬へば(一一) 像骨の如し。及び其の身を成ずるは像の既に莊嚴を擧ぐるなり。

經に「(一) 内知外知」と云ふは亦これ知者の別名なり。分つて二計とす。有が計すらく内知を我とす。謂はく身中に別に内證の者あり即ちこれ真我なり。或は外知を以て我とす。謂はく能く外塵の境界を知る者即ちこれ真我なり。

經に「(二) 社但梵」と云ふは、謂はく、知者外道の宗計と大同なり。但し部黨別異なるが故に特に之を出すのみ。

經に「(三) 若は摩奴闍」と云ふは智度には翻じて人とす、(四) 即ちこれ人執なり。具に譯せば當に人生と言ふべし、此はこれ自在天外道の部類なり。人は即ち人より生ずと計するが故に以て名とす。(五) 唐の三藏の意生と云ふは非なり。未那は是れ意なり、今は未奴と云ふ、(六) 聲轉じて義別なり、誤れり。



(一) 菩提樹梨は金剛智  
 三藏を云ふ、經に  
 非の譯語に準じて  
 意生、儒童の譯も  
 を用ひられたるも  
 故に一行阿闍梨は  
 金剛智三藏の解に  
 我より、人生の勝  
 (二) 常定生、これ  
 も亦三十種外道の  
 一なり。  
 (三) 聲非聲、二種  
 の外道を示す、こ  
 れ亦三十種外道  
 一なり、但し聲論  
 外道より聲論  
 聲顯の二類を分つ  
 故に實には三種あ  
 り。  
 (四) 以上三十種外  
 道を別釋し終りた  
 れば、已下その總  
 結の文を釋す。

(一) 上に達理の迷  
 情、生起羊の心  
 を明し了れり、已  
 下順世の八心を明  
 すことを示す、結  
 前生後の文なり。

れるが如し。唐の三藏翻じて儒童とするは非なり。儒童とは梵には摩拏婆と云ふ。此  
 の中には納と云ふ、義別なり、誤れり。(此の二名はこれ(一)菩提樹梨の解なり。)

經に「(二)常定生」と云ふは、彼の外道の計すらく我はこれ常住なり、破壊すべか  
 らず、自然に常に生じて更に生ずることあることなし。故に以て名とす。

經に「(三)聲非聲」と云ふは、聲は即ちこれ聲論外道なり。若し聲顯者の計すらく、  
 聲の體は本有なり縁を待ちて之を顯はす、體性常住なり。若し聲生者の計すらく、  
 聲は本生なり、縁を待ちて之を生ず、生じ已りて常住なりと。彼の中に復自ら異計を  
 分つ、餘處に廣く釋するが如し。非聲とは前の計と異あり。彼は聲はこれ遍常なりと  
 計す。此の宗は悉く撥して無として無善惡の法に墮在す。亦聲字なき處これを以て實  
 とす。

經に「(四)秘密主是の如く等の我分は昔より以來分別と相應して理に順じて解脱する  
 ことを希求す」とは、經の中には略して卅の事を擧ぐ。若し類に隨うて差別せば則ち  
 無量無邊あり。人の座して四禪を得るが如きは即ち此の法を計して眞實の常理とす。  
 或は此の念をなす、我はこれ禪を得たる者なりと。是の如く等は皆是れ我分と相應す。

例して知んぬべし。皆我の實相を觀せざるに由るが故に但し久遠より以來相承して此  
 の見を祖とし習へり。各々に自ら大師薄伽梵あり一切知見者なり、能く瑜伽を修する  
 を以ての故に現に此の法を覺つて而も世間のために之を説く。但しこれのみ是れ究竟  
 の道なり。更に餘道なしと謂へり。劫初の時の如きは獨り一天あり先づ梵界に生じて  
 而も此の念をなす。若更に衆生あつて來つて我と共に住せんに豈善からざらんや。時に上  
 界の天あつて命終して此の中に來生す。先に生ずる者即ち之に謂ふて云はく、我が念力  
 に由るが故に汝此に生ずることを得たり、汝は即ち我が所生なりと。彼亦是の念をな  
 す、彼の尊よく我等を生せり、即ち相隨順して計して最初に我者有りとす。これより  
 以來、是の梵天王よく世間を造ると謂へり、是の如く展轉して異見を生ずること勝て  
 記す可らず。理に順じて解脱することを希求すとは、理に順ずとは梵音には瑜祇なり。  
 即ちこれ古昔に瑜伽を修せし行者なり。彼れ眞の解脱を得る此れ萬物の宗なりと謂へ  
 り、今彼の行に順じて解脱を希求するが故に然か云ふ。已上は皆これ内外の因果を破  
 壞する達理の心なり。(二)次に最初順理の心を明す。順は即ちこれ世間の八心なり。  
 經に「秘密主愚童凡夫の類は猶は羶羊の如くなれども、或る時一法の想生すること







て後遂に華開く  
上す、施心更に向  
中第五なり。

(二) 成果 華落ち  
て後遂に果實を結  
ぶ如く、施心愈々醇  
熟せる所なり、こ  
れ八心中第六心な  
り、この六心まで  
を第二住心の分齊  
とす。

(三) 受用種子 果  
實既に成熟してこ  
れを受用する如  
く、齊施の利益に  
なつて死後に八心  
するに至るなり、こ  
中の第七心なり、こ  
(三) 三業 身口意  
三業なり。

伎樂の人能く大衆を化して其をして歡喜せしむるを以ての故に其の功を賞するなり。凡そ此の如くの類衆多なり。是を以て等と云ふ。尊宿といふは耆舊にして見聞する所多く、及び學行高く尙ふして世の師範とする所なり。その遵利する所多きを以ての故に誠をいたして歡喜して之に施與す。亦我が施の時の心をして倍歡喜せしむるが故に即ちこれ華種なり。

經に「復此の施を以て親愛の心を起して而もこれを供養す。これ第六の(二) 成果なり」と云ふは、謂はく所習醇熟して直に歡喜するのみに非ず。復よく親愛の心を以て尊行の人に施與す。又前の施の因縁に由つて法利を聞くことを得て、彼れ内に勝徳を懷くと知り、能く欲等を出離せりと謂うて狎習親附してこれを供養す。初の種子に望むれば即ちこれ成果の心なり。

「復次に秘密主彼れ戒を護つて天に生ずるは、これ第七の(三) 受用種子なり」とは、謂はく已に能く齋施を造しその利益を見て即ち知んぬ、(三) 三業の不善は皆これ衰惱の因縁なり。我當に之を捨て、戒を護つて住すべし。戒を護るに由るが故に現世には諸の善利を獲、大多聞あつて身心安樂なり。倍また増廣にして賢善なり。命終して天に生

ずることを得。譬へば種果已に成じて其の實を受用するが如し。故に受用種子と云ふ。又云はく、一種子より百千の果實を成す。是れ一一の果實は復若干を生ず。展轉滋育すること擧げて數ふべからず。今此の受用果の心復つて後心の種子となること亦復是の如し。故に受用種子と曰ふ

經に「秘密主此の心を以て生死に流轉して、善友の所に於いて是の如くの言を聞く、此はこれ天なり、大天なり、一切の樂を與ふるものなり。若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、謂はゆる自在天等なり。(二) 乃至彼れ是の如くなるを聞いて心に慶悅を懷き、殷重に恭敬し隨順して修行す。秘密主これを愚童異生の生死流轉の(三) 無畏依の第八(三) 嬰童心と名く」と云ふは、已に尊行の人宜しく親近し供養すべしと知り、又持戒して能く善利を生ずるを見る。即ちこれ漸く因果を識る。今復善知識の此の大天あり能く一切の樂を與ふ、若し虔誠に供養すれば所願皆滿つと云ふを聞いて即ち能く歸依の心を起す。未だ佛法を聞かずと雖も、然も此の諸天は善行を修するに因つて此の善報を得と知り、又漸く勝田を信解し甄別す。復佛法の殊妙を聞かば必ず能く歸依し信受すべし。故に世間の最上心とす。問うて曰はく、前に自在天等は皆これ邪計なりと説

(二) 乃至 (二) 乃至  
經文中略せり。  
(三) 無畏依 無畏  
は恐怖を離るる  
義、依は歸依する  
所の外道の三寶等  
なり。  
(三) 嬰童心 此れ  
八心中第八に於  
て、高祖は前に受  
用心と今心とによ  
りて第三住心と建  
立し玉ふ、嬰童と  
は年少の兒童を云  
ふ。











二小劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟  
劫終竟小劫終竟小劫終竟

少しく此の味を食し、常に自ら誠節せんに亦善からざらむやと。然も此の衆生亦未だ因果後世の報を識らず。但し展轉相承して仁義慙愧等を謂うて以て善法とす。能く是の如く行する者有れば、世間共にこれを稱譽す。又二小劫終竟の時の如きは衆生忽爾に發心す。世間の惡法は過患なりと知つて更相に勸導し、共に善事を行す。爾の時に亦善知識の勸導の然らしむるなし。當に知るべし、皆是れ自心の實相の熏習する因縁力なり。最初の種子微塵計りの心垢を離るゝ時、即ち微塵計りの淨心の勢力を顯すが如きは、善の種子生すと云ふと雖も、それ實には即ち是れ不生の生なり、これ堅固の性なるを以ての故に、衆生の識心にあつて終に敗亡せず。未だ自心の實際大金剛輪に至らざる中間には更に住處なし。果復て種となり、展轉滋長すと雖も、然も亦阿字門を出でず。故に最上大乗の句心續生の相は、諸佛の大秘密なり、外道は識ること能はじと云ふ。法華の藥草喻品亦意これにあり。復次に行者三寶に歸依し、如來の律儀に順隨して、一日の中に於いて八齋の法を受く、聖戒に防護せらるゝに由るが故に寂靜安樂なり。安樂を以ての故に則ち賢聖の所行を信じて數數修習す。是を初の種子と名く、此の善をして増長せしめんが爲めに、而も諸善を修す。乃至戒醇淨なるに由つて、決定して天

二已下心相答說  
文中に六十種の染  
心を示せり。但し染  
經文には五十九種  
を擧ぐ、疏には九種  
を無畏三藏大本の意  
を加へ補うて六十心  
とし玉へり。

に生じ後には涅槃に至る。是を受用種子と名く。復善知識に親近するに由るが故に、正法の利を聞いて異の歸依の心を起さず、これ生死流轉の凡夫の第八の眞實の無畏依なり。又此の中に於いて殊勝に住して解脱を求むる慧生すること有り。思惟し觀察して決定の想を生ず。此より即ち聲聞の菩提の初の種子心を發す。皆前の文に準例して廣く分別して説くべし。乃至三乗の一一の地に皆十心を具す、第十地にいたるまで亦種子・芽・苞・葉・花・果・等を具し、佛地を求むる智生じて、畢竟空を觀じ金剛際に至ることを得ることあり。「爾時に金剛子復佛に請ひ上りて言さく、唯し願はくは世尊彼の心を説き玉へ、是の如く説き已つて、佛金剛手秘密主に告げて言はく、秘密主諦に聽け、四相とは謂はく、貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、乃至云何が受生心、謂はくおよそ行業を修習して、彼に生ずることあり、心是の如く同性なり」とは、此れ前の問の中の諸の心相の句を答ふるなり。初には六十心の名を列ね、次には其の相を釋す。「秘密主彼れ云何が貪心謂はく染法に隨順す」とは、謂はく前の境に染着す、即ち是れ淨心を染汚するなり。若し此の法に隨順し修行するを有貪心と名く。心法は微細にして識り難きを以て、但し彼の所爲の事業を觀するに必ず相外に彰はるゝことあり。譬



へば烟の状貌を鑿みて即ち火性を比知すべきが如し。故に諸句多く順修を以て義を明す、以て例すべきこと然り。此等は皆是れ未だ出世の心を得ざるより以來善と種種に雜起する心なり、若し行者善く真偽を識つて、猶ほ農夫の務めて穢草を除き以て嘉苗を輔くるが如くすれば、即ち淨心の勢力漸漸に増長す。是れ因縁の事相なりと謂うて、至言を輕忽し心をして其の中に没して自ら覺知せざらしむること勿れ。

第二に「云何が無貪心謂はく無染の法に隨順す」と云ふは、謂はく前の心と相違せり。乃至進求すべき所の善處にも亦復願樂を生せず。是の故に善法に染せず、俱に善萌を障ふ。無染汚の心と名同うして事異り、最も須らく觀察すべし。是の故に行者但し貪心の實相を觀するに、自然に貪して心を染せず。是の如くの無慧不貪の行を起すべからず。

第三に「云何が瞋心謂はく怒法に隨順す」とは、怒は謂はく瞋心發動して事外に彰はる。心法は識り難きを以ての故に、怒法に順修するを以て之を釋す。若し數是の如くの不寂靜の相を起すは即ち知んぬは是れ瞋心の相なり。但し此の衆縁の中に於いて瞋心を觀するには自ら所住なくして即ち此の障生せず。

(一) 慈無量心大  
乘菩薩の所修の觀  
法に慈喜捨の四  
無量心あり、今そ  
の二なり。  
(二) 經文には「修  
不觀法に隨順す」  
とあり。

(三) 佛境界は難思  
議の境にして、凡  
人の慮知すべから  
ざる妙境なり、故  
に凡智にて壽量計  
度するこゝを難  
す。  
(四) 世智辨聰佛  
法に入るに因難な  
る處八ヶ處あり、  
世智辨聰はその一  
なり。

第四に「云何が慈心謂はく慈法に隨順し修行す」とは、此の慈は亦これ瞋と相違せり。愛見心垢の慈なり、善種の所生には非ず。上の慈の字は内心に據り、下の慈の字は是れ外相所爲の事業なり。既に覺知し已んぬれば但し妨道の失を治す。轉轉して慈無量心を修する即ちこれ對治なり。

第五に「云何が痴心謂はく不觀の法に順修す」とは、謂はく前の言の善惡是非を觀せず、遇へば即ち信受す。凡そ所爲の事業先づ慧心を以て甄別して是非を籌量すること能はず。是の如く等は諸の誤失多し。皆是れ癡心の相なり。

第六に「云何が智心謂はく殊勝増上の法に順修す」とは、謂はく是の人種種の所說の中に於いて、皆智を以て此れは勝れたり、此れは劣れり此れは受くべし此れは受くべからずと簡擇して、其の勝上の者をとつて而して後に之を行すれば即ちこれ無癡の相なり。然も道人の法は智力の籌量の能く及ぶ所に非ず。唯信する者のみ能く入るのみ。是の故に世智辨聰の難を觀察する是れ彼の對治なり。

第七に「云何が決定心謂はく尊の敎命を說の如く奉行す。第八に云何が疑心謂はく常に不定等の事を收持す」とは、今先づ疑心を釋することは決定心の相をして解し具



(二) 智度偈 智度  
論第十七卷に疑蓋  
を除去すべきこと  
を明し、偈を以て  
人の岐道に在つて  
疑惑して趣く所な  
きが如く諸法實相  
に疑ふも亦是の如  
しと説けり。

く明了ならしめんがための故なり。謂はく此の人聞く所あるに隨うて便ち不決定の心を生ず。受戒の時の如きは便ち自ら疑心を生ず、我れ今定んで戒を得しや、もしは得ざるべしや、或は師を疑ひ法を疑ふ。諸事例して爾り。人の道を行くに疑惑を以ての故に前進すること能はず。(三) 智度の偈に云はく、乃至譬へば岐路を觀て好利の者は逐ふべきが如し。是れ彼の對治なり。又決定心とは謂はく善友等の如法の教命を聞くに隨うて、便即ち疑慮を生せず、心を至して奉行す。然も亦當に慧を以て觀察して正決定の心を生ずるなり。

第九に「云何が關心、謂はく無疑慮の法に於いて疑慮の解を生ず」と云ふは謂はく、四諦不淨無常等の如きは世間の智者疑を生ずべからず。然も彼れこれを聞いて心に猶豫を懐くこと、夜株杭を見て種種の憶度の心を生ずるが如し。若し見に是の如くの相あらば當に知るべし、暗心の然らしむる所なり。

第十に「云何が明心、謂はく不疑慮の法に於いて疑慮なくして修行す」と云ふは、謂はく、決定の法印の疑慮すべきに非ざる法に於いて、彼れ聽聞する所に隨うて即ち能く懸に信ず。當に知るべし是れ明心なり。然も是の中に若は過ぎ若しは及ばざる即ち

是れ道を障る心なり。更に中慧に處する、これ彼の對治なり。

第十一に「云何が積聚心とは謂はく、無量を一とするを性とす」とは、謂はく此の人事に隨うて信解を生じ已て更に種種の殊異の法を聞いて皆合集して一とす。人の一三昧を學得し已て餘の經教無量の法門差別の勝事を見て皆此の定心を説く、此れを離れて外に更に餘法なしと謂ふが如し。故に積聚心と名く。

第十二に「云何が闘心、謂はく互相に是非するを性とす」とは、謂はく他の所説の言教を聞いて常に好んで是非を辨論す。謂はく是の義は爾るべし、是の事は然らずと。假使言ふ所理に合へども亦種種の方便を以て其の長短を伺求し失處に墮在せしめんと欲ふ。設ひ他來つて問ふ時にも亦復其の長短を求めて、此の問は乖僻せり、我れ答ふべからずと言ふ。是の如くの相現することあるは當に知るべし是れ闘心なり。

第十三に「云何が諍心、謂はく自己に於いて而も是非を生ず」とは、謂はく内には非の心を懐く、自ら一義を思惟し竟つて輒ち復自ら異端を設けて其の失を推求し善心を以て人に諮受して既に領受し已ると雖も、還つて自ら得失を推求し此の事は爾るべし、此はしかるべからずと謂ふが如し。多く是の如くの相現することあるは當に知るべし、



これ諍心なり。

第十四に「云何が無諍心ムジヤウシン謂はく是非シホ俱クに捨スつ」とは梵本の轉聲に准せば、六十心の下に於いて皆レ爲性の字あるべし、例して知るべきなり。謂はく其の心向背を懐かず、先に宗習する所に是の如くの見解を作すと雖も、更に異言の違を以て理に合するを聞いて即ちこれを受行し、或は先には以て是とすれども、他の以て不善とするを聞いて即ち能くこれを改む。情に所執なうして是非シホ俱クに捨スつ。是の如き相あるが如きは當に知るべし、これ無諍心なり。無記無諍の心を覺知して、諸法の實相無諍の心を修するこれ彼の對治なり。

第十五に「云何が天心、謂はく心念ココロネンに隨うて成就せしむと思ふ」とは諸天の先世の果報を以ての故に若し所須あれば功力を加へざれども心に隨うて生ずるが故に。數々かくの如き願樂を起すは、當に知るべしこれ天心なり、亦曾シヤし上界ジョウカイに生ぜしに由るが故に此の習あり。如し眞言行人遠大の果を期せずして、たゞ自心の爲めに牽ヒキかるれば能く淨菩提心を障ふ。當マタに自ら覺知して世間の悉地を貪ること勿れ。是れ彼の對治なり。

第十六に「云何が阿修羅心アシュラシン謂はく生死に處せんと樂ふ」とは、阿をば名けて非とし、修羅をば天と名く。其の果報天に似たれども而も行業住處不同なるを以ての故に。以て名とす。此れ解脱の利ありと知れども、但し深く生死の果報快樂クワクを樂タノシうて進趣シンソするこゝと能はず。若し行人此の相貌あらば當に知るべし修羅心と名く。亦先世に曾シヤし此の趣に生ぜしに由るが故に此の習あり。無常苦等を觀察するこれ彼の對治なり。

第十七に「云何が龍心リウシン廣大の資財を思念す」とは、謂はく數々シバシバ是の念をなす。我當マタに何れの方便を以てか是の如くの廣大資財勝妙の珍寶を獲べき。此の多貪にして厭ウツくとなき想あるは是れ龍趣の心なり。亦本龍趣の中より來るが故に此の習を生ず。憙ウレんで行人をして世人の悉地を願求せしめて出世の淨心を障ふ。少慾知足無常等を思惟する、是れ彼の對治なり。

第十八に「云何が人心ニシン謂はくレ他利を思念す」とは、謂はく好んで追求し思念すらく某甲は我に於いて恩あり、我れ當に是の如くの方便を以て大利を得しむべし。某甲は曾シヤし我が所に於いて不饒益あり、今當に之を報すべしと。及び種種に人を理トコはり物を利するの計皆是れ人心なり。當マタに自ら心行を觀じて早く法利を求め、紛マギ転として他縁を思慮すべからず。これ彼の對治なり。

（二）他利經には  
利他リタあり。

（一）爲性 梵語に  
つては格の異なるに因  
つて字を異にす。  
爲性ウヰヤクは爲格にし  
て即ち「...の爲に」  
又は「に」と譯すべ  
き格を云ふ。







雙べて兩岸に依り、其の漂流する所の物亦定めて一邊に係はらざるが如し。此の中の對治は謂はく行人心を一境に專にすれば即ち能く至到する所あり。若し心定守せずして能く事業をして俱に辨せしむとならば此の理なし。

(二) 陂池 ヲ、ミを云ふ。

(三) 乳糜 乳を入  
れて煮きたる粥を  
云ふ。

第廿四に「云何が陂池心謂はく渴して厭足なき法に隨順す」とは譬へば(二)陂池の若し衆水流入すれども終に厭足なきが如く、此の心も亦爾り、若し名利眷屬等の事その身に來聚すれども終に厭足なし。乃至所學の法に於いても亦爾り。已に(三)乳糜を得て務て速に食せずして更に復渴して餘味を望むが如し。是の中には少欲知足を以て對治とす。第廿五に「云何が井心謂はく是の如く思惟すること深くして復甚深なり」とは、謂はく俯して井水を闚るに淺深の量知り難きが如く、此の心の性も亦是の如し。凡そ思惟する所好んで尙は深遠なり。所有の善不善の事皆人をして測量すること能はず、共住同事にも亦其の心行を識らざらしめんと欲ふ。當に知るべし是れ井心なり。緣起の法門及び善人の相は皆顯了にして知り易し是れ彼の對治なり。

第廿六に「云何が守護心謂はく唯し此の心のみ實なり、餘心は不實なり」とは、世人の己身の財物等を護らんが爲めの故に乃至塙を周し閤を重ね種種に防守して他の爲め

(二) 龜六 龜の四  
足頭尾の六を護  
して他をして損  
しめざるを云ふ。  
六は身心等の六  
根に喩へしなり。

に傷られしめざるが如く、此の心も亦爾り、常に心身を守護すること、乃至(二)龜の六を藏して外境をして傷られしめざるが如し。謂く唯此の行のみ實なりと爲うて諸餘の有作の務め皆不實なりとす。聲聞を學する者多く此の心を生ず。兼ねて他人を護るを以て所對治とす。又人あり自ら所解を保つて他の種種の異論に傷られしめんと欲はず。餘の見解は悉く皆不實なりと謂ふ。亦是なり。

第廿七に「云何が慳心謂はく己が爲めにして他に與へざる法に隨順す」とは、謂はく此の人諸有の所作皆悉く自身の爲めの故なり。財物伎藝乃至善法皆好んで秘惜して以て人に惠ます。此の相ある者は知んぬ、是れ慳心なり。施及び無常等を念するを以て所對治とす。當に財物伎能無常に設ふ時には我に隨うて去る者あることなし。然も今此の身念念に自ら保つ可らず。如何が此れを惜まむやと。

第廿八に「云何が狸心謂はく徐進の法に順修す」とは猫狸の禽鳥を伺ひ捕るに息を屏して靜かに住し務て速に進まず、度内に望み至つて然して後に之を取るが如く、此の人も亦爾り。種種の法要を聞くに遇うて、但し作心して領受し記持すれども、而も進行せず、良縁の會合を待つて則ち當に勇健に勵んで之を行すべしと冀ふ。又猫狸の種種



の慈育を蒙れども亦恩分を識らざるが如く、若し人但し他の慈悲善言を受くれども而も報を念せざるは是れ狸心なり。時處を待たずして聞くが如く、すなはち行じ常に恩徳を念するを以て所對治とす。

第廿九に「云何が狗心カウシン謂はく少分を得て以て喜足を爲す」とは、狗の薄福の縁を以て所期下劣なり。故に少分セウブン麤鄙の食を得るに遇うて便ち喜足を生ず。若し稍く此れに過ぐれば則ち本所望に非ざるが如く、此の心も亦爾り。少分の善法を聞いて便ち行せむに盡すべからずと以て復更に勝事を求めず。此れは聲聞の種習の所生なり。増上の意樂を以て所對治とす。乃至心は大海の少なけれども亦拒まず、多けれども亦溢れざるが如し。

第卅一に「云何がカマバウシン迦樓羅心謂はく朋黨羽翼の法に隨順す」とは、此の鳥は常に兩翅リウシを待みて其の身を挟み輔け、意に隨うて以て大勢をなす。假ひ一羽もかぐれば則ち能く爲す所なし。此の心も亦然り。常に多く朋黨と輔翼と相資る事を得て以て事業を成さんと念ふ。又他の所作によつて而も後に心を發して獨り進むこと能はず。如し人の善を行するを見ては、便ち彼れ尙ほ能く行す我何ぞ爲さざらんと念ふ。當に念すべし

(一) 迦樓羅 迦樓羅は鳥の名なり、翅鳥又は妙翅鳥等と譯す。常に龍を捕つて食す。八部衆の一なり。

勇健の菩提心は師子王の如くして、助伴に籍らざるを所對治とす。

第卅二に「云何が鼠心ソウシン謂はく諸の繫縛を斷せんと思惟す」とは、鼠は他の箱籠繩係等を見て輒ち好んで非理に損壞す。亦念をなさず。此れを斷するに由るが故に我をして是の如くの利を得しむと、但その趣なくして之を爲すが如く此の心も亦爾り。所有の繫屬と及び成事とに、好んで間隙をなして之を狙敗す。

第卅三に「歌詠心カエイシン」とは梵本に文缺けて釋せず。(一) 阿闍梨の言はく、此れは傳法の音に喩ふるなり。世人の(二) 曲を他に渡して善巧を得已りて、復他人の爲めに之を奏するに種種の美妙の音を出し、聞く者歡喜するが如し。此の心を他に從うて正法を聽聞し、我れ當に轉た衆生のために種種の文句を以て莊嚴し、分別し演說して、此の妙音をして處處に聞知せしめんと欲ふ。多く是れ聲聞の宿習なり、亦能く淨心を障ふ。當に念すべし、我當に内證自然の慧を得て然して後に普現色身をもて而も之を演說すべし。是れ彼の對治なり。

第卅三に「云何が舞心ブシン、謂はく是の如くの法を修行して、我當に上昇して種種に神變すべし」とは、世人の支分散動するを説いて名けて舞とするが如く、神變も亦しか

(一) 阿闍梨 善無長三藏。  
(二) 曲を他に度す。管曲を他に傳ふるを云ふ。



り。種種の未曾有の事を現じて前の人をして心淨く眼を悦ばしむ。多くこれ五通の餘習なり。若し偏に是の如くの悉地を尙び、方便をもて願求するも亦淨心を障ふるなり。當に除蓋障三昧をもて心に散動なく、神通をもて滅定を起たずして、加持神變を作さんと念ず。世間の小驗を貪すること勿るべし是れ所對治なり。

(一) 擊鼓心 此の心は粗前の歌詠心  
は相似たり 彼れは  
音曲を習ひ 是れ  
相違あるのみ 而  
して此の心を簡ふ  
は自證の得悟を思  
はすして偏に他を  
驚するを簡ふな  
義、辭、樂の四無  
礙辯を云ふ。

第卅四に「云何が(一)擊鼓心とは謂はく、是の法を修順して我れ當に法鼓を撃つべし」と云ふは、鼓は能く衆生を警誡して覺悟を得しむ。若し行人是の如くの念をなす、衆生に夜に昏寢す、我當に種種の(二)無礙辯才を習ひ、大法鼓を撃ちて而も之を警悟すべしと。亦能く淨心を妨礙するなり。當に早く無量の語言陀羅尼を證して天鼓の妙音を以て普く一切衆に告げんと念ずべし。世間の小利を以て大事の因縁を妨ること勿れ是れ彼の對治なり。

第卅五に「云何が室宅心(三)謂はく自ら身を護る法に順修す」とは、人の舍宅を造立して其の身を庇衛し、寒熱風雨盜賊惡蟲等の種種の不饒益の事を免るゝことを得るが如く、此の心も亦爾り。我れ當に戒を持ち善を修して自ら防護するを以て、今世後世をして惡道の衆苦を遠離せしむ。多くこれ聲聞の習なり。當に一切衆生を救護せむと念

じて、獨り一身に非ざるべし。これ所對治なり。

第卅六に「云何が師子心(四)謂はく一切の無怯弱の法を修行す」とは、師子の諸獸の中に於いて所生の處に隨うて皆勝れて怯弱あることなき如く、此の心も亦爾り。一切の事の中に於いて皆一切の人に勝れ心怯弱せざらしめんと欲ひ、自心に難事あること無く、能く我と其の優劣を稱ふる者なからしめんと謂へり。若し自ら覺知し已りなば、當に釋迦師子の心を發すべし。當に一切衆生をして遍く勝れて優劣あることなからしむべし。是れ所對治なり。

第卅七に云何が(五)鵝鶻心、謂はく常に暗夜に思念す」とは、此の鳥は大明の中に於ては能く爲す所なく、夜は則ち(六)六情爽利なり。若し行者晝は所聞ありと雖も、誦習するに昏憤(七)にして其の善巧を得ず、暗夜に至んぬれば所爲の事を思憶し、重ねて復籌量するに便ち明了なることを得。乃至(八)禪觀等を修するに亦暗處を以て勝れたりとす。若し覺知し己んば、當に等しく明暗に於いて作意する所晝夜の別なからしめんと念すべし。是れ所對治なり。

第卅八に「云何が鳥心(九)謂はく一切處に驚怖し思念す」とは、鳥鳥は若し人善心を

(一) 鵝鶻心、ツク  
なり。  
(二) 六情爽利 眼  
耳鼻舌身意の六  
の明かにさときを  
云ふ。  
(三) 昏憤 心闇く  
亂るゝを云ふ。  
(四) 禪觀 禪定を  
修するを云ふ。



(二) 猜畏 猜疑怖畏するを云ふ。

もて附近し惠養し、或る時には其の便を伺求するに、俱に(二)猜畏の心を生じ、一切時に性常に是の如くなるが如く、此の心も亦爾り。善友の饒益をなさんと欲ひ、及び之を陥誤する者なりと雖も、一槩に猜阻して疑懼を懷き、乃至戒を持ち、善を修する時にも亦生死に於いて驚怖の心を懷く。若し覺知し已んなば當に安定無畏の心を修すべし。是れ彼の對治なり。

第卅九に「云何が羅刹心、謂はく善の中に於いて不善を發起す」とは、若し人の善事を爲すを見ては皆不善の意解を作す。佛は諸の塔廟を造るものは無量の福を得と説き玉へり。而るを彼れ反つて是の言をなす、此れに由るが故に横に無量の小蟲を損じ施主を煩擾す、將に何の益する所かある。當に苦報を受くべしと。發起と云ふは謂はく是の如く等の不善の心を生起するなり。是の中には但し功德利益を觀て、彼の短を念せざるを以て所對治とす。

第卅に「云何が刺心、謂はく一切處に惡作を性とす」とは、猶ほ(三)棘藪は一切處に於いて損妨する所多く、近く者をして不安ならしむるが如く、此の人の心も亦爾り。若し善事を行するに大施等の如きは、既に作しをはりて便ち追悔の心を生ず。若し惡事を

(二) 經文には「惡作を發起する性」とあり。  
(三) 棘藪、いばらの群り生じたるが。

(二) 惡作 追悔の心なり。

作り竟つて、復自ら思惟して亦慙懼を懷く。是の故に常に(二)惡作を懷いて動慮不安なり。此の中の對治法は、若し犯あらば速に務めて懺除して、悼悔を生ずること勿れ。所爲の善事をば自ら思惟して、慶幸の心を生ずべし。

第四十一に「云何が窟心、謂はく窟に入ることをなす法に順修す」とは、謂はく諸龍阿修羅等は皆地下、或は海底深窟の中に在り。多く祥仙の諸藥あつて、能く長壽自在を得。行者或は彼の中に多く美女あり、端正にして諸天に同じ、妖逝の憂なく、(三)五欲自恣なるべしと念ひ、或は彼の中に留住して劫壽を得、未來の諸佛を見たてまつるべしと念するは皆これ窟心なり。當に念すべし、法の如く修行して此の生に於いて法明道を見、乃至成佛すべし、枉路稽留して此の世仙の法を念すべからず。是れ彼の對治なり。

第四十二に「云何が風心、謂はく、一切處に遍じて發起するを性とす」とは、風性は散亂なり、不住に由るが故に。此の人の心も亦爾り。一切處に於いて遍く善根を種う。謂はく世間の外道種種の天尊及び三乘の諸行の中に於いて皆分あらしめ、而も是の念を作す。多くの種子をもて一切處に於いて之を遍すれば、會ず之を成ず者あるが如し。

(二) 五欲自恣、色聲香味觸の五境即ち眼等の五根の欲求する所、自己の欲恣なるを云ふ。



△石田不毛 盤  
石ある田の稻を作  
るに由なきを云  
ふ、これ外道及び  
顯の三業に喩ふる  
なり。  
△福田膏腴 善  
き肥えたる田を云  
ふ、これ眞言眞實  
の教に喩ふるな  
り。

當に知るべし、是れ風心なり。當に念すべし、石田は不毛なり、虚く種子を費す、當に良美の福田膏腴の處を求めて專意に耕耨すれば所獲必ず多かるべしと是れ彼の對治なり。

第四十三に「云何が水心、謂はく一切の不善を洗濯する法に順修す」とは、水性の清潔にして暫く諸垢のために汗さると雖も之を澄ませば則ち淨く、又能く垢穢を洗除するが如く、此の人の心も亦爾り。常に垢惡を發露し三業の衆罪を懺洗せんと欲ふ。此れ垢此れ淨なり、我れ是の如く行すべしと見るを以て則ち能く淨心を障礙す。但し當に心の實相を觀じて本よりこのかた垢法不生なりと了し、自ら能く一切の蓋障を除く。是れ彼の對治なり。

第四十四に「云何が火心、謂はく熾盛の炎熱を性とす」とは、火性の赫奕として躁疾なるが如く、此の人の心も亦爾り。若し善を造る時は須臾の間に於いて能く無量の功德を成じ、惡を造るにも亦少時に極重の業を成す。此の中の治行は應に猛暴の心は敗傷する所多し、柔和慈善の水を以て方便をもて滅せしめ而も熾然の善事を務めて恒に久からしめんと思惟すべし。是れ彼の對治なり、

△泥心 分別の  
難なき心なり、上  
の癡心は便に遇  
て信受し、今心は  
全く分別なき心な  
り。  
△阿闍梨 善無  
長三藏。

第四十五に「云泥心」とは梵本に文缺けて釋せず、阿闍梨の言はく、此れはこれ一向無明の心なり、乃至目前の近き事も亦分別し記憶すること能はず、故に律に猶ほ泥團の如しと云ふ。又泥濘の淖弱なるが故に越度を事とし難きを以て、要す由籍する處あらしむ。謂はく橋梁等を假つて方に能く之を越ふるが如し。若し此の方便ありと覺れば必ず須らく善友に歸憑して、方便をもて開發して乃ち漸く無知を去り還つて慧性を生ぜしむべし。

第四十六に「云何が顯色心、謂はく彼れに類するを性とす」とは、譬へば青黃赤白等の染色に若し、素絲之を入るゝ時は便ち與に色を同うするが如く、此の人の心も亦是の如し。善法を見聞しては亦彼れに隨うて行じ、惡事を見聞しては亦依隨し修學す。乃至無記も亦爾り。種種の境界に對して事に隨うて而も遷る行人自ら覺知し已んば當に念すべし。自證の法を專求するには他に由つて悟らず、他縁のために轉せられずと。是れ彼の對治なり。

第四十七に「云何が板心、謂はく量に隨ふ法に順修して餘善を捨棄するが故に」とは、板の水中に在るに其の分量に隨うて諸物を受け載せて、限を過ぐる時は勝ふる

△素絲 白色無  
染の糸なり。

△板心 廣大の  
意樂なき心なり。



（二）承上以來。古よりこのかた。

こと能はず。終に亦傾けて之を弃つるが如く、此の人の心も亦爾り。善法を簡擇して己が力分に隨うて一事を行じ已つて便ち此の語をなす。我れ（二）承上以來ただ此の法のみ行じて其の他を知らず。乃至八齋を習行しても即ち捨離せず、更に餘善を行はんとねがはずと。以て廣大の心を發し菩提行を學ぶ。これ所對治なり。

第四十八に「云何が迷信とは謂はく所執異に所思異る」とは、人の迷ふが故に東に向はんと欲して而も西に向ふが如く、此の人の心も亦是の如し。意には不淨觀を學ばんと欲へども而も反つて淨相を取つて自ら我れ今不淨觀を修すと謂へり。若し無常無我を修する時も反つて常我倒の中に行じて我れ今無常無我を修すと謂へり。心散亂するに由るが故に然らしむるなり。當に念すべし、其の心を專一にし、審諦し安詳にして無倒に觀察せんと。是れ彼の對治なり。

第四十九に云「何が（二）毒藥心、謂はく無生分の法に順修す」とは、毒は謂はく龍蛇藥草諸の惡毒なり。人の毒に中つて悶絶し轉死地に趣いて生分あることなきが如く、此の人の心も亦爾り。善心をも生せず、又惡心をも生せず。乃至一切の心をも生起すること能はず。但し任運に而も行じて漸く無因無果の中に入る。故に無生分の法と名

（三）毒藥心 無因無果に修入する心なり。

（二）羂索心 羂索は繩なり、此の心は斷見を縛す。

（三）重障 六十心の中に最も重障なりとの意なり、これ菩提薩埵に相違するが故なり。

（三）靜亂 靜は入定、亂は出定の時なり。  
（四）西方 印度を指す、印度の夏三月は雨期なり。  
（五）滯淫昏墊 滯淫は淫昏墊に滞るるを云ふ、義にして昏墊はくらく濁ひ溺るゝを云ふ。

く。行人自ら覺知し已んば應に大悲の衆善を發起して斷滅の空を離るべし。即ちこれ所治の甘露の妙藥なり。

第五十に「云何が（二）羂索心、謂はく一切處に我縛に住するを性とす」とは、人の羂索の爲めに縛られて、乃至手足支節動轉することを得ざるが如く、此の心も是の如し。斷見我縛の中に墮つ、此の見は能く行者の心を縛し乃至一切處に於いて常に爲めに拘へられ自ら出づること能はず。最もこれ（三）重障なり。既に覺知し已んば應に速に縁起正慧の刃を以て障蓋を決除すべし。是れ所對治なり。

第五十一に「云何が械心、謂はく二足止住するを性とす」とは、手に在るを杻と曰ひ足に在るを械と曰ふ。人の械のために持へらるゝが故に二足停住して前進することを得ざるが如く、此の心も亦爾り、常に端座を好み寂然に住立して而も定心を修し、及び法義を觀察して此れが爲めに拘へらるゝが故に名けて械心とす。此の中の治行は當に一切時處に於いて思惟し修習して（三）靜亂無間ならしむべし。是れ所對治なり。

第五十二に「云何が雲心とは謂はく常に降雨の思念をなす」とは、（四）西方の夏三月中の如きは霖雨特に甚うして常に（五）滯淫昏墊なるを以ての故に時俗憂樂思慮の心蔚翳滋



多なり。故に降雨の時の思念を作すと云ふ。覺知し已んば、則ち當に捨心を行じて世間の憂喜を離れ法喜に隨順すべし。是れ所對治なり。

第五十三に「云何が田心アノシン謂はく、常に是の如く自身に事ふることを修す」とは、人の良美の田あるに常に修治し耕墾して荒穢を共除し、種種の方便を以て清淨なることを得しむるが如く、此の人も亦爾り。常に好んで其の身に事ふることを修するに香花滋味等を以て灌塗し奉養し務めて光潔嚴好ならしむ。覺知し已んば常に念すべし、此の功力の其の心に事ふることを修するを廻して、是の如くの諸の供養の具を以て福田に播植して勝果を資成せんと、是れ彼の對治なり。

第五十四に「云何が鹽心エンシン謂はく思念する所彼れ復思念を増加す」とは、鹽性の鹹くして凡そ所入の處あるに皆鹽味を増すが如く、此の人の心も亦是の如し、所思の事に於いて復思念を加ふ。欲色を憶想する時の如きは適タビに此の意を生じて還つて復自ら推求すらく、是の心は誰に由つてか而も生ずる、何の相貌をか作す。此れを觀する心未だ決せざるに復この推求の慮は何の因縁かあると念す。是の如く則ち窮盡なし。既に覺知し已んば當に一向に心をシ諦理に安じて務めて穿徹ケンテツならしむべし。又心性は念を離れ

（二）諦理 眞實の勝義諦を云ふ。諦理に安住するは初地淨善攝心の位なり。

て憶度して能く知るに非ず。分別の上に於いて更に心數を増さすれ。

第五十五に「云何が剃刀心アトトウシン謂はく唯是の如く剃除する法に依止す」とは、鬚髮シュウハツを剃除するは是れ離俗出家の相なり。謂はく此の人心に但し是の念をなす。我已に俗相を剃除して惡法をして復滋シきことを得ざらしむ、更に何の求むる所かあらんと。當に知るべし、此の心は最惡なり、自ら分限を作すを以ての故に、能く所有の善根を剃除して生ずることを得ざらしむ。當に念すべし、一切シ賢聖の斷すべき所の者は謂はゆるシ無明住地三毒の根なり。若し能く此を剃つて妄想をして生ぜざらしむるを乃ち眞の出家と名く。

第五十六に「云何が彌盧等心ミロトウシン謂はく常に思惟の心シ高擧なるを性とす」とは、須彌山ミセンの高くして衆峯に絶へ能く其の上に出づる者なきが如く、此の人の心も亦爾り。常に高擧を以て性とす。乃至師僧父母等の尊敬すべき所の處にも皆意を下すこと能はず、猶ほ高擧の屈撓すべからず、若しこれを撓めんと欲すれば必ず當に折れぬべきが如く、終に其の常操を改めずして、忍辱謙卑を以て一切衆生に於いて大師の想をなすを所對治とす。

（一）賢聖 三賢十聖なり。  
（二）無明住地三毒 無明住地は能生の根本無明、三毒は人法二執に通ず。  
（三）高擧 高きに居る心にして高慢なるを云ふ。



第五十七に「云何が海等心、謂はく常に是の如く自身に受用して而も住す」とは、譬へば大海の百川之れに歸すれども吞納して限なきが如く、此の心も亦爾り。一切の勝事に於いて皆之れを己に歸せしむ。餘人を嫌うて、比する者有ることなからしめんと謂へり。常に自らは是の如く衆多の所長を待みて自らこれを受用して而も住す。前の心は務めて高し、此の心は務めて廣し、故に海と等同なりと云ふ。行者覺知し已んば當に念すべし、三賢十聖等の無量の大功徳海は展轉して深廣なり。自ら心行を尅するに會て未だ其の塵滯を得ず、大慢の心を起す應らずと。

第五十八に「云何が穴等心、謂はく先には決定して彼れ後には復變改するを性とす」とは、譬へば完堅の器の後に若し縁に遇うて、穿穴するときは堪任する所なきが如く、此の心も亦爾り。初時には受持する所多く、後に稍穿漏す。或は初め發心受戒せし時は具足して欠げたることなく、久しからずして漸く漏法を生ず。已敗の器に同じて法水停らず。凡そ此の如くの例皆穴心と名く。故に行者當に所爲の事をして皆終始あらしむべし、又性多く變改するは最も能く堅固の菩提心を障礙すと知るを彼の對治とす。

(二) 白黒業 白は十善、黒は十惡なり。善惡の業を云ふ。

(三) 阿闍梨 善無畏三藏。

第五十九に「云何が受生心、謂はくおよそ行業を修習して彼れに生ずることあり。是の如く同性なり」とは、人の(二)白黒の業に由つて善惡の報を受け所作種種に雜るに由るが故に彼彼の無量差別の身を受くるが如く、此の心も亦爾り。所修の諸行皆受生に廻向せんと欲ふ。當に知るべし、得果にも亦善惡を兼ぬ。故に行者當に念すべし、善惡を甄擇して不善を除去し、純ら白法を修し、此の善の中に就いて又復慧を以て更に龜鏡を去つて是の如く次第に乃至純一清淨の醍醐の妙果を成ずることを得むと、是れ所對話なり。

第六十心は梵本に文缺げたり、(三)阿闍梨の云はく、一の猿猴心かけたり。猿猴の性は身心散亂して常に暫くも住せず、行人も亦爾り。其の性躁動にして不安なるが故に攀緣する所多し。猶ほ猿猴の一を放ちて一を捉ふるが如し。大略之を言は、衆生は悉く然り。今偏盛なるに就いて而も言ふ。此の中には動散の想に隨はずして縁を一境に繋ぐるを以て是れ所對治なり。猶ほ猿猴の若し之を柱に繋ぎぬれば則ち復情を肆にし、蹠擲騰躍せざるが如し。是れ所治なり。然も此の六十心は或る時には行者の本性偏多なり。或は道を行する用心に由つて先習を發動す。或は一時に雜起し或は次第に



而も生ず。當に一切の時に於いて心を留めて覺察すれば自然に淨菩提心に順することを得。若し阿闍梨弟子のために心地を平治せん時亦當に一一に簡去すべし。

(一) 已下心相及び心殊異の答釋を明す。その中に三劫を明す。經文中略す。

(二) 經に「秘密主一二三四五再數すれば凡そ百六十心あり。世間の三妄執を越へて出世間の心生ず。(三)乃至四分が一に信解を度す」と云ふは、亦是れ諸の心相及び心殊異を答ふ。無明あるに由るが故に五根本の煩惱の心生ず。謂はく貪、瞋、痴、慢、疑、なり。五見を説かざる所以は屬見の煩惱多く六十心の中にあるを以てなり。此の五根本の煩惱初に再數すれば十となり、第二に再數すれば二十となり、第三に再數すれば四十となり、第四に再數すれば八十となり、第五に再數すれば一百六十心となる。衆生の煩惱の心は常に(四)二法に依りて中道を得ざるを以ての故に事に隨つて名を異にす。輒ち分つて二とす。此の二が中について復更に展轉して細しく之を分つ、其の名相は具に十萬の偈の中に説くが如し。若し更に上中下九品等に約すれば乃至八萬の(五)塵勞となる。廣すれば即ち無量なり。譬へば一種子より五根本を生じ一根本に於いて皆破して二枝となる。第五の破に至つて則ち百六十の小枝となる。此れより又更に離分すれば則ち條葉勝げて計ふべからざるが如く、又劫初の時の如きは人皆化生にして念を

(二) 二法 斷常有無等の二法なり。

(四) 塵勞 煩惱なり。

而も生ず。當に一切の時に於いて心を留めて覺察すれば自然に淨菩提心に順することを得。若し阿闍梨弟子のために心地を平治せん時亦當に一一に簡去すべし。

(一) 阿含 長阿含經第二十二卷。  
(二) 五陰 色受相行識の五蘊なり。  
(三) 阿闍梨 善無長三藏。  
(四) 阿僧祇 無數と譯す。

(五) 常途 顯教を指す。

以て食とし身光自然にして安樂無礙なり。然も心の實相を知らざるを以ての故に稍地肥を貪著す。食味の多少によつて色貌隨つて異り、是非勝負の心これによつて生ず。憍慢の心あるを以ての故に福利衰滅して地肥隱沒し、乃至地膚林藤亦復現せず。次に自然の硬米を食するに、始めて男女の類あつて姦盜殺妄等の種種の悲法次第に而も起る。是の事は(一)阿含の中に廣く明せり。是より以來種種の族姓種種の方俗あつて、種種の業煩惱の結を起し、種種の衆生趣を成じ、種種の(二)五陰の身を造る。一切智人に非ずんば則ち其の條末を究むること能はじ。諸(三)阿闍梨この喻をなす所以は、一無明の心、事に隨つて離分すれば即ち(四)阿僧祇の妄執と成ることを表せんと欲ふなり。「世間の三妄執を越へて出世間の心生ず」とは、若し淨菩提心を以て出世間の心とせば、即ち是れ三劫を超越する瑜祇の行なり。梵に劫跋と云ふに二義あり。一には時分、二には妄執なり。若し(五)常途の解釋に依らば三阿僧祇劫を度して正覺を成ずることを得。若し秘密の釋ならば、一劫を越ゆる瑜祇の行とは、即ちこれ百六十心等の一重の龜妄執を度するを一阿僧祇劫と名く。二劫を越ゆる瑜祇の行とは又百六十心等の一重の細妄執を度するを二阿僧祇劫と名く。眞言門の行者復一劫を越ふとは更に百六十心







れども方便力を以て大悲を發起すること能はず。菩薩は是の如くの法を悟る時、即ち此の心垢漸く除く。所以に淨心漸く現すと知る。爾の時に即ち菩提心の勢力を得て能く不住の道を以て種種の度門を學ぶ。故に同共一法の中にして而も昇沈異あり。

經に「一切外道の知る能はざる所」とは、此の宗の中に兩種の外道ありと説く。外道の外道は猶ほ清潭を觀見して逆め怖畏を生じ敢て習近せざるが如し。内の外道は能く其の中に遊泳して熱を適め垢を除いて清涼の樂を得と雖も、然も是の中に無量の寶王ありと云ふことを覺らず。一は即ち入らずして而も識らず、二は則ち入つて而も識らず。故に一切の外道知ること能はずと云ふ。「先佛一切の過を離れたりと宣説し玉ふ」とは、言はく十方三世の諸佛は唯し此の一門のみあつて群迷を誘進し火宅を出し玉ふ。是の處は復障礙なく、戲論生ぜざるが故に種種の因量の諸師能く其の過を出す者なし。然も未だ法障を度せざれば未だ眞淨の菩提心と名けず。蓮華の已に濁泥を離れたれども尙ほ未だ水を出でざるが如し。故に經に「彼の出世間の心は蘊の中に住す」と云ふ。行者瑜伽の中に於いて湛寂の心已に明顯なりと雖も然も事に涉るとき、根塵識等猶尙心に當るを以て有爲を厭怖するに由るが故に無爲の法に着す、然も菩提

(一) 火宅 生死界の三界に喩ふ。

(二) 法障 五蘊實有の見なり。

(三) 蘊 五蘊なり

(一) 四句 四不生なり、即ち自よりも生ぜず、他よりも生ぜず、自他俱因より生ぜず、又無因より生ぜざるを云ふ。

(二) 情塵 六識六境を云ふ。

(三) 隣虛 微塵を云ふ。隣虛は行陰行蘊なり。

心の勢力を以て自然に他教に由らざるなり。是の如くの慧隨つて生ずることあり。能く蘊等に於いて其の心を發起して離着の方便を修するに五種の譬喩に於いて無性空を觀察す。初の句に「聚沫を觀察す」とは、水上の浮沫は目に觀つべく種種の形ありと雖も、性質を推求するに了に不可得なるが如く色陰も亦爾り。若は龜若は細衆縁より生ぜざるはなし。縁生の生は無性なり。即ちこれ色の本不生なり。次の句に「浮泡」とは夏時の暴雨には水上に浮泡あり。亦但し衆縁に屬す。(一) 四句をもて之を觀するに都て起滅なきが如く、受陰も亦然り諸の苦樂等は皆情塵和合によつて生ず。從縁は無性なり。即ちこれ受の本不生なり。次の句に「陽炎」とは春月の地氣日光これに望むに水の如し。迷渴の者企求の心を生じて奔趣す、徒らに勤めて去り之にいよいよ遠きが如く、衆生も亦爾り。縁起の性空を知らずして有法の想を生ず。若し實想を悟るは即ち想の本不生なり。次に「芭蕉」とは人芭蕉の中の堅實を求めて乃至分分に之を披拆し隣虛に至るにまた不可得なるが如く、行陰も亦しかり。一微動境に涉るに衆縁より生ぜざることなし。縁生は無性なり、即ちこれ行の本不生なり。次に「幻事」とは世間の咒術藥力の人の心を蔽惑して種種未曾有の事を現するが如く、識陰も



（二）聲聞經 小乘  
經を云ふ、増一阿  
含、雜阿含等の經  
に五喻を出せり。

（三）大般若 大般  
若經中諸處に説け  
り、一所を指すに  
非ず。

また爾り。一念の無明より幻心初めて三界に出づ。其の源本を究むるに都て生滅去來なし。當に知るべし衆緣より生ずるに自性なきが故にまた復本不生なり。聲聞經の中には此の五喻を説くと雖も而も意は無我を明すなり。今此の中の五喻は意諸蘊の性を明す。五蘊を觀するが如きは當に知るべし。十二入、十八界、六入、十二緣等皆應に皆廣く分別して説くべし。大般若の中の説の如し。行者是の如く觀察するとき無性門より諸法の即空に達し、一重の法例を離れて心性を了知することを得。是の如く蘊界處能執所執の爲めに動搖せられず。故に「證寂然界」と名く。此の寂然界を證するとき漸く二乗の境界を過ぐ。蓮華の未だ開敷せずと雖も而も稍清流の上に出づるが如し。行者も亦しかり、復心蘊の中に没せず。故に「出世間心」と名く、若し正譯に據らば當に上世間心と云ふべし。

「秘密主彼れ違順の八心の相續と業煩惱の網とを離る」とは、前の所説の如く、種子根垢等及び三寶に歸依し、人天乘の爲に齊施の善法を行するを皆順世の八心と名く。若し三乗の初發道意より業煩惱の根本無明の種子の十二因縁を生ずるを抜くに至るまで違世の八心と名く。或は見道修道等の諸位に就いて之を分つに各自に八心あるべし

（一）辟支佛 緣覺  
乘なり。

（二）已下三劫の中  
第二重を明す此  
種の中に他緣覺心  
の住あり、今兩  
大乘の第六住心他  
なり。

大乘の行者諸蘊の性空を了達するが故に一切法の中に於いて都て所取なく、亦所捨もなし。雙べて違順の八心と我蘊兩倒二種の業煩惱の網とを離るゝを、是を一切を超越する瑜祇の行と名く、瑜伽とは譯して相應とす。若し女聲を以て之を呼ばば則ち瑜祇と曰ふ。謂はゆる相應とは即ちこれ觀行應理の人なり。常途の解釋によらば是の菩薩發心より以來一大阿僧祇劫を経て、方に是の如くの寂然界を證す。今秘密宗には但し此の一重の妄執を度する則ち一阿僧祇劫を超ふるなり。行者未だ此の劫を過ぎずして辟支佛の位と齊しきとき名けて極無言說處とす。爾の時に心無爲の法相に滯まる、若し方便を失へば多く二乘地に墮し、小涅槃を證す。然も菩提心の勢力を以て還つて能く悲願を發起す。此れより以後三乗の徑路始めて分かる。然も所觀の人法俱空は成實諸宗と未だ甚だ懸に絶せず。猶ほ偏眞の理に約して此の平等觀をなすのみ。故に三乗の上中下の出世間の心を以て一僧祇劫に合論す。第二僧祇に至つて乃ち二乗と異なるなり。

經に云はく、「復次に秘密主大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性なし、何を以ての故に彼れ往昔に是の如く修行せし者の如く蘊の阿賴耶を觀察して自性は幻、陽



(一) 對治悉檀  
 (二) 對治悉檀  
 (三) 對治悉檀  
 (四) 對治悉檀  
 (五) 對治悉檀  
 (六) 對治悉檀  
 (七) 對治悉檀  
 (八) 對治悉檀  
 (九) 對治悉檀  
 (十) 對治悉檀  
 (十一) 對治悉檀  
 (十二) 對治悉檀  
 (十三) 對治悉檀  
 (十四) 對治悉檀  
 (十五) 對治悉檀  
 (十六) 對治悉檀  
 (十七) 對治悉檀  
 (十八) 對治悉檀  
 (十九) 對治悉檀  
 (二十) 對治悉檀

焰、影、響、旋火輪、乾闥婆城の如しと知る」とは、即ち是れ第二重に法無我性を觀ずることを明す、梵音に犍鉢羅と云ふは是れ無の義なり、亦是れ他の義なり。謂はゆる他縁乘とは謂はく平等の大誓を發して法界衆生の爲めに菩薩道を行す、乃至諸の一間提及び二乗の未入正位の者も亦當に種種の方便を以て折伏攝受して普く同く是の乘に入らしむべし。此の無縁の大悲に約するが故に他縁乘と名く。又無縁乘とは此の僧祇に至つて始めて能く阿陀那深細の識を觀察し三界は唯心なり、心の外に更に一法として得べき者なし、此の無縁の心に乘じて而も大菩提の道を行す故に無縁乘と名く。此の無縁乘の心は即ち是れ法無我性なり。行者初切に觀行を修せし時、心蘊の中に没するを以ての故に五種の無性空門を以て法無我を觀す。然も縁生の中道に望むれば、猶ほ對治悉檀に屬す。若し般若の方便を失へば即ち斷滅に墮して惡趣空の者の濫方廣道の人と名く。今大乘不可得空の相は空相も亦不可得なり。諸法は所有なしと觀すと雖も然も亦諸法に於いて所空なし。故に離有離無の道を須て法無我性を觀す。智性を淨除せんと欲ふが爲の故に。古昔の諸の菩薩の修學に隨順して蘊の阿頼耶を觀す。即ち楞伽解深密等の經の八識三性三無性皆是れ此の意なり。經に「自性を知る」と云ふは

(一) 大乘莊嚴論  
 (二) 大乘莊嚴論  
 (三) 大乘莊嚴論  
 (四) 大乘莊嚴論  
 (五) 大乘莊嚴論  
 (六) 大乘莊嚴論  
 (七) 大乘莊嚴論  
 (八) 大乘莊嚴論  
 (九) 大乘莊嚴論  
 (十) 大乘莊嚴論  
 (十一) 大乘莊嚴論  
 (十二) 大乘莊嚴論  
 (十三) 大乘莊嚴論  
 (十四) 大乘莊嚴論  
 (十五) 大乘莊嚴論  
 (十六) 大乘莊嚴論  
 (十七) 大乘莊嚴論  
 (十八) 大乘莊嚴論  
 (十九) 大乘莊嚴論  
 (二十) 大乘莊嚴論

即ちこれ三界唯心を知るなり。幻、陽焰、影、響、旋火輪、乾闥婆城の六喻の如きは皆これ雙べて有無を辨じて蘊の阿頼耶の別縁起の義を明すなり。前劫の上の五喻に無性空を觀する意と復殊ることあり。阿頼耶とは義には含藏と云ひ、正翻には室とす。謂く諸蘊の中に於いて生じ、この中に於いて滅す、即ちこれ諸蘊の巢窟なり。故に以て名とす。然も阿頼耶に三種の義あり。一には分別の義、二には因縁の義、三には眞實の義なり。(一) 大乘莊嚴論の「求真實の偈の中に云ふが如し。「離二と迷依と無說無戲論とを以ての故に、應に知るべし三性俱に眞實なり」と。云ふ所の離二とは謂はく分別性の眞實なり。能取所取畢竟して無なるに由るが故に。迷依とは謂はく依他性の眞實なり、此に由つて諸の分別を起すが故に。無說無戲論とは謂はく眞實性の眞實なり。自性無戲論によるが故に、次に求真實の譬喩を説く。偈に云はく「彼の幻を起す師の如く譬を以て虚分別を説く、かの諸の幻事の如く譬をもて二種の迷を説く」と、釋して曰はく幻師の咒術力によつて木石等を変じて以て迷因とするが如く、是の如く虚分別の依他性も亦爾り、種種の分別を起して顛倒の因とす。又幻像の金等の種種の相貌顯現するが如く、是の如く所起の分別性も亦爾り。能取所取の故に二迷恒時に顯現す。次



の偈に云はく「彼れ無體の如くなるが故に第一義に入ることを得。彼れ可得の如くなるが故に世諦の實を通達す」と。此の中の意の言はく、彼の幻者と幻事との實體あることなきが如きは此れ依他分別の二相の亦實體なきに譬ふ。此の道理に由つて即ち第一義諦に通達することを得。又幻者と幻事との體亦得べきが如きは、これをもて虚妄分別に譬ふること亦爾り。此の道理に由つて即ち世諦の實を通達することを得。又二偈に云はく「彼の事無體の故に即ち眞實の境を得、是の如く轉依の故に即ち眞實の義を得」と、釋して云はく、若し人彼の幻事無體なりと了すれば即ち木等の實境を得。若し諸菩薩彼の二迷無體なりと了して轉依を得るとき、即ち眞實性の義を得るなり。又偈に云はく「是の事は彼の處に有なり、彼の有體亦無なり、有體有ることなきが故に、是の故にこれ幻と説く」と。此の偈は幻事有にして而も非有なることを明す。何を以ての故に有とは謂はく幻像の事、彼の處に顯現するが故に、非有とは謂はく彼の實體不可得なるが故に、是の如く有體と無體と無二なり、此の義に由るが故に彼れ是れ幻と説く。又偈に云はく「無體も無體に非ず、無體に非ざるは即ち體なり。無體と體と無二なり。是の故にこれ幻と説く」と。此の偈は幻事非有にして而も有なることを明す。何を以ての

（二）本論には此の偈已下に六頌あり、初四頌は通計所執を明し、後二頌は依他起性を明す。

（二）本論に三偈あり。

故に、非有とは謂はく彼の幻事無體なり、實體なきに由るが故に。而有とは謂はく幻事無體に非ず像顯現するに由るが故に、是の如く無體と有體と無二なり。此の義に由るが故に彼れ是れ幻と説く、此の幻は即ち諸蘊に譬ふ。是の故に當に知るべし、虚妄分別は有にして而も非有なり、何を以ての故に、彼の二影顯現すれども而も實體不可得の故に、故に色等の有體即ち是れ無體なり。復次に虚妄分別は非有にして而も有なり、何を以ての故に彼れ二つながら都て實體なければども、然も影顯現すること有るが故に、故に色等の無體と有體と無二なりと説く。此の有と無と不二なるに由つて能く建立と誹謗と及び小乗の寂滅に趣くとを遮す。然る所以は無體に由つて無體を知るが故に安立すべからず。有體に由つて世諦を知るが故に誹謗すべからず。又彼の二別無きを以ての故に體を厭ひ小涅槃に入るべからず。（二）彼の偈に又云はく「幻像と及び取幻とは迷の故に二有りと説く、是の如くかの二無けれども而も二有ることを得べし、骨像と及び取骨とは觀の故に亦二と説く、無二なれども而も二と説くこと得べきこと亦是の如し」と。前偈の意の云はく、迷人は幻像と及び取幻とに於いて迷を以ての故に能取所取の二事ありと説く。彼の二無しと雖も而も二を得べし。迷に由つて顯現するが故に。後偈の意







(一) 一轉開明他  
緣乘より更に一轉  
し向上したるを云  
ふ。  
(二) 前劫倍勝初  
劫の聲緣二乘より  
倍勝せるを云ふ。

(三) 阿字門、阿字  
門の理なり、これ  
に相字義の別あり  
りて、今は字相な  
り。  
(四) 上煩惱、根本  
無明の上を起る無  
量の煩惱を指す。  
(五) 勝鬘、實性、佛  
性、勝鬘經、實性、佛  
性論及び佛性論を指  
す。

る」と云ふは、心主は即ち心王なり有無に滯らざる以て心に罣礙なく所爲の妙業意に隨うて能く成す。故に心主自在と云ふ。心主自在といふは即ち是れ淨菩提心の(一)更に一轉の開明を作して(二)前劫に倍勝せるを明す。心王は猶ほ池水の性の本より清淨なるが如し、心數は淨除すること猶ほ客塵の清淨なるが如し。是の故に此の性淨する時即ち能く自ら心の本不生を覺る。何を以ての故に心は前後際俱に不可得なるを以ての故に。譬へば大海の波浪の緣より起るを以ての故に、即ちこれ先にも無く後にも無し、而も水性は爾らず、波浪の緣より起るとき水性はこれ先に無きにも非ず、波浪の因緣盡くる時水性はこれ後になきにも非るが如く、心王も亦復かくの如く前後際なし、前後際斷するを以ての故に復境界の風に遇うて緣に従うて起滅すと雖も、而も心性は常に生滅なし、此の心の本不生を覺るは即ち是れ漸く(三)阿字門に入る。爾の時に復百六十心等の塵沙の(四)上煩惱の一重の微細妄執を離るゝを第二阿僧祇劫と名く。故に經に「自心の性を知るは是れ二劫を超越する瑜祇の行なり」と云ふ。此の中の無爲生死の緣因生壞等の義は(五)勝鬘、實性、佛性論の中に廣く明すが如し。今且く宗義を明すが故に詳に説かず。

(一) 已下第三劫を  
明す。

(二) 餘教菩薩三  
乘の菩薩を指  
す。

(三) 淨菩提心門  
初地を指す。  
(四) 淨菩提心なり、初  
地は心明道と名く  
覺つて大惠の光明  
を生じ諸佛所行の  
道を見ざるが故に  
して名な樹つるな  
り。

(一) 然も上來は始を原ね終を要むるに一毫の善を發すよりこのかた、人法有無の二障を超越するに到るまで宗極炳著にして轉妙轉深なりと雖も、猶ほ是れ心外の垢を對治して尙ほ未だ此の心中秘密種種の不思議の事を開かず。此れより以後方に乃ち之を説くべし。若し此の如くの對辯をなさずんば即ち常情各先習を翫んで、其の微妙を覺ること能はじ。經に云はく「復次に秘密主眞言門に菩薩の行を修行する諸菩薩は、無量無數百千俱胝那瘦多劫に積集する無量の功德智慧と具に諸行を修する無量の智慧方便と皆悉く成就す」とは、即ち是れ第三劫を超ふる心を明さんと欲して、見聞者をして信樂し尊重せしめんと欲ふが故に、先づ其の功德を歎す。知るべし、(二)餘教の中の菩薩の如きは方便對治の道を行じて次第に漸く心垢を除き無量阿僧祇劫を経て或は菩提に至ることを得るあり、或は至らざる者あり。今此の教の諸菩薩は則ち是の如くにはあらず、直に眞言を以て乗として(三)淨菩提心門に超入す。若し此の心(四)明道を見る時諸菩薩の無數劫の中に修する所の福慧自然に具足す。譬へば人あつて舟車を以て跋渉し險難惡道を経て五百由旬に達することを得。更に一人あり直に神通に乗じて空を飛んで度る。其の經過する所及び所到の處則ち異り無しと雖も而も所乗の法に殊あるが如し。又世尊先に











猶如意寶あつて石礦の中に在り。世人識らざるを以ての故に衢路の間に弃てをいて瓦礫と異ることなし。然るを寶を別ふる者は微相あつて纔に影の外に彰はるゝを見て即便ち之を識つて先づ利鐵を用ひて鈍石を鑄り去り、既に寶玉に近きぬれば其の石漸くア灰なり。復諸藥を以て之を食うて礦穢をして消化せしむ。而も復其の質を傷らす。爾の時に龜垢已に除いて尙ほ細垢あり。既に洗ふに灰水を以てし、磨くに淨壘を以てし種種の方便をもて之を瑩發す既に光顯はるゝことを得れば、之を高幢に置いて能く一切の所求に隨うて普く衆物を雨す。爾の時世人奇時の想をなして是の寶を尊重すること猶は大天の如し。能く希願する所を充滿するを以ての故に、然も此の寶は一時の間に於いて普く衆心に應ひその所得に隨うて各々差別あり。然も此の衆物は寶の中に於いて先より有りとせんや、先より無しや。若し先より有りと云はゞ、即ち此の小球に何ぞ能く頓に衆物を藏めん。若し先より無しと云はゞ、又何ぞ能く頓に衆物を雨さんとはいんか。即ちこの世間の寶性すら已に不可思議なり。何に況ん衆や生の菩提心の寶をや。是の故に諸の善知識纔に衆生の世間の八心の適めて萌動するを時即便ち是れ眞實なりと識り、鑿るべきの理ありと知ること、彼の相者の曾て多く名寶を識るを以て、是の

△三歸 佛法僧の三寶に歸依する戒を云ふ。  
○三心 三劫の三乘を三種とする、此の三心三種即三心なり。

ゆるに遇へば即ち之を識るが如し。諸佛菩薩も亦爾り。久しく已に親り一毫の善より自ら大菩提の道に致ることを證知し玉へり。是の故に彼の情機を鑑みて即ち大に歡喜して方便をもて誘進して三歸を受けしむ。前に已に分別して説くが如し。譬へば彼の頑石を收めて家中に置在する。が如し次に三種の三心を以て業煩惱の根無明の種子を抜くは利鐵をもて開鑿して其の龜鏝を去るが如し。次に無緣乘の法無我性を觀するは漸くナ災處に至り、藥物を以て消化して之を傷らざるが如し。次に極無自性心を生ずるは、灰水をもて瑩拭して極光淨ならしむるが如し。爾の時に佛家に生ずるをば高幢に置在して種種の寶を雨すと名く。此の因縁を以ての故に世間の廣大の供養を受くるに堪えたり。若し行者直に眞言門に従つて心寶を見ることを得るは、仙人の咒術に善くして神力を以て之を取るが如し。巧拙難易同じからずと雖も、寶を得ること遂に異路なし。故に此の經に淺より深に至るまで廣く心相を明すことは、皆菩提心の本末の因縁を開示せんが爲めなり。若し但し常途の法相に依らば則ち諸佛の大秘密我今悉く開衍すと言ふことを得ず。

△三 已下十地の釋段なり。  
○淨菩提心 淨菩提心は初地なり

經に「秘密主信解行地に三心と無量波羅蜜多の慧觀と四攝法とを觀察す、信解地は



(一) 十住地 三賢位の中十住地は非ず、十地を指す。舊譯には十地を多く十住と翻ぜり。  
 (二) 華嚴の第三十八華嚴の第三十四、六十華嚴の第二十、五、十地品に釋す。  
 (三) 諸波羅蜜 檀、戒、忍、進、禪、慧、方、願、力、智の十波羅蜜なり。  
 (四) 無所畏 十無所畏なり。  
 (五) 不共 十不共なり。  
 (六) 十無盡界 華嚴所説の十不可盡法に當る。即ち衆生、世界、虚空、法界、諸佛智慧、佛心、所縁、起智及び世間轉法輪の十不可盡なり。これ亦華嚴經十地品の説なり。  
 (七) 十六願 此れ亦華嚴十地品に出づ。轉法輪、修行、利、成就衆生、承事、淨土、不離、利益、

無對なり無量なり不思議なり、十心を建立し無邊の智生ず」と云ふは、此の經宗は(一)淨菩提心より以上の(二)十住地は皆是れ信解の中の行なり。唯し如來をのみ究竟一切智地と名く。(三)華嚴の中に云ふが如し。初地の菩薩は能く如來本行の所入を信じ、(四)諸波羅蜜を成就することを信じ、諸の勝地に入ることを信じ、(五)力を成就することを信じ、(六)無所畏を具足することを信じ、不可壞の(七)不共の佛法を生長することを信じ、不思議の佛法を信じ、無中邊の佛の境界を出生することを信じ、隨つて如來の無量の境界に入ることを信じ。果を成就することを信す。是の如き諸事に於いて其の心畢竟破壞すべからず、復縁他に隨うて轉せざる故に信解行地と名け、亦は修行地に到ると名く。三心を觀察すとは即ちこれ因根究竟の心なり。若し信解地を通論せば則ちこれ初地の菩薩は、この虚空無垢の菩提心を得る時、自然に(八)十無盡界に於て(九)十大願を生じ乃至百萬阿僧祇の大願を満足す。此れを以て即ち是れ菩提心を因とす。二地より以去は大悲萬行を増修す。即ちこれ無盡の大願十法界に於いて根を生ずるなり。乃至漸次に增長して第八地に至るより以去を皆方便地と名く。佛性論に云はく、八地以上は境界皆同なり、但し方便に約して階降をなすのみ。若し一一の地を觀すれば亦自ら三心あり。衆多の十

# 欠



# 欠

## 國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第二

### 沙門一行阿闍梨記

#### 入真言門住心品第一之餘

(一) 經に「爾時に執金剛秘密主佛に白して言はく、世尊願くは救世者心相を演説し玉へ菩薩は幾種の無畏處を得ることあるか、乃至當に一切法自性平等無畏を得べし」と云ふは、猶これ前の心相の句を答ふ。金剛手既に此の教の諸菩薩は直に真言門に乗じて菩薩地に上ると聞くを以ての故に、世尊此の菩薩道を行する時、幾種の無畏處を得ることあると問ひ上る。佛還つて復前の三劫に約して差降をなして對明し玉ふ。梵音の阿濕縛娑、正譯には當に蘇息處と言ふべし。人の強力者の爲めに喉を扼とくられて氣を閉ぢ、將まさに悶絶せんとするに垂たんで、忽ちに放捨を蒙つて還つて復蘇よみがへることを得るが如く、衆生も亦復是の如し。妄想業煩惱の爲めに纏はれて縁に觸れて皆閉ぢらる。此の六處に至るは再び生ずることを得るが如し。故に蘇息處と名く。亦險惡道を度する時、其の心泰然として畏懼する所なきが如し。故に無畏處と名く。佛の言はく「(三) 秘密主

(二) 已下六無畏を釋す、此れ眞言行者轉昇の次位を明すものなり。これ亦心相答釋の文なり。

(三) 六處 六無畏處なり、六無畏とは善無畏、身無畏、無我無畏、法無畏、法自性平等無畏なり。(三) 已下第一善無畏を釋す。







(二) 如來五眼、顯  
教の如來の五眼、  
天、惠、法、佛、  
の五眼なり。

(一) 已下は修行の  
句の答なり、その  
の中は今十喻の  
は又十縁生句さ  
も云ふ、即ち幻、  
陽焰、夢、影、乾  
陽焰、響、水月、  
浮泡、虛空、華及  
旋火、輪、此れ等  
三、乃至、經文を  
中略す。

時、我と蘊と法と及び無縁と皆同一性なり。謂はゆる自性無性なり、此の空智生すれば即ち是の時に極無自性心生するなり。業煩惱等に於て都て所縛なく亦所脱なし。故に一切法自性平等を得と云ふ。爾の時に有爲無爲界の二種の扼縛に於いて蘇息處を得。即ちこれ眞言行者の虚空無垢の菩提心なり。然も此の心は在纏出纏に皆畢竟じて無相なり。(二) 如來の五眼を以て諦觀すれども尙ほ其の像貌を得ること能はじ、況んや餘の生滅の中の人をや。今廣く三劫六無畏の衆多の心相を明す所以は、皆是れ外迹に擬儀して以て修證の深淺を明すのみ。上に已に烟の相を見て以て火性を比知すべしと明す。但し知んぬ心垢盡くる處に戲論行せざるは即ちこれ第六の無畏依なり。更に如何が表示せんと欲はんや。

(三) 經に云はく「秘密主若し眞言門に菩薩行を修する諸菩薩は、深修して十縁生句を觀察し當に眞言行に於いて通達し作證すべし、(三)乃至實の如く遍く一切の心相を知る」とは、是れ略して前の問の中の修行の句を答ふるなり。下文の萬行方便の中の如きは此の十縁生句に藉つて心垢を淨除せざることなし。是の故に當に知るべし、最も旨要とす。眞言行者特に宜しく意を留めて之を思ふべし。然も此の品の中の十縁生句を統論するに

(一) 三種即空、  
即心、即不、  
の三、如、  
の所、初、  
第二、劫、  
第三、劫、  
を、三、  
を、三、  
を、三、

(二) 摩訶般若、  
般若經第一緣起品  
なり。

(三) 毘盧遮那所  
見、毘盧遮那、  
性、身、所、見、  
用、變、化、等、  
三、身、を、指、  
す。

(四) 中論、龍樹の  
中觀論因緣品。

略して(一)三種あり一には心蘊の中に没するを以て實法を對治せんと欲ふが故に此の十縁生句を觀す。前の所説の如く即空の幻これなり。二には心法の中に没するを以て境界の攀縁を對治せんと欲ふが故に此の十縁生句を觀す。前の所説の如く蘊の阿頼耶の即心の幻これなり。三には心心の實際の中に没するを以て有爲無爲界を離れんと欲ふが故に此の十縁生句を觀す。前の所説の如く一切の業煩惱を解脱すれども而も業煩惱の具依たり、即不思議の幻なり。(三)摩訶般若の中の十喻に亦具に三意を含めり。今此の中に深修して觀察すとは即ちこれ意は第三重を明すなり。且く行者瑜伽の中に於て自心を以て感とし、佛心を應として感應の因縁即時に(三)毗盧遮那所意見の身を現じ所宜聞の法を説き玉ふが如きは、然も我が心亦畢竟淨なり。佛心亦畢竟淨なり。若し我が心に望めては自とし、佛心に即しては他とす。今此の境界は自より生ずとやせん、他より生ずるか、共より生ずるか、無因より生ずるか。(四)中論に種々の門を以て之を觀するに生不可得なり。而も形聲宛然として即ちこれ法界なり。幻と論すれば即ち幻なり。法界と論すれば即ち法界なり、遍一切處と論すれば即ち遍一切處なり。幻と論するが故に不思議幻と名く。復次に深修とは謂はく淨心を得るより已去大悲根を生ずるより乃し方便究竟に至



(一) 四諦 若集滅  
 道の四聖諦なり  
 所觀の法多種あり  
 中今且く四諦を舉  
 ぐるなり  
 (二) 八十華嚴第十  
 二四諦品の意な  
 り、娑婆世界とは  
 (三) 一念淨心  
 地淨菩提心を指す  
 此の初地を擧げて  
 二地以上を擧ぐる  
 なり  
 (四) 三法 三法は  
 有空中三諦なり  
 此の三諦俱時にし  
 て定相なき義を以  
 て不思議幻と名く  
 る由を示す  
 (五) 釋論 智度論  
 第六卷を指す  
 (六) 已下十緣生句  
 を別釋す 初に列  
 名し次に幻を明  
 中略す 摩文を

るまで其の間の一々の緣起皆當に十喻を以て之を觀すべし。所證轉た深きに由るが故に深觀察と云ふ。且く(一)四諦の義の如きは(二)直に娑婆世界に已に無量無邊の差別の名ありと。又況んや無盡法界の中の逗機の方便何ぞ窮盡すべき。今行者(三)一念の淨心中に於て是の如く塵沙の四諦を通達す。空と云へば則ち畢竟不生なり。有といへば則ち其の性相を盡す。中と云へば則ち舉體皆常なり。(四)三法定相なきを以ての故に名けて不思議幻とす。四諦を云ふが如きは餘の一切法門も例すべし。是の故にたゞ如來のみ有して乃ち能く此の十喻を窮め其の源底に達し玉ふ。經に無垢の菩提心に次で即ち十喻を明す所以は、始終を包括し諸地を綜該するなり。既に緣に觸れて觀を成す、縷說すべからず。今且く(五)釋論に依つて其の大歸を明すべし。

(六) 經に云はく、「云何が十とする、謂く幻、陽炎、夢、影、乾闥婆城、響、水月、浮泡、虛空花、旋火輪の如し。(七)乃至云何が幻とする、謂はく咒術、藥力、能造、所造の種々の色像の如きは自の眼を惑はすが故に希有の事を見る、展轉相生し十方に往來すれども、然も彼れ去に非ず、不去に非ず、何を以ての故に本性淨の故に、是の如く眞言の幻も特誦成就して能く一切を生ず」とは佛藥力の不思議を説き玉へり、人の藥力を

(一) 釋論 大智度  
 論第六卷に徳女經  
 を引く、今その文  
 にあるなり。

以ての故に空に昇り形を隠し水を履み火を蹈むが如きは、此の事諸論師等の能く因量を建立して其の所由を出すに非ず。亦疑を生じて定んで或は爾るべし或は爾るべからずと謂ふべきに非ず、是の如くの籌度の境界を過ぎたり。唯し親り此の藥を行じて執持行用する者のみ乃し證知す。又藥術の因縁をもて能造所造の種々の色像を示現するが如きは衆緣の中に於いて一々に諦求するに都て生處なしと雖も、而も亦五情の所對に明了に現前す。展轉相生じて十方に往來すと雖も然も亦去に非ず。是の事は籌度思量の境に非ず。(二)釋論に云はく、佛徳女に問ひ給ふ、譬へば幻師の種々の事を幻作するが如きは汝が意に於いて云何。これ幻の所作内に有りや不や。答て言さく不なり。又問ふ、外にありや不や、内外にありや不や。先世より今世に至り、今世より後世に至るや不や、幻の所作は生者滅者ありや不や、實に一法としてこれ幻の所作なるありや不や。皆答て言さく不なり。佛の言はく汝頗る幻の所作の伎樂を見聞するや不や。答へて言さく我亦見亦聞く、佛の言く若し幻空ならば欺誑にして無實なるべし、云何が幻より能く伎樂を作さん。女の言さく大徳これ幻相は法爾なり。根本なしと雖も而も聞見しつべし。佛の言はく無明も亦是の如し、内有に非ず乃至生滅者なしと雖も而も無明の



(二) 四句 自、他、俱、無因の四不生なり。

(三) 已下第二陽炎を明す。

(三) 釋論 大智度論第六卷なり。

(四) 結使 迷妄に隨緣して生死の果を結集する故に結使と云ふ、煩惱なり。

因縁をもて諸行生ず、若し無明盡れば行も亦盡く。乃至廣く説く。今の眞言門の持誦者に喩ふることも亦復是の如し、下文に廣く説くが如し。三密の修行に依つて一切の奇得不思議の事を成ずることを得、一々の縁の中に諦求するに畢竟して「四句を離れたりと雖も、法爾なること斯の如し。淨心に異らずして而も自在神變宛然として謬らず。此の事は亦諸大論師等の聰辨利根の者の能く測量する所に非ず。獨り方便具足して悉地を成ずることを得る者のみ有つて自ら證知す。」經に復次に秘密主陽炎の性は空なり、彼れ世人の妄想に依つて成立して談議する所有り。是の如く眞言の相も唯是れ假名なり」と云ふは、(三) 釋論に云はく、日光に風塵を動ずるを以ての故に曠野の中に動ずること野馬の如し。無智の人初めて之を見て水と爲へり。衆生も亦爾り。(四) 結使の煩惱の日光に諸行の塵邪憶念の風に動ずるをもて生死の曠野の中に於て轉ず。智慧無き者謂うて一相をば男とし、一相をば女とす。復次に若し遠くして之を見て謂うて以て水とす。近けば則ち水相なし。是の如く聖法に遠き者は無我と及び諸法の空とを知らざれば陰界入の性空の法の中に於いて人想等を生ず。若し聖法に近けば則ち諸法の實相を知る。是の時に虛誑種々の妄想盡く除く。此の經の意の云はく世人遠く曠野に望むに遠くし

(一) 已下第三の夢事を明す。  
(二) 牟呼栗多 晝夜の三十分の一なり、これ三十一萬六千刹那なり。  
(三) 釋論 大智度論第六卷。

て之に望む者徒に此の炎を見て炎相にをいて強ひて假名を立つれども其の實事を求むるに都て不可得なるが如し。故に妄想成立して談ずる所ありと云ふ。眞言行者瑜伽の中に於いて種々の特殊の境界乃至諸佛海會無盡莊嚴を見るが如きは、爾の時に此の陽炎の觀をなし、唯これ假名なりと了知して慢著を離るべし。轉心地に近く時には即ち加持神變種々の因縁は但これ法界の焰なりと悟る。故に是の如くの眞言相は唯これ假名なりと云ふ。(二) 經に「復次に秘密主夢中の所見の晝日(三) 牟呼栗多刹那時等に住し、種々の異類にあつて諸の苦樂を受くるが如きは覺め已て都て所見なし是の如く夢の眞言行も應に知るべし亦爾り」と云ふは、(三) 釋論に云はく夢中に都て實事なけれども之れ實ありと謂うて覺め已つて無なりと知つて、而も還つて自ら笑ふが如く、人も亦是の如し、諸の結使の眠の中に實無なれども而も着せり道を得覺る時乃ち無なりと知つて覺めて亦復自ら笑ふ。又眠力を以ての故に無法に而も法を見無喜の事に而も喜び、無瞋の事に而も瞋り、無怖の事に而も怖るゝが如く衆生も亦爾り、無明の眠力の故に瞋喜憂怖すべからざるに、而も瞋喜憂怖等を生ず。故に今復この夢事の不思議の邊を明す。夢の中の如きは自ら住壽一日二日乃至無量歳にして種々の國土及び衆生族類あり。或は天宮に昇り或



は地獄にあつて諸の苦樂を受くと見る。覺むる時には但し一念の間なり。覺心に於て眠法の因縁の中に四句をもて之を求むるに了に不可得なり。而も夢事照然として憶持して謬らす。一念を以て千萬歳とし、一心をもて無量境とす。此の事は世間の智者の憶度籌量して能く其の源底を盡すに亦疑ふべき處に非ず。獨り夢みる者のみ親り證知す。今此の眞言行者の瑜伽の夢も亦復是の如し。或は須臾の間に備に無量加持の境界を見、或は座を起すして多劫を經、或は遍く諸佛の國土に遊び、親近し供養し衆生を利益す。此の事諸衆の因縁の中に觀察するに、都て所起なく一念の淨心を出でず。然も亦分利すること謬らす此の事誰がよく思議して其の所以を出さん。然も實に獨り證する者のみ自ら知る。行者是の如くの境界を得るとき、但し當に夢の喩を以て之を觀じて心に疑惟せず、亦著を生せざるべし。即ち普現色身の夢を以て無盡莊嚴をなす。故に深く十句を修すと云ふ。(二)經に「復次に秘密主影の喩を以て眞言の能く悉地を發くことを解了す。面の鏡に縁つて面像を現するが如く彼の眞言の悉地も當に知るべし是の如し」と云ふは、此の中に影と言ふは即ち是れ(三)釋論の鏡中の像の喩なり。彼の論に云はく、鏡中の像の如きは鏡の作にも非ず、面の作にもあらず、鏡を執る者の作にもあらず、自然作に

(二)已下第四に影を明す。

(三)釋論 大智度論第六卷。

も非ず、無因縁作にもあらず。何を以てか鏡の作に非ざる。若し面未だ鏡に到らざれば則ち像なきが故に、何を以てか面の作に非る、鏡なければ則ち像なきが故に、何を以てか鏡を執る者の作に非ざる、鏡なく、面なければ則ち像なきが故に、何を以てか自然作に非すとならば、若し未だ鏡あらず未だ面あざれば則ち像なし、像は鏡を待ち面を待ちて然して後に有なるが故に。亦無因に非すとならば若し因縁なくんば應に常有なるべく常無なるべし。若し鏡を除き面を除くとも亦應に自ら出づべし、是れを以ての故に因縁なきに非ず。當に知るべし、諸法も亦復是の如し、我れ不可得なるを以ての故に一切の因縁生の法は自在にあらざるが故に諸法は因縁に屬するが故に自作に非ず。若し自無なれば他も亦無なるが故に他作に非ず。若し他作なりと云はば則ち罪福力を失ふ。亦共作に非ず。二の過あるを以の故に亦無因に非ず、先世の業因と今世の善惡の行縁と是れに縁つて苦樂を得るが如く、一切の諸法必ず因縁あり、愚痴を以ての故に知らざるのみ。少兒の鏡中の像を見て心に樂みて愛着す、失し已つて鏡を破して求索するに智人これを笑ふが如く、樂を失して更に求むることも亦復是の如し。亦得道の聖人の爲めに笑はると。今此の眞言門の中には如來の三密の淨身を以て鏡とし、自身の三密



(一) 智論 大智度論第六卷。  
(二) 已下五乾闥婆城の喩を明す、乾闥婆城とは譯して尋香城云ふ。假現の嚴麗なる宮殿なり。  
(三) 釋論 大智度論第六卷。

を行をもて鏡中の像の因縁とし、悉地生することあるは猶ほ面像のごとし。若し行者悉地成就の時より乃し五神を起し、住壽長遠にして、面十方の國土を見、諸佛の刹に遊ぶに至るまで、皆この喩を以て是の事を觀察すべし。自より生ずるか、他より生ずるか若し他の三密の加持能くこの果を授くと云は、則ち衆生未だ修行せざる時も佛の大悲平等なり。何が故にか成就せしめざる。若し自の如説の行能く是の果を得と謂は、何を用ひてか三密淨鏡の身を觀察して加被を蒙るや、若し共より生ずと云はば則ち二の過あり。何を以ての故に若し我が心を因とし彼の衆縁を待つて方に成就することを得ると謂は、即ち此の因の中に先より悉地の果ありや、先より無しとやせん。若し先よりこれあらば衆縁則ち所用なし、若し先より之れなくんば衆縁復何の所用ぞ。然も此の悉地成就は亦復因縁なきに非ず、故に(一)智論の鏡像の偈に云はく、有に非ず又無に非ず亦復有無にあらず、此の語亦受けじ。是の如くなるを中道と名く。彼の少兒の妄りに取着を生ずるが如くなるべからず。如し是の如き觀をなすが故に行者の心所得なし、戲論を生ぜず。故に應に是の如く知るべしと云ふ。(二)經に「復次に秘密主乾闥婆城の譬を以て悉地宮を成就することを解了す」と云ふは、(三)釋論に云はく、日初めて出づ

(一) 聲聞經 小乘經典を指す。

(二) 密嚴佛國 無量の三密莊嚴なる佛國土を云ふ。大日如來の淨土なり。(三) 十方淨土 十方世界の佛國淨土を云ふ。故に淨嚴と云ふ。

る時城門樓檣宮殿あつて行人出入すと見ゆ。日轉高くなりぬれば轉滅す。此の城は但し眼に見る可きのみにして而も實有なし、人の初めより未だ曾て見ざる有つて、意に實と謂ひ樂うて疾く行き之に趣くに近きは逾失ひ、日高くなりぬれば遂に滅す。飢渴悶極して熱氣の野馬の如くなるを見て、之を謂うて水とし復往いて之に趣き、乃至之を求むるに疲極して所見なし。思惟して自ら悟んぬれば渴願の心息むがごとく行者も亦爾り。若し智慧を以て我もなく實法もなしと知る、是の時には顛倒の願息む。(一)聲聞經の中には此の乾闥婆城の喩なし。又城を以て身に喩へて此の衆縁は實有なり、但し城はこれ假名なりと説く。吾我を破せんが爲めの故に菩薩は利根にして深く諸法空の中に入るが故に乾闥婆城を以て喩とす。此の中に悉地宮と言ふは上中下あり。上は謂はく(二)密嚴佛國三界を出過して二乗の所得見聞に非ず。中は謂はく(三)十方の淨嚴、下は謂はく諸天修羅宮等なり。若し行者三品の持明仙と成らん時、是の如くの悉地宮の中に安住せば當に此の喩を以て觀察すべし。海氣日光の因縁をもて邑居嚴麗にして層臺人物燦然として觀つべきが如く、彼の愚夫の妄りに貪着を生じて其の實事を求むるには同すべからず。此の因縁を以て種々の勝妙の五塵の中に於いて淨心望得する所なし。



(二) 已下第六響の  
喩を明す。  
(三) 釋論 大智度  
論第六卷。

(三) 憂陀那 臍下  
一二寸の所を憂陀  
那と云ふ。丹田と  
譯す。こゝに内風  
あり。息風と云ふな  
り。

(四) 已下第七水月  
の喩を明す。

(二) 經に「復次に秘密主、響の喩を以て眞言の聲を解了すべし、聲に縁つて響あるが如く、彼の眞言者當に是の如く解すべし」と云ふは、(三) 釋論に云はく、若し深山峡谷の中、若は深絶の澗の中、若は空大の舍の中に語言の聲と相撃つを以ての故に、聲に従つて聲あることを名けと響とす。無智の人は謂うて實ありとす。智者は心念すらく是の聲は人の作すこと無し、(四) 但し聲轉するを以ての故に更に響聲有つて人の耳根を誑かす。人語らんと欲する時亦咽口の中に風あり憂陀那と名く、還つて入つて臍に至り響を出す時に頂及び斷齒唇舌咽胸の七處に觸れて而も退く、是を語言と名く。恐人は解せずして三毒を生じ、智者は了知して心に所着なし。但し諸法の實相に隨ふ。眞言行者若し瑜伽の中に於いて種種の八風の違順の音を聞き、或は諸の聖者無量の法音を以て現前に教授し、或は舌根淨に由るが故に能く一音を以て世界に遍滿す。此の諸の境界に遇ふ時亦當に響の喩を以て此れを觀察すべし。但し三密の衆縁に従つて而も有なり、是の事は生に非ず滅に非ず、有に有ず、無に非ず、是の故に中に於いて妄りに戲論を生ずべからずと。爾の時に自ら音聲慧の法門に入る。經に「復次に秘密主、月の出づるに因るが故に淨水を照して月の影像を現するが如く、是の如く眞言の水月の喩を以てかの持明

(二) 釋論 大智度  
論第六卷。

者當に是の如く説くべし」と云ふは、(三) 釋論に云はく月虚空の中に在つて行くに影水に現す、實法性の月輪如法性の實際虚空の中にあり。而も凡夫の心水には我々所の相のみ現することあり。又小兒水中の月を見て歡喜して取らんと欲す、大人これを見て即ち笑ふが如く、無智者も亦爾り、身見の故に吾我ありと見、實智なきが故に種種の法を見る。見已つて歡喜して諸相を取らんと欲す得道の聖人これを笑ふ。復次に譬へば靜水の中に月の影を見る、水を擾く時には則ち見えす。無明の心の靜水の中に吾我憍慢の諸の結使の影を見る。實智慧の杖をもて心水を擾くときには則ち見えす。是を以ての故に諸菩薩法は水中の月の如しと知ると説く。持明行者も亦是の如し。三密の方便によつて自心澄淨なるが故に諸佛の密嚴海會悉く中に於いて現じ、或は自ら如意珠の身を以て一切衆生の心水の中に於て現す。爾の時に(四) 誦に之を想觀すべし。今此の密嚴の相は我が淨心より生ずるか、佛の淨身より生ずるか、自他の實相すら尙ほ自ら畢竟して不生なり。何に況んや相違の因縁をもて而も所生あらんや。又一切の江河井池大小の諸器に月も亦來らず、水も亦去らざれども而も淨月能く一輪を以て普く衆水の中に入るが如く、我れ今亦復是の如し、衆生の心も亦來らず、自心も亦復去らざれ



ども而も見聞して益を蒙ること皆實にして虚しからざるが故に、當に慧杖を以て之を攪いて無實なりと知らしめ、彼の嬰童の方便を作して之れを取つて以て玩好の具とせんと欲ふが如くなることを得ざらしむべし。既に能く自ら其の意を静め、復當に如々不動にして人の爲めに之を演説す。故に持明者當に是の如く説くべしと曰ふ。

(二)經に「復次に秘密主天より雨を降らし泡を生ずるが如く、彼の眞言の悉地種々の變化も當に知るべし亦爾り」と云ふは、(三)聲聞經には受を以て浮泡に譬へ(四)般若の中にも泡を以て喩とす。實性なしと雖も而も因縁猶ほこれ實法なり。故に十句の中には如化のみあつて而も泡の喩を明さず。今此の經の譬は意また殊り、夏時の雨水の如きは雨水の中より、滯したかりの大小に隨うて種種の浮泡を生じ、形類各異り、然も水性は一味なれども自ら因縁となる。四句を以て推求するに別の所生の法なし。是の故に此の泡は舉體縁に従ふ。泡の起は即ちこれ水の起なり。泡の滅は即ちこれ水の滅なり。故に此れを以て即心の變化に喩ふるなり。行者即ち自心を以て佛と作して還つて心佛示語の方便を蒙り無量の法門に轉入するが如し。又心を以て漫荼羅を爲すに此の境心のために縁となつて能く種種不思議の變化を作す。是の故に行者浮泡の喩を以て之を觀じて自

(二)已下第八浮泡の喩を明す。  
(三)聲聞經 增一阿含經第二十卷の雜阿含經第十卷の經に五蘊の受を以て浮泡に喩ふる文あり。  
(四)般若 第二十二卷に受蘊を觀するに浮泡の如しとあり。

(一)釋論 大智度論第六卷。  
(二)十四變化 初禪に二、第二禪に三、第三禪に四、第四禪に五、合計十四の變化あり。此の變化心は能く八種の變化をなす。

(三)已下第九虚空を明す。大智度論第六卷。

心を離れざることを了知す。故に着を生せざるなり。(二)釋論に又云はく修定の者に(三)十四の變化あり天龍鬼神亦能く化を作す。化生は先より定まれる物なし、但し心生すれば便ち有なり、心滅すれば即ち滅するを以て是の法は初中後なし。生ずれどもこれ所從來なく滅すれども所至なきが如く、當に知るべし諸法も亦是の如し。復次に變化の相の如きは清淨なること虚空の染着する所なく罪福の爲めに汚されざるが如く、諸法も亦爾り。法性の如々實際は自然にして常に淨なること譬へば閻浮提に四大河あり、一々の河に五百の小河あり以て眷屬とせり、此の水種々に不淨なれども大海の中に入りぬれば皆悉く清淨なるが如し。泡の喩と意同なり。

(三)經に「復次に秘密主空中には衆生なく壽命なく彼の作者も不可得なり。心迷亂するを以ての故に而も是の如くの種々の妄見を生ずるが如し」と云ふは、(四)釋論に云はく如虚空とは謂く但し名のみあつて實法なし、虚空は可見の法に非ざれども遠く視るが故に眼光轉じて標色ヒョウシキを見る諸法も亦是の如し、空にして所有なければども人無漏の實智慧に遠きが故に實相を弃て、彼我、男女、屋舎、城郭等の種々の雜物を見る。心着すること小兒の仰いで青天を視て實色ありと謂ふが如し。人あつて飛び上ること極遠



なれば而も所見なし、又虚空の性は常に清淨なれども人陰<sup>しん</sup>を謂うて不淨とするが如く、諸法も亦是の如し、性常に清淨なれども嬌欲瞋恚等の障の故に人不淨なりと謂へり。此の經に心迷亂すと云ふは人疾病非人等の種々の因縁を以て其の心迷亂して妄りに淨虚空の中に種々の人物形相ありと見て或は怖畏すべく或は貪着すべきが如し。若し本心を得る時は則ち此の事生ずる時にも虚空を染せず、滅する時にも亦還つて淨なるに非ず。虚空を碍へず。亦空に異らずと知る。行者觀行を修する時若し種々の魔事種々の業煩惱の境あらば、皆當に心を此の喩に安じて淨虚空の如くすべし。無量劫の中に於いて地獄に處すと雖も、爾の時に意罣<sup>ごう</sup>なきこと神通を得る者空一顯色の中に於いて自在に飛行するが如くして人法妄想の爲めに塵汗せられず。經に「復次に秘密主譬へば火燼を若し人執持して手に在つて以て空中に旋轉するに輪の像生すること有るが如し」と云ふは、人の火燼を持ちて空中に旋轉して種々の相を作すこと、或は方、或は圓、三角、半月、大小、長短意の所爲に隨ふ。愚少は之を觀て實事と以爲て念着を生ず。然も實には都て法生することなし、但し手中の速疾力能く一火を運んで無量の相を成すが如し。眞言行者若し瑜伽の中に於いて心の所運に隨うて成就せざることを無し

(二) 已下第十旋火輪を明す。

(二) 釋論 大智度論第六卷。

乃至一の阿字門に於いて旋轉無礙にして無量の法門を成す。爾の時に當に斯の觀を造すべし。但し淨菩提心の一體速疾力の功用の然らしむるに由つて、中に於いて種々の見計を作し勝妙なりと爲うて而も戲論を生ずべからず、釋論には火輪の喩なし、別に影の喩あつて云はく、影の見るべけれども而も捉ふ可からざるが如く、諸法も亦是の如し。眼情等見聞覺知すれども實には不可得なり。又影の光を映するときには則ち現じ、映せざれば則ち無きが如く、諸の結使の煩惱正見の光を遮ぎるときには、則ち我相法相あり。又影の人去れば則ち去り、人動けば則ち動き、人住まれば則ち住まるが如く、善惡の業の影も亦是の如し。後世に去る時には亦去り、今世に住する時には亦住す。報斷せざるが故に罪福熟する時に則ち出づ、然も此の影は物に有るに非ず、但し是れ誑眼の法なり。火燼<sup>くわん</sup>を旋<sup>めぐ</sup>らして疾く轉すれば輪となれども亦實有に非ざるが如しと、喩の意大に同じ。「秘密主應に是の如く大乘の句、心の句、無等々の句、必定の句、正等覺の句、漸次大乘生の句を了知すべし」とは、梵音には句を謂うて鉢曇<sup>ぼつとん</sup>とす。義前に釋するが如し。此の十喩は皆是れ摩訶衍の人の甚深の緣起なり。聲聞緣覺の安足の處に非ず。故に大乘句と名く。心の實性には更に一法として以て之を顯示すべき者な



し。亦人に授くべからず但し是の如く。深く觀察する時障蓋の雲披れて自ら當に證知すべし。故に心の句と名く。如來の智慧は一切の法の中に於いて譬類すべきものなく亦過上なし。故に無等と名く。而も心の實相は之れと函蓋相稱して間として異際なし。故に無等々と云ふ。若し十緣生を以て心處を了知するときには則ち其の中に安住す。故に無等々の句と曰ふ。諸佛この十緣生の義を以て必定師子吼して如來性の心の實相印を説い玉ふ。若し能く信解する者あらは、假使十方世界の一切の諸魔皆化身作佛して相似の般若を説くとも亦其の心を變易して法相をして是の如くならざらしむること能はじ。故に必定の句と曰ふ。此の中道正觀を以て有爲無爲界を離れ極無自性心生ずるは即ち是れ心佛の顯現なり。故に正等覺の句と曰ふ。深修觀察を以ての故に大海に入るに漸次に轉深なるが如く乃至毗盧遮那上々智觀を以て方に能く其の源底を盡し玉ふ。故に漸次大乘生の句と曰ふ。當に知るべし是の如くの六句は次第相釋し次第相生するなり。毗盧遮那即ち此の十緣生句の不思議法界を以て無盡莊嚴藏を作し玉ふ。十世界微塵數の諸の法界門より常に根、力、覺道、禪定、解脱の諸寶を出生して遍く衆生に施し玉ふに猶尙し賈しからず、故に法財を具足すと曰ふ。一切如來の智業此れによ

（二）阿闍梨 善無畏三藏なり。

（三）漫荼羅 此方に道場と云ふ、弟子のために發心し道を得しむる處なり。  
（四）具緣 此の漫荼羅に入るには地を擇び、壇を築き、結界する等の多きを具するを要す。  
（五）具衆緣支分 具衆緣多なるが故に具衆緣と云ふ、支分とは部分材料と云ふが如し、地を擇ぶ等は具緣の時なり。

つて具足す。故に種々の工巧大智慧を出生すと曰ふ。若し一念の心中に於て明かに十緣生の義を見るときには則ち上無盡法界を窮め下無盡の衆生界を極めて其の中の一切心相皆能く了々に覺知す。皆緣より起るを以て即空即假即中なるが故に、故に實の如く遍く一切心相を知ると曰ふ。（二）阿闍梨の言はく行者初て觀行を修して境界現前する時、内因外緣の力に由るが故に自然に緣起智生することあり、常途の習定の功力、苦に至つて而して後に通徹するには同せず。梵本の中に此れより以後は次に眞言者の持誦の次第如法の悉地、如法の果生することを説くと、此れはこれ傳法者の所記なり、故に經の中に於て具に其の大意の言を出さず。已に淨菩提心の諸の心相を説き竟んぬ。此れより以下は修進の方便及び悉地の果生することを明す。

（住心品了る）

入漫荼羅具緣眞言品第二

入漫荼羅具緣眞言品第二とは、上の品に已に種種の心相に約して、一切智心を對辨すること竟りぬ。然れども此の妙果には、いかなる方便を以て、能く至ることを得るや。故に此の品には次いで漫荼羅の行法を明す。具衆緣支分と、及び所要の眞言と、皆







竟寂滅にして、言を以て宣ぶ可からずと雖も、而も能く種種の方便道を以て、衆生類のために、本性の信解の如くに法を演説したまふ。即ち是れ一切智心の無盡莊嚴の迹を領解するなり。不思議法界をば即ち蓮華臺に喩へ、種種の方便道をば即ち蓮華葉に喩ふ。此の領解の中の文は簡略なりと雖も、而も宗通の妙旨を提擧するに、固からざる所なし。

次に即ち佛に請ふ。「唯だ願はくは世尊、次に眞言の行を修して、ダイヒタイゾウ大悲胎藏より大漫茶羅王を生ずることを説きたまへ」と。今且く胎藏に約して喩をなさば、行者初めて一切智心を發すは、父母和合の因縁を以て、識の種子初めて胎中に託するが如し。爾の時に漸次に増長して、行業の巧風の爲に匠成せられ、乃至始めて誕育する時、諸根百體皆悉く備足して、始めて父母の種姓の中に於て生ずるは、猶ほ眞言門に依りて、大悲萬行を學びて、淨心顯現するが如し。又此の嬰童、漸く人の法を具し、諸の伎藝を習ふ、伎藝已に通じて事業を施行するは、淨心の中に於て方便を發起し、（一）自他を修治し、縁に隨ひて物を利し、衆生を濟度するが如し。故に大悲胎藏生と名くるなり。復次に初めて淨菩提心門に入りて、法明道を見るは、識の種子の（二）歌羅羅の時の如し。

（一）自地 自の心地なり。  
（二）歌羅羅 梵語なり。凝滞と譯す。初胎の時漸く血塊とれるなるを云ふ。

（一）無功用以上なり、第八地までは殊更に力を用ふるが故に有功用と云ひ、第八地以上は力を用ふるを要せざるが故に無功用と云ふ。

（一）世間の種子 第二住心に六りある中の最初なり。  
（二）出世間の心 人空無漏の妙果、未だ五蘊の法執を出でざるを云ふ。  
（三）毗盧遮那等 漫茶羅の中尊大日如來は蓮華臺の如く、四佛四菩薩は蓮華臺の如く、重の内眷屬は蓮華臺の如く、莊嚴の如く、第二重の鬚髮の如く、すむ故に大悲を施すに、故に三乘六道の如く、教化する第三重の應身に根莖等の如くなり。

前の七地より以來、大悲萬行の爲に含養せらるゝは、胎藏に在るが如し。（一）無功用以去、漸く如來の方便を學ぶは、嬰童の已に生れて、諸の伎藝を習ふが如し。如來の一切智地に至るは、伎藝已に成りて、從政を施すが如し。故に大悲胎藏生と名く。又是れ一重の秘密漫茶羅なり。

今蓮華を以て此の漫茶羅の義に喩ふれば、蓮種の堅殻の中に在りて、枝條華葉の性、已に宛然として具足せるが如きは、猶ほ（一）世間の種子心のごとし。此れより漸次に増長して、乃至初めて花苞を生ずる時、蓮臺の果實、葉藏の内に隠れたるは、（二）出世間の心尙ほ蘊の中に在るが如し。又此の葉藏に包まらるるに由りて、風寒衆縁の爲に傷壞せられず、淨色の鬚髮、日夜に滋榮するは、猶ほ大悲胎藏の如し。既に成就し已りて、日光の中に於て、顯照し開敷するは、方便満足するが如し。

今此の中の妙法蓮華漫茶羅の義をいはば、（三）毗盧遮那は本地の常心なり、即ち是れ華臺の具體なり。四佛四菩薩は醍醐の果徳にして、衆實の俱に成れるが如し。十世界微塵數の金剛密慧の差別智印は、猶ほ鬚髮の如し。十世界微塵數の大悲萬行の波羅蜜門は、猶ほ華藏の如し。三乘六道無量の應身は、猶ほ根莖條葉發障して相間はれるが



(一) 自本無迹 本地法身より第二三重を顯現する次第を示す漫茶羅。  
 (二) 行因至果 行者修行して、漸次に深高なる佛智に證入する次第を示す漫茶羅。

如し。是の如くの衆徳、輪圓周備せるを以ての故に、漫茶羅と名くるなり。然も如來の加持を以ての故に、佛菩提自證の徳より、八葉中胎藏の身を現し、金剛密印より、第一重の金剛手等の諸の内眷屬を現し、大悲萬行より、第二重の摩訶薩埵の諸の大眷屬を現し、普門方便より、第三重の一切衆生喜見隨類の身を現す。若し輪王の灌頂を以て之に方ふれば、第三重は萬國の君長の如く、第二重は朝廷の百揆の如く、第一重は宗枝の内弼の如く、中胎は垂拱の君の如し。故に華臺の常智を大漫茶羅王と爲す。若し、(一) 自本垂迹ならば、則ち中胎の一一の門より、各第一重の種種の門を流出し、第一重の一一の門より、各第二重の種種の門を流出し、第二重の一一の門より、各第三重の種種の門を流出す。若し(二) 行因至果ならば、則ち第三重に引攝成就せられて、能く第二重に通じ、第二重に引攝成就せられて、能く第一重に通じ、第一重に引攝成就せられて、能く中胎藏を見る。

此れに由りて之を言はば、諸の衆生類の本性信解、また無量無邊なりと雖も、而も此の漫茶羅の法門所爲の義利、亦復罄く盡さざることなし。故に「爲満足彼諸未來世無量衆生、爲救護安樂故」と云ふなり。

(一) 娜耶 Naya  
 (二) 一念の善根  
 (三) 第二住心最初の持齋の善心なり。

(四) 折利耶 Car-ya

經に云はく「爾の時に薄伽梵毗盧遮那、大衆會の中に於て、遍く觀察し已りて、執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け金剛手、今漫茶羅の行を修行して、一切智智を満足する法門を説かん」とは、此の中の大會といふは、即ち是れ法界漫茶羅所攝の應度の衆生なり。今佛、深密の行を説かんと欲して、道機を差へざらしめんが爲の故に、慧眼を以て觀察したまふ。即ち此の慧眼に加持せらるるが故に、先世の善萌、開發せざることなし。猶ほ良田の已に善種を布くときは、則ち時雨の施を受くるに堪へたる如し。此の修行を梵音には(一) 娜耶といふ、即ち是れ乘の義、道の義なり。謂はく、(二) 一念の善根より、乃し成佛に至るまで、是の中間の一一の諸地に於て、所乗の法と所行の道とを通じて娜耶と名く。漫茶羅の中の諸の善知識は、乘を造り、道を治め、及び將導者の如し。衆生、乗じて之を行ふを、漫茶羅の行を修すと名く。此の行を梵音には(三) 折利耶といふ、且く下の文に云ふが如し、先づ弟子の爲に平地を擇治す。若し外事を論ずれば、自ら常の釋の如し。若し我側の凡夫の爲に、一念の守齋の種子心を選択び得て、治めて平正ならしむるを、亦治地と名く。乃至一生補處の菩薩の爲に、心中の無明の父母極細の垢を擇び去るを、亦治地と名く。此れに由りて之を言はば、經



文の一一の言の下の治地の義に、凡そ幾重かある。例せば十縁生句の皆漸次轉深にして、窮盡す可からざるが如し。執金剛、是の如く勸請を作し、佛また此の印を以て之を印して、而して後に衍説したまふ。故に「満足一切智智法門」と云ふ。若し此の地満足せずば、普く一切衆生の爲に救護安樂を作すこと能はじ。

經に云はく、「爾の時に毘盧遮那世尊、本昔無盡の法界を成就し、無餘の衆生界を度脱せんと誓願したまひしが故に、一切如來同じく共に集會して、漸次に大悲藏發生三摩地に證入したまふ」とは、如來もと菩薩の道を行ひし時、是の如くの誓願を立てしを以てなり。我れ當に一切諸佛の法界を成就し、悉く皆無餘の衆生界を度脱すべしと。今や所願已に滿つれども、而も應度の衆生盡きず。衆生無盡なるを以て、即ち是の法界も亦無盡なり。界に三種あり。謂はゆる(一)法界と(二)心界と(三)衆生界となり。法界を離れて別の衆生界なし、衆生界即ち是れ法界なり。心界を離れて別の法界なし、法界即ち是れ心界なり。當に知るべし、此の三種は無二無別なりと。法界の義を轉釋せんと欲するが爲の故に、次に無餘衆生界と言ふ。衆生界未だ一切解脱を得ざるを以て、即ち是の法界未だ遍滿して成就することを得ず。故に如來は事業を勤修して、休息あること

(一)法界 先成就の覺者なり。  
(二)心界 修行者なり。  
(三)衆生界 十方三世の六趣の有情非情なり。

なし。即ち此の本願の因縁を以ての故に、一切如來同じく共に集會したまふ。僧中に大事の因縁、若しは結界説戒の類あるときは、則ち衆僧集會して同共に印持す。一戒一見なるを以ての故に、別衆すべからざるが如し。今將に満足一切智智の法門を説かんとしたまふに、亦是れ諸佛の大事因縁なり。同一本誓、同一法界なるを以ての故に、皆悉く集會して、共に神力を以て加持したまふ。

漸次證入とは(一)初の無畏の時の如きは、聲字の觀を以て漫茶羅の行を修し、第二の無畏は有相觀の中に於て漫茶羅の行を修し、第三の無畏は唯蘊無我心の中に於て漫茶羅の行を修し、第四の無畏は法緣心の中に於て漫茶羅の行を修し、第五の無畏は無緣心の中に於て漫茶羅の行を修し、第六の無畏は平等心の中に於て漫茶羅の行を修す。離垢地以去は各々自地の觀心の中に於て漫茶羅の行を修す。略して行位を以て之を分つに、已に十六重の深淺の不同を作す。此の一一の位に自ら菩提の種子心あり、大悲胎藏増長の因縁あり、慧方便の業受用の果あり。前に説く所の如く一一の門より各々種種の門を流出する等なり。其の中に因より果に向ふときは、則ち三密の方便展轉して同しからず、究極は心王の大海に至りて、方に一味にして別なきのみ。今此の十方

(一)初の無畏等六無畏のことは當卷の初めに委し。







の心を開出して、名字を作して流通するのみ。又今普く隨類の身を現すを、而も悉現如來身と言ふは、本迹俱に不思議にして加持不二なることを明す。豈に獨一法界をして種種の形を作さしめんと欲せんや。行者是の如く解する時、毗盧遮那と鬼畜等の尊とを觀るに、其の心平等にして勝劣の想なし。輒ち一門より入れども皆心王を見る、  
\*是の故に、佛事を作し已る。

七經に「遍く十方に至りて、還り來りて佛身の本位に入り、本位の中に住してまた還りて入る」と云ふは、意は一切の方便、畢竟して同歸することを明すなり。

經に云はく、「時に薄伽梵また執金剛秘密主に告げて言はく、諦かに聽け金剛手、漫荼羅の位の初めの阿闍梨」とは、此れより已後、灌頂の教誡竟りて、金剛手幾所の福德聚を得るかと問ひて、而も佛に白して言さく、今より以後、我れまさには是の善男子善女人を供養すべし、何を以ての故にとならば、彼の善男子善女人は佛世尊を見奉るに、同じきが故にと云ふに迄るまでは、此れは入漫荼羅の衆多の支分を明す。又大力の明妃より第二品の未に迄るまでは、壇による行事に要する所の眞言を明す。衆多の支分の中に就きて、最初には阿闍梨の支分を明す、然る所以は、佛、此の經はかな

(一) 阿闍梨 梵語  
阿闍梨 梵語  
師と譯す、弟子の  
ために軌範となる  
可き師なり。

らず師に従ひて受けよ、輒く修行することを得ずと説きたまへり。若し明師なければ所傳寄ることなきが故なり。然も二種の義を解するを以ての故に、阿闍梨の名を得、謂はゆる淺略深奥の分なり。若し前の人を觀るに未だ深解あらざる機ならば、則ち常途に順ひて文に隨ひて釋をなせ。若し已に利根智慧を成就せば、則ちまさに深密を演暢して之を教授すべし。今また此の二分を以て阿闍梨の義を釋せば、若し此の漫荼羅の種々の支分と、乃至一切諸尊の眞言・手印・觀行・悉地とに於いて、皆悉く通達して傳教灌頂を得たる、是れを阿闍梨と名く。若し違順の八心を度し、寂然界を證する、是れを阿闍梨と名く。若し已に心王自在にして、自心の本不生を覺るを阿闍梨と名く。若し極無自性心を生じて、如上の漫荼羅海會に入ることを得るを阿闍梨と名く。此れより復十重の深行あり、乃至三密を解する人の中に於いて、最も上首たる金剛薩埵の如きをば阿闍梨と名く。また次に毗盧遮那を阿闍梨と名く。是の故に最初の阿闍梨の事業を作す時には、即ち自身は即ち金剛薩埵毗盧遮那に同じと觀照すべし。身語密印を以て加持を作すを、乃ち善住師位と名く、爾らざれば能く成す所なし。自餘の深行者は即ち意を以て得可し。







へたり。秘密の中に就きて、又漸次轉深にして、乃至佛十地のために般若を説きたまふときは、九地はその境界に非ず。ただ大毗盧遮那をのみ究竟阿闍梨と名くることを得。

(二) 通達三乘。阿闍梨の第五徳。

(二) 通達三乗とは謂はく、大小乗の三藏教の中に於て、其の文義に善きなり。能く難じ能く答へて三學を匠成し、弟子の惡邪を拔除す可きに堪へたる者、乃ち阿闍梨と作るべし。若し爾らずば、或は他の論議師の輩のために摧屈せられて、傳法に於て力なくして、他の不信を生せん。又此の經宗は横に一切佛教を統ぶ。唯蘊無我出世間心住於蘊中と説くが如きは、即ち諸部の中の小乗の三藏を攝す。觀蘊阿頼耶覺自心本不生と説くが如きは、即ち諸經の八識三無性の義を攝す。極無自性心十緣生句と説くが如きは、即ち華嚴と般若との種種の不思議の境界を攝して皆其の中に入る。如實知自心名一切種智と説くが如きは、則ち(三)佛性一乘と如來秘藏と皆其の中に入る。種種の聖言に於て、其の精要を統べざることをなし。若し能く是の心師を持てば廣く、一切の法門を開く、是れを通達三乗と名く。また次に眞言門に三密の印に乗じて、佛の三平等の地に至るを、名けて通達三乗とす。淺深の重數は前に説くが如し。

(三) 佛性一乘如來秘藏、法華經涅槃經の法門。

(一) 善解眞言實義、阿闍梨の第六徳。

(二) 持明藏、眞言教の總名なり。

(三) 質多 *citā*  
(四) 質多 *ci*  
(五) 遮 *ca*  
(六) 三昧の聲、梵語の母音即ちア、アー、イ、イー、ウ、ウー等を三昧聲と云ふ。

(一) 善解眞言實義とは、眞言門に種種の眞言・種種の身印・種種の本尊・乃至具緣供物・一一の支分・聲字・形色諸相不同なることあるが如きは、事に隨ひて分別して其の性類を知り、是の如くの法は寂災の處に用ひ、是の如くの法は増益の處に用ひ、是の如くの法は降伏の處に用ふと知る。(二) 持明藏の蘇悉地等に廣く分別して説くが如し。此れは是れ眞言の實義に通達するなり。然る所以は、一一の眞言は皆如來妙極の語なり。眞言の中に(三)質多の字あるが如きは、淺釋にはただ名けて心とす。若し深秘の釋を作さば(四)質は謂はく遮字に(五)三昧の聲を帶ぶ、遮は是れ無遷變の義、無遷變は即ち是れ佛性なり、佛性をば亦は般若波羅蜜とも名け、亦は首楞嚴三昧とも名く、是の故に定慧具足す。多字は是れ一切法如如解脫不可得の義なり。若し是の如く心を説くをば、乃ち妙極の語と名くるなり。また次の身印の如きは、左の手は是れ三昧の義、右の手は是れ般若の義、十指は是れ十波羅蜜滿足の義、亦た是れ一切智の五輪を以て譬喩する義なり。本尊の形の如きは女は是れ禪定、男は是れ智慧なり、黄色は是れ金剛身、白は是れ大悲、赤は是れ大慧、青は是れ大空、黒は是れ大力なり。乃至一切の縁の中に第一實際の義あり、豈に文の如く解を生ず可けんや。若し是の如



くの實義に通達せば、乃ち阿闍梨と作るべし。亦三劫十地に約して以て深行を明す。

(二) 知衆生心とは、阿闍梨善く三部の上中下の用と、種種の性類差別とを知り、及び瑜伽に住するを以ての故に、加持の方便を以て能く衆生の心行を了知するなり。もし來りて法を求むる者あらば、師まさに言ふべし、汝且く所安に隨へ、我れ當に思惟すべしと。即時に彼れの名字を持ちて靜室に入りて、法の如く持誦して彼れの因縁を觀するに、本尊の加被を以ての故にまさに相貌を見るべし。若し是れ外道の來りて法を盜まんと欲し、或は其の便を伺求して來りて詐り親むならば、その時に本尊或は外道等の形を現さん。審かに像類を觀て自然に識る可し。方便して遣るべし。論して言へ、善男子よ、法を求むる者は先づ一切の惡見巧僞の心を除斷すべし、又諸の菩薩は衆生を度せんが爲の故に、種種の難行苦行を作す、汝今豈に能く此の難行の事を爲さんや、且く本縁に隨ひて利益を作せと。若し境界の中に、本尊漫荼羅に在して、將に弟子を引きて其れがために灌頂せんとし、或は持ちて以て之を付すと見ん、是の如く等の種種の善相あらば、則ちまさに攝受すべし。復次に本尊、本の色像を捨てて赤色と作らば、

是の人の性は瞋恚なく黒色ならば癡多く、黄色ならば貪多く、白色ならば善多く、縹色ひなだならば無記多し。及び漫荼羅の中に於て、花の至る處の上中下の類、種種の微相を觀察して、亦彼の心機こころがまの是器・非器を知る可きなり。然れども是の如くの相の中に於て取着すべからず、亦十緣生句を以て之を觀察せよ、是の如くの事に於て一一に明了なれば、師位に堪任せり。復次に深秘の釋ならば、知衆生心とは即ち是れ實の如く自心を知るなり。能く自心を知るを以ての故に、即ち能く明かに他心を識る、家に寶藏あれば即ち能く他の寶を鑿うみるが如し。乃至諸根性欲本末の因縁、心の動作戲論する所、了了に通達せざることなし、是れを深行の阿闍梨と名くるなり。

(三) 信諸佛菩薩とは、一、阿闍梨の言はく、一切の善法は信を以て首とす、當に最初に之を説くべし、今梵文の語便に順ひ、兼ては後位に通ずるを以ての故に不次の説を作すのみと。二、謂はく此の宗は初めて法門に入る時、意尤も淺近にして識り難し。且く三乗の實相は文字を離れざることなし、而も眞言者は要かならず須すべらく口に梵文を誦じ、心に亦之を觀すべし。或は身の支節を屈申すること猶ほ戲弄の如くし、或は三昧を修するとき、乃ち女人の像或は忿怒等の形を觀じ、或は水を以て灌頂し、或は火壇を造作



す。若し心識を以て等量せんと欲せば、則ち加持の迹も又見る可からず。深信ジンシンを具ふる者に非ずば、いづくんぞ疑惑せざることを得んや。又此の行者、此の衆縁の事相に於て、皆諦信を以て之を行ふべし。若し勤苦すること多時にして未だ現益を蒙らずば、その時に即ち自ら思惟せよ、我が功行未だ至らざるに由り、或は三毒垢の染惑障重きに由るが故なりと。衣を洗わかひ火を鑽くわるが如くして、ただ中途に休廢すること勿れ、自らまさに純淨にしてまのあたり光明を觀るべし。またまさに幻の喩を思惟すべし、藥物を和合して空に昇り住壽することを得るが如きは、亦利根智慧の能く思議する所に非ず、ただ妙に其の術を解せしむれば成らざる者なしと。此の深心の淨信を以て疑惑を離るる故に、漸く法驗現前することを得。また法驗現前するに由るが故に、信解うたた増して沮壞す可からず。若し是の如くならざらん者は、即ち手なき人の大寶藏の中に至ると雖も、空しく得る所なきに同じからん、況や阿闍梨の位に在らんや。復次に衆生の一念の心中に、如來壽量長遠の身、寂光の海會あり、乃至不退の諸菩薩も亦復知ること能はず。當に知るべし、此の法は倍々タビタビまた信じ難きことを、故に(三)法華の中(二)には補處ほしよ三たび請ひ、如來四たび誡めて然る後演説したまへり。今此の經には具さに

(二)如來壽量等、法華經分別功德品に依りて、主の如來に伴の海會も、みな衆生の一念心中にあるを云ふ。  
(三)法華等、法華經壽量品の説。

修入の方便あり、乃至一生にも成す可し。若し能く諦受して疑はざれば信地に至り、或は信解を度するを、乃ち深行の阿闍梨と名くるなり。

(一)得傳教灌頂善解漫茶羅書は、灌頂に二種あり、謂はく、弟子の法の中に於て灌頂を得已りて、漸次に進修し、と乃至阿闍梨の衆徳を成就す。その時に阿闍梨の歡喜を得て、更に爲に漫茶羅を造りて傳教灌頂デンキョウカンテイを作し、法の如く慰諭して言はく、佛子汝已に秘密藏の中に於て、隨順し修學すること具足明了にして、能く他を教授するに堪へたり。汝今已に善利を得、乃至諸の賢聖衆も亦皆稱歎したまふ。今已に灌頂を作し竟りぬ、汝まさに眞淨の心を以て傳持し流布して、如來の秘藏をば久しく滅びざらしむべしと。是の如く其の所應に隨ひて、種種に慰諭し已りなば、即ち人のために漫茶羅の阿闍梨と作るべし。復次に行者、瑜伽の中に於て阿闍梨の衆徳成就せば、その時に深行の阿闍梨ために心漫茶羅を作れ。その時に弟子了了に、大毗盧遮那、大悲の水を以て心灌頂を作すことを蒙ることを明かに見る。是の事は下に當に更に説くべし。乃至地波羅蜜ヂハラムイ満足する時に、十方の諸佛現前し、灌頂して佛の職位シヤクイを授くるを、みな傳教灌頂を得と名く。已に傳教灌頂を得ては、最後斷種サイゴダンシュの人と作るべからず。先師の

(二)得傳教灌頂等、阿闍梨の第九徳。  
■ 亂脫



事業を紹きて、諸の弟子を度すべし。即ち此れ最初の方便なるを以て、須らく漫荼羅の圖像を解すべし、故に次に之を明す。謂はく、此の中の一一の方位相貌、衆色を調布し、續畫莊嚴すること、皆自ら其の事を善くして他の面を看ざるべし、乃ち阿闍梨と作るに堪へたり。復次に能く淨菩提心に於て、慧方便を以て、無盡莊嚴大漫荼羅王を畫作するを、乃ち深行阿闍梨と名く。

(二) 其性調柔等  
阿闍梨の第十總。

(二) 其性調柔離於我執とは、此の我執を梵本には灌頂の字に作る。阿闍梨相傳して云はく、此の字義は相應せず、まさに離於我執と云ふべしと。其性調柔とは、即ち是れ傳教の威儀に安住し、忍辱地に住して、柔和善順にして卒暴ならず、種族・色相・多聞・智慧・群に出で衆に絶れざるることなしと雖も、亦高慢の心を生せず、能く慈心を以て下濟して、新學を誘誨す。乃至卑小の姓等にも、亦下劣の想・嫉妬の心を懷かず、ただ一心に法を以て自調し、法に依りて住す。是の如く調柔なれば即ち是れ我執を離る、是れは轉相釋なり。また次に調柔とは、百練の純蠟の調柔なるを以ての故に、工巧の手に隨ひて爲さざる所なきが如く、今行者此の心を淨治して、一切の龜曠盡くるが故に、巧慧の手に隨ひて爲さざる所なし、故に能く忍辱地に住して、縁に隨ひ物に應ず。

又諸佛菩薩の法門の中より道に入るは、猶は上族の如く、諸天龍鬼の法門の中より道に入るは、猶は下族の如し。即ち此の身を以て大日如來尊特相海と作るは、猶は色貌第一なるが如く、作ること能はざる者を望むれば、垢衣の最漏なるが如し。一心の中に於て悉く諸佛の説法を聞きて、分別して謬らざるを名けて多聞とし、六根暗塞の者を望むれば名けて少聞とす。無量の智慧自然に開敷するを名けて智慧とし、無明三毒を名けて愚癡とす。是の如くの諸法は畢竟等しきを以ての故に、心に高下あるべからず、故に調柔と名く。ただ佛一人をのみ、乃ち一切調柔にして、善く阿闍梨の法に住すと名く。

(二) 於真言行善得決定とは、謂はく、漫荼羅を造立する種種の方便の中に於て、心に決定することを得て、諸の礙網を離る。謂はゆる是の如く護身し是の如く結界し、是の如く迎請し、是の如く諸の供具を淨めて以て奉獻し、是の如くの眞言・手印を以て加持し、乃至持誦し進修し、及び悉地を成就する時に亦無量の次第法あり。是の如きは備に下の文及び供養次第の中に在り、縷しく説くこと能はず。若し事を行はん時、及び他と違妨を決擇せんに、方にまた躊躇し觀察し、或は本を取りて尋ね檢ふるをば、

(二) 於真言行等  
阿闍梨の第十一總。



善作の阿闍梨と名けず。また次に阿闍梨、瑜伽に於て決定することを得るを以ての故に、所作あるに隨ひて皆三昧と相應す。花を獻する時の如きは即ち花三昧と相應し、此の中に本尊明了に現前したまふ。若し香・燈・塗香・闍伽水・等を奉る時も、香三昧乃至香水三昧と相應し、一一の本尊亦事に隨ひて現前したまふ。是の如くの一一の縁の中に、皆是れ法門に入りて皆善智識を見る。旋轉運用すること皆理と相應し、また事に臨みて稽留して方に始めて觀を作すにあらざるは、當に知るべし、是の人は秘密の阿闍梨と作るに堪へたりと。

(二) 究修瑜伽 阿闍梨の第十二徳。

(一) 究習瑜伽とは謂はく、善く相應の法を修するなり。謂はく三部の眞言の上中下の成就等の事に於て、一一に通達してみな正理と相應するを、善修瑜伽と名く。又息災の法の中に於て、即ち能く此の方便を以て増益し降伏す、或は増益の法の中に、即ち能く此の方便を以て降伏し息災す。降伏の法中に於て、即ち能く此の方便を以て息災し増益す。彼彼の相應の法に隨ひて、皆よく之を分別するを善修瑜伽と名く。又漫荼羅の中の種種の本尊の三昧・形・色・字・印・性類・威儀・及び供養成就の時の運心觀察の方便に於て、皆已に相應して修習す、此の中障礙及び悉地の相も亦よく覺知して乃ち法を

傳ふ可し。復次に大悲胎藏發生三昧の中に、種種の法界門種種の善知識あり、善財童子の次第に詢求せしが如し。或は是の如くの法門に於て、已に善く修行すれども、而も餘門に於ては未だ究習すること能はず、若し普門世界に入る時は、則ち能く一念の中に於て具足し相應する、是れ深行の阿闍梨と名く。

(二) 住勇健菩提心 阿闍梨の第十三徳。

(三) 毗那野迦象鼻の障礙神なり。

(一) 住勇健菩提心とは、勇健は是れ雄猛にして怯弱なきの義なり。此の心を須る所以は、眞言行者未だ眞諦を見ざる以來は、當に違順の境界あるべきを以て、或は種種の畏る可き形色を現し、或は異聲を作し乃至大地を震動し、或は大力の(三) 毗那野迦現れて留難を作すことあり。その時に安心動かす、退屈あることなく、法教に依りて之を淨除すべし。行者此の淨菩提心に大義利ありと見るによるが故に、自然に生を出でて死に入れども怖畏の想なし、彼彼の魔事留礙すること能はざるなり。又未だ菩提心を見ざる時には、瑜伽の中に於てまさに種種の相見ることあるべし、謂はゆる、地・水・火・風・虚空・青・黄・赤・白・黒色・等の諸の異相の貌なり。その時に心未だ明了ならざるが故に、甄辨すること能はざれども、亦退轉の意を生ずべからず。ただ是の念を作すべし、此の事因縁なきに非ず、若し我れ見諦の時には、菩提心に於て明了に無礙にして、自らま



さに解すべしと。又まさに十緣生句を以て之を觀じて、心に取捨せざるべし。ただ當に勇進して菩薩の道を行ふべし。既に菩提心を證し已りなば、即ち往昔の某の時には如くの相あり、また其の時に於て、更に是の如くの事相ありき、皆是の如くの因緣の爲なりと知りて、其の先兆を鑒み、其の本末を識らざることなし。復次に行者、心明道を照見する時、即ち無盡の大願に於て堅固力を得、乃至毗盧遮那の金翅鳥王俯して法界の大海を觀ること、明鏡を視るが如くにして、止觀の翅を奮ひて天人の龍を搏つ、乃ち是れ勇健の菩提心なり。

秘密主、是の如くの法則の阿闍梨は、諸佛菩薩の稱歎したまふ所なりとは、衆德兼ね備はれるを以ての故に、即ち能く密教を流通して佛種を斷たず、是れを佛の眞子と名く。眞言行より生じて、常に衆聖のために稱歎せらる。若し弟子、瑜伽の行を修するときは、則ち能く此の上人を天龍八部の恭敬供養するを見、或は十方の諸佛、其の名號を稱して、大衆を勸發したまふを見ること、釋迦牟尼の菩薩薩陁波崙の求法の因緣を説き玉ひしが如し。

經に云はく、「復次に秘密主、彼の阿闍梨、若し衆生を見るに、法器となるに堪へて諸

垢を遠離し、大信解勤勇深信ありて、常に利他を念す」とは、即ち是れ阿闍梨の支分の中に、弟子を攝受する儀式を明すなり。此の中の衆生に二種あり。或は已に菩提心を發し、善智識の所に往詣して眞言の行法を求請し、或は未だ菩提心を發さざれども、而も師自ら之を鑒別して、彼れ法器となるに堪へて、能く此の法を持つべしと知る。或は瑜伽の中に於て彼の根緣を見るに、或は諸佛菩薩に囑累せられて、灌頂をなして之を教授せしめ、或は其のあたり衆聖の其れがために灌頂の法を作して、然して後付囑して其れを教授せしむるを見る。是の如くの相あらば乃ち法を傳ふ可し。貧里の穢食は寶器に置く可からず、輪王の妙藥は薄福の人に輒く之を服せしむ可からず、消化せざるを以ての故に、或は能く命を斷つが如し。故に須らく函蓋相稱して則ち授受すれば、皆其の宜しきを得。又弊衣の垢膩滋く甚だしければ頗に染色を加ふ可からず、先づ當に濯濯せしめて、然して後に以て綵繪の功を施す可きが如く、衆生も亦爾り。若し先習の垢染あるときは、法界の色に染まざるが故に、須らく諸垢を遠離すべし。有大信解とは、此の信解を梵音には(一)阿毗目底と云ふ。謂はく、明かに是の理を見て心に疑慮なし。井を鑿るに已に漸く泥に至りぬれば、未だ水を見ずと雖も、必ず近き

(1) 阿毗目底  
bhinnukiti